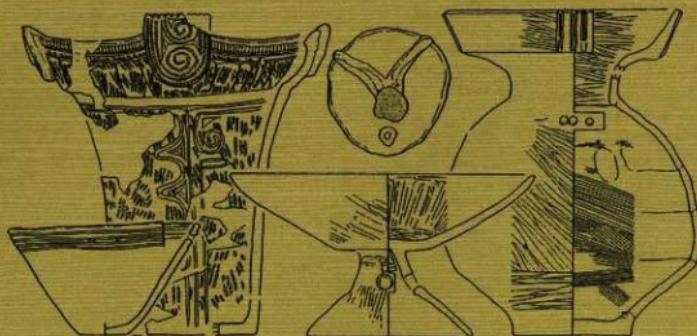


# 長田口遺跡

—— 県営中山間地域農村活性化総合整備事業  
「巨摩の郷地区櫛形活性化施設」建設に伴う発掘調査報告書 ——



2000. 3

櫛形町教育委員会  
峡中土地改良事務所

# 長田口遺跡

—— 県営中山間地域農村活性化総合整備事業  
「巨摩の郷地区櫛形活性化施設」建設に伴う発掘調査報告書 ——

2000. 3

櫛形町教育委員会  
峡中土地改良事務所



調査区より六科丘遺跡・甲府盆地を望む



7号土坑出土遺物



C-3区出土繩文土器



同裏面

## 序 文

檍形町は甲府盆地の西縁に位置し、檍形山の東麓に発達した町であります。釜無川右岸西方一帯は峠西地方と呼ばれ、本町は古来からこの地方の政治・経済・文化の中心地として栄えてきました。

檍形山山麓の台地からは、石器や繩文・弥生時代の土器が出土したり、住居跡なども多く発見されています。また、古墳も峠西地方唯一の前方後円墳である物見塚古墳をはじめ六科丘古墳、鎧物師屋古墳、狐塚古墳などがあり、これらの古墳とそこから出土した鉄剣、銅鏡、管玉、白玉などによってすでに5世紀前半には、この地方に有力な支配者が存在していたことが伺えます。

平成6年には、下市之瀬の鎧物師屋遺跡から、国の重要文化財に指定された土偶など205点が出土しましたが、美術的、学術的にも価値の高いものであると評されています。

この度、県営中山間地域農村活性化総合整備事業「巨摩の郷地区檍形活性化施設」の建設に伴い、檍形町平岡地籍で当地の埋蔵文化財である長田口遺跡の発掘調査を実施いたしました。その結果大きさが11メートル近くある大型の竪穴住居跡等が発見され、過去の調査の成果と合わせ考察するに、長田口の集落は弥生時代後期における峠西地域の拠点的な集落であったことが伺えます。

今回の調査につきましても、清水 博氏（町教育委員会生涯学習課課長補佐）が担当することになっていましたが、事業着手の直前に病に倒れ、8月25日に県立中央病院に入院されました。闘病中も病床から発掘調査の手順等を指示していましたが、楽石効なく、平成11年1月13日、49歳の若さで他界されました。

清水氏の教育文化行政、とくに埋蔵文化財の発掘調査、町民文化の振興に尽くされた功績は誠に多大であり、まだまだこれからのご活躍が期待されていただけに残念でなりません。心からご冥福をお祈り申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査、ならびに報告書作成に種々ご指導、ご協力をいただきました皆様に心から感謝申し上げます。

平成12年3月

檍形町教育委員会  
教育長 藤巻 進

## 例　　言

1. 本書は、県営中山間地域農村活性化総合整備事業「巨摩の郷地区郷土活性化施設」建設に伴い、山梨県統中土地改良事務所の委託を受け御形町教育委員会が実施した山梨県中巨摩郡御形町平岡字中畠1122-1他に所在する長田口遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成10年10月26日～平成11年2月5日までの約3ヶ月間に亘って実施した。また出土品の整理・報告書の作成はその他の事業の合間をねって平成11年2月6日～平成12年3月31日まで断続的に行なった。
3. 調査にあたった組織・調査参加者は以下の通りである。

調査主体者	御形町教育委員会	教育長	藤巻 進
調査担当者	清水 博（御形町教育委員会 文化財主事）	山下大輔（御形町教育委員会 委託職員）	
調　　査　員	若林初美・小口妙子（整理作業時）		
事　　務　局	御形町教育委員会文化財係		
調査参加者	相川春美・飯久保初美・入倉妙子・入倉とらえ・小笠原雪子・加藤由利子・川崎しげ美・神田久美子・小松スガ江・桜田和子・桜川定子・桜田みさえ・鈴木アサ江・長沼農子・生原浩美・山井伴三		
整理作業員	飯久保初美・今村紗里香・加藤由利子・神田久美子・北村利恵・東條久江・生原浩美・保坂奈々・望月その美・山井伴三		
4. 報告書作成に関わる継承は山下・若林・小口があたり執筆分担は下記の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章1、2、4、5節、第Ⅳ章1節………	山下
第Ⅲ章3節、第Ⅳ章2節……………	小口
5. 石器の材質は村松佳李氏（長坂町教育委員会）の鑑定による。また出土遺物の一部実測及び拓本を㈱シン技術コンサルに委託した。
6. 本報告書に関わる出土品及び記録閲面、写真等は御形町教育委員会に保管してある。
7. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導、ご協力をたまわった。記して謝意を表する次第である。

小野正文・高野玄明・森原明廣・中山誠二（山梨県教育委員会学術文化財課）、新津健・三田村美彦（山梨県立考古館）、小林健二・保坂和博（山梨県埋蔵文化財センター）、平野修・畠大介・鈴木稔・森原千恵子・中山千恵・伊藤千代美・宮沢公雄（帝京大学山梨文化財研究所）、小宮山隆・村松佳李（長坂町教育委員会）、広瀬和博（甲西町教育委員会）、青木一男（長野県埋蔵文化財センター）、中沢道彦（長野地方事務所）

## 凡　　例

1. 遺構番号は原則として確認順である。

但し整理作業時において15号土坑、32号土坑は搅乱の為欠番とした。また、発掘調査時において28号土坑と付けたものは1号埋設土器と改めた。

2. 遺構、遺物の挿図及び表の指示は下記の通りである。

### 1) 遺構

- ・実測図の水糸レベルは海拔高を示し、単位はmである。
- ・主軸方位は直交する柱穴間線から得た長軸と真北とのなす角度である
- ・規模は相対する壁の最長距離で求めている。
- ・スクリーントーンの~~□□□□~~は焼土範囲、~~△△△△~~は炭化物の範囲、~~○○○○~~は粘土範囲を、ドットマーク・は土器分布状況を示す。
- ・遺物番号は本文、挿図、表、写真図版で全て一致する。

### 2) 遺物

- ・土器実測図のスクリーントーンは赤色部を示す。

・土器観察表においてAは法量、Bは遺存率、Cは調整、Dは胎土、Eは色調、Fは焼成、Gは特記事項を示す。さらにAの法量はlが口径、bが底径、hが器高を表し、単位はcmである。また、法量の( )内は推定値である。

3. 図版・本文中における色調説明には『標準土色帖(1992年版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財団法人日本色彩研究所色票監修)に基づき記述した。

# 目 次

## 序 文 例 言 凡 例

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	1
第Ⅱ章 遺跡の概観	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
(1) 遺跡周辺の歴史的環境	3
(2) 過去の調査について	5
第3節 基本的層序	6
第Ⅲ章 発見された遺物と遺構	8
第1節 旧石器時代の遺物	8
第2節 縄文時代の遺構と遺物	8
(1) 黒色土グリッド集石群・集石と出土遺物	8
(2) 土坑・埋設土器と出土遺物	24
(3) 遺構外出土遺物	38
第3節 弥生～古墳時代の遺構と遺物	42
(1) 始穴住居址	42
(2) 遺構外出土遺物	61
第4節 その他の遺構・遺物	
(1) 溝状遺構	64
第5節 試掘調査	65
第Ⅳ章 調査の成果と課題	
第1節 旧石器時代～縄文時代の遺構と遺物について	67
(1) 旧石器時代	67
(2) 縄文時代中期	67
(3) 縄文時代後期	67
(4) 縄文時代晚期	68
第2節 弥生時代～古墳時代の遺物について	70
(1) 長田口遺跡出土土器の編年的位置付け	70
(2) 外来系土器について	70

## 挿図目次

第1図 遺跡周辺地形図 (1/2500) .....	2	第39図 14号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	31
第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1/25000) .....	4	第40図 16号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	31
第3図 遺構配置図 (1/400) .....	7	第41図 17号・18号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	32
第4図 旧石器 (2/3) .....	8	第42図 19号・20号土坑・1号埋設土器出土状況 (1/30) .....	32
第5図 黒色土グリッド集石群 (1/120、1/40) .....	9-10	第43図 20号土坑・1号埋設土器出土遺物 (1/3) .....	33
第6図 A-2区出土遺物 (1/3) .....	11	第44図 21号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	34
第7図 A-3区出土遺物 (1/3) .....	12	第45図 22号土坑 (1/30) .....	34
第8図 A-4区出土遺物 (1/3) .....	12	第46図 23号土坑 (1/30) .....	34
第9図 A-6区出土遺物 (1/3) .....	12	第47図 24号土坑 (1/30) .....	34
第10図 B-2区出土遺物 (1/3) .....	13	第48図 25号土坑 (1/30) .....	35
第11図 B-3区出土遺物 (1/3) .....	13	第49図 26号土坑 (1/30) .....	35
第12図 B-4区出土遺物 (1/3) .....	14	第50図 12号・27号・30号土坑 (1/30) .....	35
第13図 B-5区出土遺物 (1/3) .....	15	第51図 12号・27号・30号土坑出土遺物 (1/3) .....	36
第14図 B-6区出土遺物 (1/3) .....	16	第52図 29号土坑 (1/30) .....	36
第15図 C-2区出土遺物 (1/3) .....	16	第53図 29号土坑出土遺物 (1/3) .....	37
第16図 C-3区出土遺物(1) (1/3) .....	17	第54図 31号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	37
第17図 C-3区出土遺物(2) (1/3) .....	18	第55図 33号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	38
第18図 C-3区出土遺物(3) (1/3) .....	19	第56図 34号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	38
第19図 C-4区出土遺物(1) (1/3) .....	19	第57図 遺構外出土遺物(1) (1/3) .....	38
第20図 C-4区出土遺物(2) (1/3) .....	20	第58図 遺構外出土遺物(2) (1/3) .....	39
第21図 C-4区出土遺物(3) (1/3・2/3) .....	21	第59図 遺構外出土遺物(3) (1/3) .....	40
第22図 C-5区出土遺物 (1/3) .....	21	第60図 遺構外出土遺物(4) (1/3) .....	41
第23図 3号集石出土遺物(1) (1/3) .....	22	第61図 1号住居址出土遺物 (1/3) .....	42
第24図 3号集石出土遺物(2) (1/3) .....	23	第62図 1号住居址・炉 (1/60・1/30) .....	43
第25図 1号土坑 (1/30) .....	24	第63図 2号住居址・遺物出土状況 (1/60・1/30) .....	44
第26図 2号土坑 (1/30) .....	24	第64図 2号住居址・出土遺物(1) (1/3) .....	46
第27図 3号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	25	第65図 2号住居址・出土遺物(2) (1/3) .....	47
第28図 4号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	25	第66図 3号住居址・炉 (1/60・1/30) .....	48
第29図 5号土坑・出土遺物 (1/30・1/3) .....	25	第67図 4号住居址・炉 (1/60・1/30) .....	49
第30図 6号・7号土坑 (1/30) .....	26	第68図 4号住居址・出土遺物 (1/3) .....	50
第31図 6号・7号土坑出土遺物(1)(1/3・1/4) .....	27	第69図 5号住居址・炉 (1/60・1/30) .....	51
第32図 6号・7号土坑出土遺物(2) (1/3) .....	28	第70図 6号住居址・出土遺物 (1/3) .....	52
第33図 8号土坑 (1/30) .....	29	第71図 6号住居址・炉 (1/60・1/30) .....	53
第34図 9号土坑 (1/30) .....	29	第72図 7号住居址・炉 (1/60・1/30) .....	54
第35図 10号土坑 (1/30) .....	29	第73図 7号住居址・出土遺物 (1/3) .....	55
第36図 10号土坑出土遺物 (1/3) .....	30	第74図 8号住居址 (1/60) .....	57
第37図 11号土坑 (1/30) .....	30	第75図 8号住居址・出土遺物 (1/3) .....	57
第38図 13号土坑 (1/30) .....	30	第76図 9号住居址 (1/60・1/30) .....	58
		第77図 9号住居址・出土遺物 (1/3) .....	59

第78図 遺構外出土遺物(1) (1/3) (条痕文系)	61	第81図 試掘トレーン配溝図・セクション図(1/600・1/160)	65
第79図 遺構外出土遺物2(1/3) (弥生後期後半～古墳)	62	第82図 試掘出土遺物(1) (1/3・2/3) (縦文)	66
第80図 遺構外出土遺物3(1/3) (弥生後期後半～古墳)	63	第83図 試掘出土遺物(2) (1/3) (弥生～古墳)	66

## 表 目 次

第1表 1号住居址出土遺物観察表	42	第7表 8号住居址出土遺物観察表	56
第2表 2号住居址出土遺物観察表(1)	45	第8表 9号住居址出土遺物観察表	60
第3表 2号住居址出土遺物観察表(2)	47	第9表 遺構外出土遺物観察表 (条痕文系)	62
第4表 4号住居址出土遺物観察表	50	第10表 遺構外出土遺物観察表(1)	63
第5表 6号住居址出土遺物観察表	52	第11表 遺構外出土遺物観察表(2)	64
第6表 7号住居址出土遺物観察表	56	第12表 試掘出土遺物観察表	66

## 写真図版目次

卷頭図版 1 調査区より六科丘遺跡・甲府盆地を望む	(3) 8号住居址遺物出土状況 (部分)
卷頭図版 2 7号土坑出土遺物	(4) 8号住居址遺物出土状況 (部分)
卷頭図版 3 C-3区出土縄文土器	図版 8 (1) 9号住居址 (2) 9号住居址遺物出土状況 (全景) (3) 9号住居址遺物出土状況 (部分) (4) 9号住居址遺物出土状況 (部分)
図版 1 調査区全景	
図版 2 遺跡より富士山を望む	
図版 3 (1) 1号住居址 (2) 1号住居址炉 (3) 1号住居址炉出土状況 (4) 1号住居址遺物出土状況 (全景) (5) 1号住居址	図版 9 (1) 1号土坑 (2) 2号土坑 (3) 3号土坑 (4) 4号土坑 (5) 5号土坑 (6) 6号・7号土坑
図版 4 (1) 2号住居址遺物出土状況 (全景) (2) 2号住居址遺物出土状況 (部分) (3) 2号住居址 (4) 2号住居址遺物出土状況	図版 10 (1) 7号土坑遺物出土状況 (部分) (2) 7号土坑遺物出土状況 (全景) (3) 9号土坑
図版 5 (1) 3号住居址 (2) 4号住居址 (3) 4号住居址炉遺物出土状況 (4) 4号住居址遺物出土状況 (5) 4号住居址遺物出土状況 (部分)	(4) 21号土坑 (5) 29号土坑遺物出土状況 (6) 12号・27号・30号土坑遺物出土状況
図版 6 (1) 5号住居址 (2) 6号住居址 (3) 6号住居址炉	図版 11 (1) 2号集石 (2) 2号集石 (東より) (3) 2号集石 (部分)
図版 7 (1) 7号住居址 (2) 8号住居址	図版 12 (1) 清状遺構 (東より) (2) 清状遺構 (西より) (3) 3号集石 (東より) (4) 3号集石 (西より)

- 図版13 (1) 黒色土グリッド集石群（西より）  
(2) 黒色土グリッド集石群（北東より）  
(3) 黒色土グリッド集石群（北より）
- 図版14 (1) 石皿・石棒出土状況（B 5・C 5区）  
(2) 石棒出土状況（B 5・C 5区）  
(3) 深鉢形土器出土状況（3号集石）  
(4) 深鉢形土器出土状況（C 3区）  
(5) 1号埋設土器出土状況  
(6) 黒曜石の原石（A 2区）  
(7) 黒曜石の原石出土状況（A 2区）
- 図版15 黒色土グリッド出土土器(1)（縄文）
- 図版16 黒色土グリッド出土土器(2)（縄文）

- 図版17 黒色土グリッド集石群出土土器（縄文）
- 図版18 土坑出土土器・土製品（縄文）
- 図版19 石器（打製石斧・磨製石斧・石匙・凹石）
- 図版20 石器（凹石・石棒・石皿・黒曜石・石匙・スクレイパー・石錐・石鏃、旧石器）
- 図版21 住居址出土土器（弥生～古墳）
- 図版22 住居址・遺構外出土土器（弥生～古墳）
- 図版23 調査区作業風景
- 図版24 2号住居址炉取り上げ作業風景
- 図版25 体験発掘作業風景
- 完成した『ほたるみ館』

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯と経過

山梨県は地域の農業振興および活性化を目的として県営中山間地域農村活性化総合整備事業（以下 中山間事業）において橿原町平岡に「巨摩の鷺地区橿原活性化施設」を建設することを計画した。工事主体者である峠中土地改良事務所は橿原町農林商工課を通じ活性化施設予定地内における埋蔵文化財の有無および取り扱いを橿原町教育委員会に問い合わせた。橿原町教育委員会ではそれを受け現地踏査および遺跡台帳で確認を行い、当該地は周知の埋蔵文化財である長田口遺跡の範囲内にあたっていることを確認し試掘調査を実施した。調査の結果、住居跡と思われる遺構や縄文土器・弥生土器などが検出され本格的な発掘調査が必要であると判断し、その旨を土地改良事務所に回答した。橿原町教育委員会では山梨県教育委員会学術文化財課の指導を受け平成10年秋をめどに発掘調査を行うことで峠中土地改良事務所と具体的な協議に入り、平成10年度内に報告書作成まで行うこととして協定を締結した。しかし、発掘調査直前に担当する文化財主事が体調を崩し入院し発掘調査中の平成11年1月13日に急逝、加えて他の開発事業に伴う発掘調査も進行中という事態も重なり、年度内の報告書作成は困難となった。そこで、峠中土地改良事務所の理解を得て協定内容を変更し、平成10年度には発掘調査・整理作業、平成11年度には報告書作成を行うことで合意した。

## 第2節 調査の方法

調査対象面積3881m<sup>2</sup>の内、南半分に関しては盛上保存を行うこととし、北半分の1589m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。調査の方法はコンピューターによる遺跡調査システムを採用した。現場の調査では使用しないが整理作業時に使用する為に調査区全体に10m方眼の仮想グリッド（南から北へI～IV、西から東へa～h）を設定し光波測量器、コンピューターを利用し遺物の取り上げ・遺構の図化を行った。また、遺物、石の出土状況の図化に関しては平板尖端、簡易造り方実測用い光波測量器と連携し迅速な調査を心がけた。

調査は平成10年10月26日に着手し、重機により30～40cmの厚さの表土を除去し鏝籠等により確認精査し各遺構の調査を進めた。調査を進める中で遺跡南側より試掘調査時には確認できなかった縄文時代後期の遺物包含層および集石が検出された。図面を書く作業員をそれほど確保していないこともあり、この集石の図化及び調査に手間取り当初2ヶ月と予定していた調査期間が伸びることになった。この遺物包含層では多くの縄文土器・石が検出された。調査現場ではグリッド杭の設置をせず、包含層内の遺物の取り上げ・図化に支障を来たす恐れがあったので前述の仮想グリッドと合わせグリッドが2つになるが遺物包含層に任意のグリッド（黒色土グリッド 南から北へA～C、東から西へ1～6 第5図）を設定した。



第1図 道路周辺地形図 (1/2,500)

## 第II章 遺跡の概観

### 第1節 地理的環境

櫛形町は南アルプスの前衛山である巨摩山地主峰櫛形山の東麓に発達した町で、町名も字の如く櫛の形をした櫛形山に由来している。地形的に櫛形町は西より櫛形山を中心とする山地、市之瀬台地を中心とする台地、御動使川が造りだした日本有数の複合扇状地によって構成され、対照的な様相を呈している。

櫛形山を首座とする巨摩山地は糸魚川—静岡構造線の一部を担っており、櫛形山においてもこの構造線の構成要素である断層帯や断層崖が幾条か認められる。また、巨摩山地は一様に標高2000m内外の高度を有し、標高1800m以上の地帶にはコメツガ・シラビソなどの原生林が残されている。

櫛形山の東麓に広がる市之瀬台地は櫛形山東麓の落下地塊を基盤として生成された更新世の扇状地が甲府盆地の形成によった地殻変動に伴い形成された丘陵状の地形である。台地は南北4km、東西2.5kmの扇形をしており、標高は400~500mを測る。この台地の西端は断層運動によって生じた小円頂が並び比高差100~120mを有する断層崖によって盆地床の扇状地と分けられている。甲州盆歌に「いかなる江戸の絵描きでも 平岡の柚子の香 絵にも描けまい」と台地上の平岡地区のことが歌われていることからも伝えるようにかつては柚子を中心とする農作物の産地として有名であり、砾や粘土・砂利などで構成される台地下の扇状地と異なって台地上は耕作に適した良質なローム層で覆われている。また市之瀬台地は北から御手洗川・深沢川・漆川・市之瀬川・秋山川等の櫛形山より流れ出る諸河川によって開拓されている。これらの諸河川は上流で18~20°という急激な勾配で櫛形山から大量の土砂を削りだし台地の出口の谷部に至ってそれを堆積させ扇状地を造り出している。その後、川は緩やかな流れへと変化し台地の東の盆地へと流れ込んでいるが、これらの諸河川が造り出す扇状地は日本でも有数な御動使川が造り出す扇状地とあいまって複雑な複合扇状地を形づくりている。

櫛形町はその変化にとんだ地形により古くから「山方」・「根方」・「原方」・「田方」と呼び分けられているが、「原方」と呼ばれる扇状地の山側の端部は特に「原七郷」と呼ばれ、「原七郷は月夜も焼ける」と言われるほど地下水位が深く水に乏しい乾燥地帯となっている。「原七郷」に所在する各集落は灌漑施設や上水道が整う以前には白根町源などの水の豊かな集落より水を買っていたという。しかし逆にその水捌けの良さから、灌漑施設の整った現在では桑畠や果樹園に適した土地として利用され桃やスマモなどの出荷が盛んである。

扇状地で地下にしみこんだ水は若草町の鏡中条・十日市場や甲西町の江原・鮎沢などの扇端部において再び湧き出し、水量の豊富な低地を形成している。この辺りから釜無川の氾濫原に続く一帯は「田方」と呼ばれ、文字通り水田を主体とする地域となっている。

今回発掘調査が行われた長田口遺跡は前述の市之瀬台地のほぼ中央に位置し、標高は430m前後をはかる。発掘調査地点は櫛形山から流れ出る漆川と市之瀬川によって削られて形成された支丘の南縁に位置し、隣接する漆川とは比高差30m程の急峻な斜面をもって区別される。南から北に高くなる緩斜面は大変見晴らしがよく、天気がよければ富士山を望むことができる。

### 第2節 歴史的環境

#### (1) 遺跡周辺の歴史環境

釜無川の右岸、櫛形山の山裾に発達した櫛形町は地形的に山地・台地・扇状地と大きく三分される。町内には現在約260余りの遺跡が確認されており、そのほとんどが台地と扇状地に認められるが、櫛形山を中心とする山間部においても繩文時代の遺跡や中世の城跡などが若干確認されている。

市之瀬台地上の六科丘遺跡⑩・長田口遺跡⑪・長田A遺跡⑫などでは旧石器時代のナイフ型石器や石刃などが発見され、この台地上において2万年以上もの昔に人類が生活していたことがわかっている。



A. 長田口

1. 北岸C 2. 北峯A 3. 丸山E 4. 大山A 5. 北新所C 6. 舞鹤古墳 7. 弓削古墳C 8. 松前能采B 9. 管根 10. 西原 11. 無名墳
12. 久保田A 13. 長田A 14. 長田口 15. 東原B 16. 新所田A 17. 六村丘古墳 18. 六糸丘 19. 新所田B 20. 上ノ木 21. 山道活E 22. 上の山
23. 横城 24. 西側田 25. 吉屋敷 26. 東久保A 27. 上ノ東古墳 28. 物見塚古墳 29. 大畠 30. コウモリ塚古墳 31. 旗塚古墳 32. 動物園黒木塚
33. 上村古墳 34. 動物園 35. ノ木 36. (伝) 小笠原氏塚 37. 宮原 38. 水面B 39. 蝶作A 40. 南原C 41. 吉田西原A 42. 十五所 43. 梶杷B
44. 村前東A 45. 角力場第2 46. 新所道下 47. 二本柳 48. 向河原 49. 油田 50. 村内 51. 中川田 52. 佐吉 53. 西原 54. 大峰東丹保

第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1/25,000)

縄文時代の遺跡も市之瀬台地上を中心に確認されている。大畠遺跡②や曾根遺跡⑨や鎧物師屋遺跡⑩などにおいては縄文時代早期や前期の土器片が発見されているが遺構に伴ったものではない。しかし、曾根遺跡では多くの縄文時代前期後葉の土器が出土し、この時代には人が確実に定住していたことを示している。現在までの発掘調査の成果によると櫛形町内において遺跡が増加するのは縄文中期からである。長田A遺跡・長田口遺跡・上の山遺跡⑪・古屋敷遺跡⑫などの台地上の遺跡では中期初頭から後葉までの遺物が発見されている。また鎧物師屋遺跡は隣接するノ木遺跡⑬と一体の集落で環状に配された縄文時代中期中葉の住居址32軒などが調査されて集落のはば全容が明らかにされた。この遺跡は從来縄文時代の遺跡がないと考えられていた盆地の扇状地であり、国の重要文化財に指定された円錐形土偶などの芸術的にも学術的にも価値の高い遺物の発見とあいまって注目される遺跡である。縄文後期・晩期になると櫛形町内及び周辺の遺跡は極端に少くなり遺物は発見されるも遺構が伴わないものがほとんどとなる。

弥生時代では中期の集落はまだ検出されていないが十五所遺跡⑭・二本柳遺跡⑮・油田遺跡⑯・大師東丹保遺跡⑰などで当該期の土器が発見され、また向河原遺跡⑯で水田址が調査されるなど扇状地において厚い堆積物に覆われて当該期の遺跡が存在することがわかつた。弥生時代後期後半の時期には扇状地に十五所遺跡・村前東A遺跡⑯・枇杷B遺跡⑯・大師東丹保遺跡⑯・台地に上の山遺跡・上ノ東遺跡⑯・六科丘遺跡遺跡・長田口遺跡などの集落が存在する。

古墳時代前期では地域の拠点的集落とも言える村前東A遺跡の発掘調査がおこなわれ、東海系のS字状口縁台付窓が多数出土している。櫛形町内では中期・後期の集落はまだ発見されてないが扇状地の甲西町内遺跡⑯や若草町新居道下遺跡⑯で当該期の住居址が発掘されている。また、市之瀬台地を構成する丘陵のそれぞれの先端部には甲府盆地を臨むように物見原古墳⑯・上ノ東古墳⑯・六科丘古墳⑯・無名墳⑯などの前期～中期古墳が存在しており、甲府盆地東部の前期古墳群との関係を考える上でこれらの古墳は注目される。後期になると古墳は台地を下った扇状地に作られるようになる。櫛形町の福原町の甲西町には「塚原」という字名の土地があり、文字通り多くの古墳が存在していたと伝えられるが開発等により削平されたものが多く詳細は不明である。塚原に続く櫛形町下市之瀬には狐塚古墳⑯・鎧物師屋古墳⑯などの横穴式石室を持つ後期古墳が散在する。

律令体制以後の櫛形町一帯は『和妙類聚抄』に所載される甲斐国・巨摩郡九郷の一つである「大井郷」に比定されている。奈良時代から平安時代の集落としては鎧物師屋遺跡・村前東遺跡・枇杷B遺跡・角力場第2遺跡⑯などの扇状地扇尖部から扇端部にかけての遺跡が発掘され、当該期の様相が明らかになってきている。その後、律令体制が崩壊してくる平安時代末になると甲斐国甲斐源氏の一族が台頭してくる。櫛形は甲斐源氏の一派にあたる小笠原氏発祥の地として知られ、氏祖小笠原長清が挙ったとされる（伝）小笠原館跡⑯が櫛形町小笠原に所在する。

## （2）過去の調査について

長田口遺跡は市之瀬台地のほぼ中央に位置している。山梨県は市之瀬台地を南北に横断する富士川西部広域農道の建設を計画し、それに先立って山梨県教育委員会が1988年度から1991年度まで4次にわたり遺跡の南北に大きなトレンチを入れるような形で5000m<sup>2</sup>の発掘調査をおこなった。調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居4軒(五領ヶ台～猪沢町の住居2軒・時期不明2軒)、弥生時代後期後半から古墳時代の堅穴住居25軒、中世の地下式坑13基、縄文時代から中世にかけての土坑108基、時期不明の溝状遺構が42条検出された。その中で主体を占めるのは弥生時代後期後半の遺構で特に住居址では長径が12m前後の大型住居址が8軒検出された。また、中世の溝状遺構に流れ込んで出土したものではあるが東日本で4例目となるベンダント状に2次加工された後漢鏡片が出土し、前述の大型住居址と合わせ本遺跡が当該期の拠点的な集落であることが予想された。今回櫛形町教育委員会で発掘調査をおこなった場所は県の第1次調査地のすぐ西側にあたる。

### 第3節 基本層序

調査地点は緩斜面から台地平坦面へ向かう北半分と漆川に向かって落ち込み始める南半分では著しく層序が異なっている。

北半分は20~30cmの耕作土の直下が遺構確認面（ソフトローム層）となっている。南半分（第5図）においては南側の台地下方に向かうにつれて黒褐色の土（黒色土グリッド 基本土層Ⅰ・Ⅱ）が厚く堆積している。

第Ⅰ層 黒褐色土。しまり強く、粘性にかける。粒子は密。

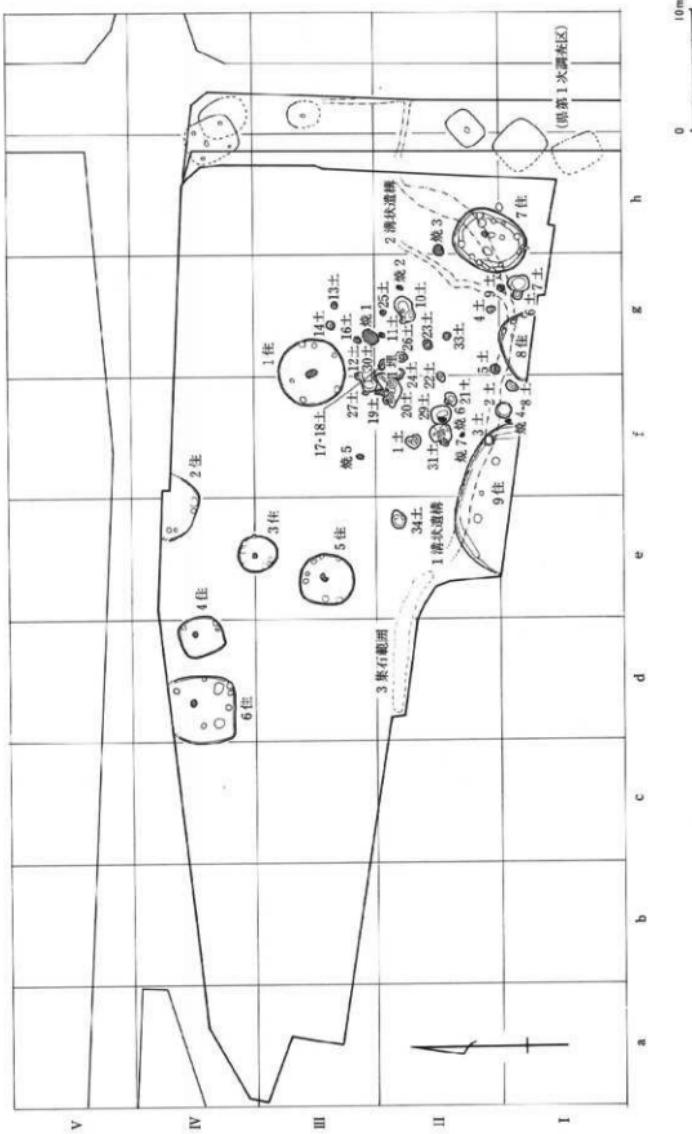
第Ⅱ層 黒褐色土。しまりあり、粘性ややあり。黒色土粒子（直径1~5mm）を多量に含んでいる。

第Ⅲ層 黄灰色。しまりあり、粘性やや強い。ローム粒子を含む。

この遠路南半分の黒色土グリッドにおいては第Ⅲ層上面が遺構確認面となっている。Ⅰ層~Ⅱ層にかけては多くの縄文時代後期の土器片が出土した。また、第5図のような台地上には自然に存在しない多量の礫が確認されたのはⅡ層中において（註1）である。縄文時代の土坑等が確認面はⅢ層下のソフトローム面においてである。

註1 このⅢ層下より古墳時代初頭の7・8・9号住居址が検出されたが、7・8・9号住居址は台地の傾斜がきつくなる遺跡南側にあるためⅠ・Ⅱ・Ⅲ層を振り込んで住居をつくったものが、住居の廃絶後に上方からⅠ・Ⅱ・Ⅲ層の土が再び流れ込んで土層の逆転が起こったものだと考えられる。

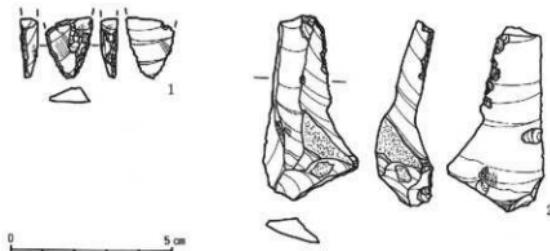
第3図 遺構配置図 (1/400)



## 第III章 発見された遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代の遺物

本遺跡の調査において旧石器時代の遺物が検出された。1はナイフ形石器の基部。胴部上半は欠損している。素材として縦長剝片を使用し、表面の両側縁に調整加工を施している。重量は5kgを量る。石材は黒曜石。2は二次加工のある剝片。縦長剝片の一部に二次加工を施し、刃部を作っている。剝片の打点は残っていない。石材は黒曜石で重量は29kgを量る。これらの遺物はともに遺構確認作業中において偶然発見されたものである。



第4図 旧石器 (2/3)

### 第2節 縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 黒色土グリッド集石群・集石と出土遺物

##### 1 黒色土グリッド集石群 (第5図)

調査区南側の東西30m×南北15mの範囲(黒色土グリッド)から基本的には台地上に存在しない人頭大から大きさは大人数人でも持ち上げられないような礫が多量に検出された。また、このグリッド内からは多量の縄文時代後期前半を中心とする土器片が出土した。

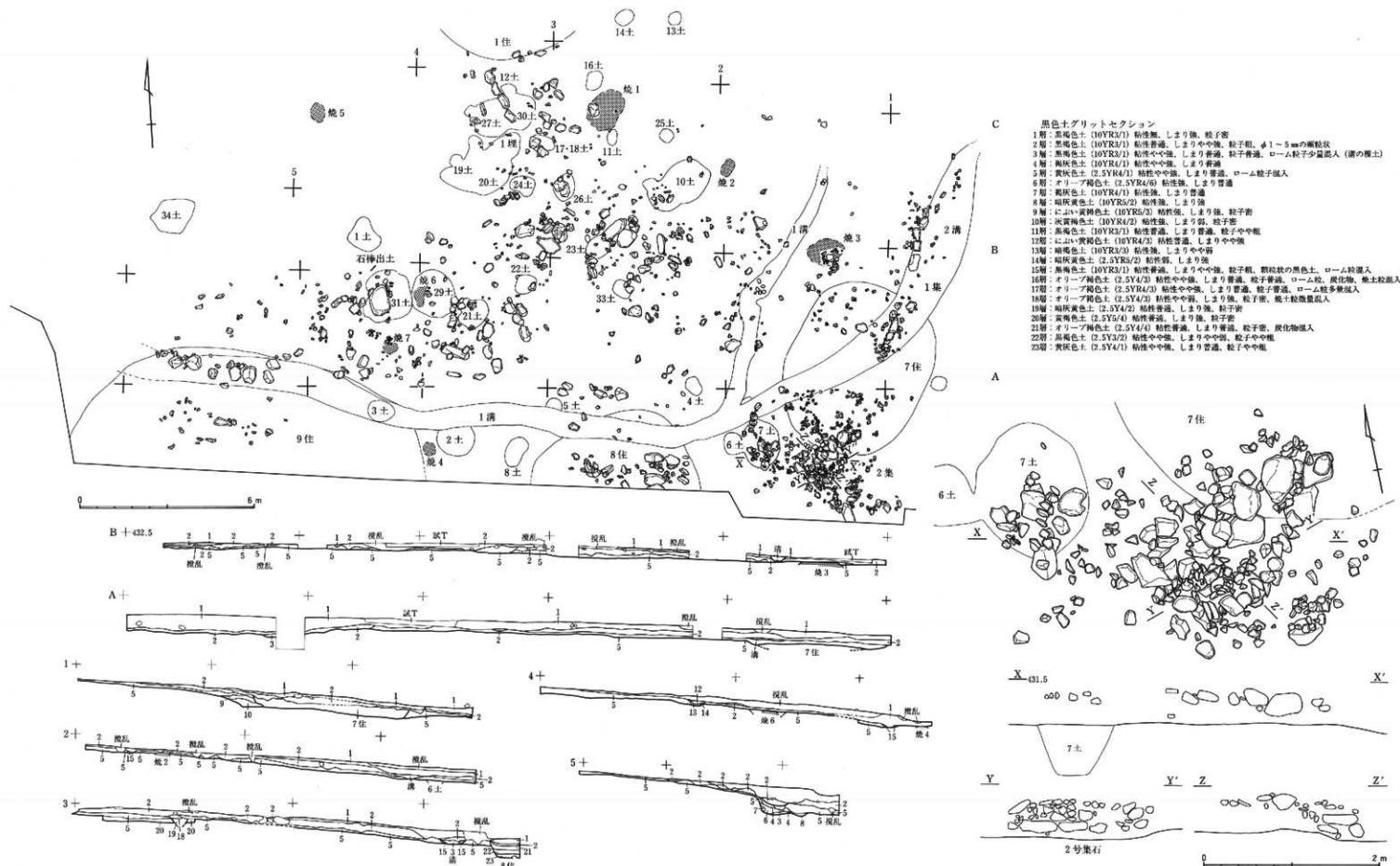
##### 2 黒色土グリッド出土遺物 (第6~24図、図版13~20)

多量の縄文土器が出土したがほとんどが破片資料で図示できたのは代表的なもの一部である。時期としては縄文時代中期~晚期にわたっている。特に黒色土グリッドC-3区と同C-4区にかけて遺物の出土量が多かった。

##### A-2区出土遺物

1~2は縄文時代後期前葉、共に壇之内1式土器に比定される。3~5は縄文時代晚期終末の浮線文系土器。3は沈線で5条の線を引いており、外側には赤色塗彩の施された痕跡が認められる。4は外側に4条、内側に2条の沈線がめぐる。

5は黒曜石のスクレーパー。原石の形をそのままにして、一辺に刃部を作り出している。重量は157gを量る。6~8は黒曜石の原石。5のスクレーパーとあわせ4つまとめて出土した。これら原石は角礫状で人為的な打ち欠きは認められず、スリガラス状の自然面が1部に残る。重量は6が296g、7が401g、8が940gを量る。



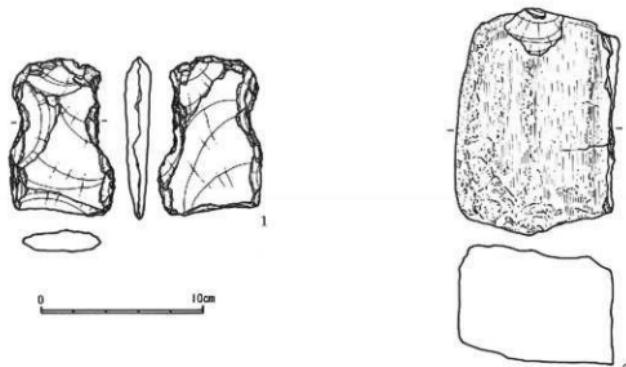
第5図 黒色土グリット集石群 (1/120・1/40)



第6図 A-2区出土遺物 (1/3)

A - 3 区出土遺物

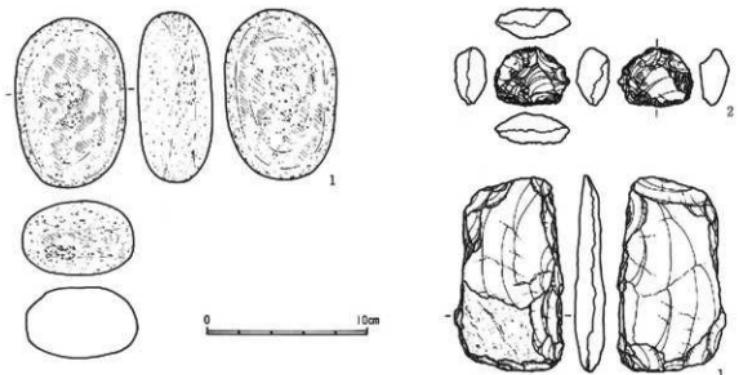
1は撥形の打製石斧。刃部は欠損している。石材は頁岩か。2は砂岩製の砥石。石質が砂岩質と珪質とが互層になっていて、その砂岩質のところを砥石として利用している。



第7図 A-3区出土遺物 (1/3)

A - 4 区出土遺物

1は安山岩製の凹石。表裏面ともに2ヶ所づつ凹みがある。表・裏・下面に磨面がある。2は黒曜石製のビエス・エスキュー。



第8図 A-4区出土遺物 (1/3)

A - 6 区出土遺物

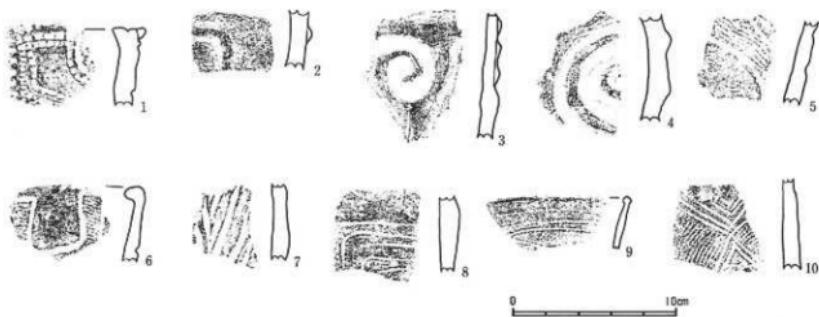
1は短冊形の打製石斧。石材はホルンフェルス。

第9図 A-6区出土遺物 (1/3)



B-2区出土遺物

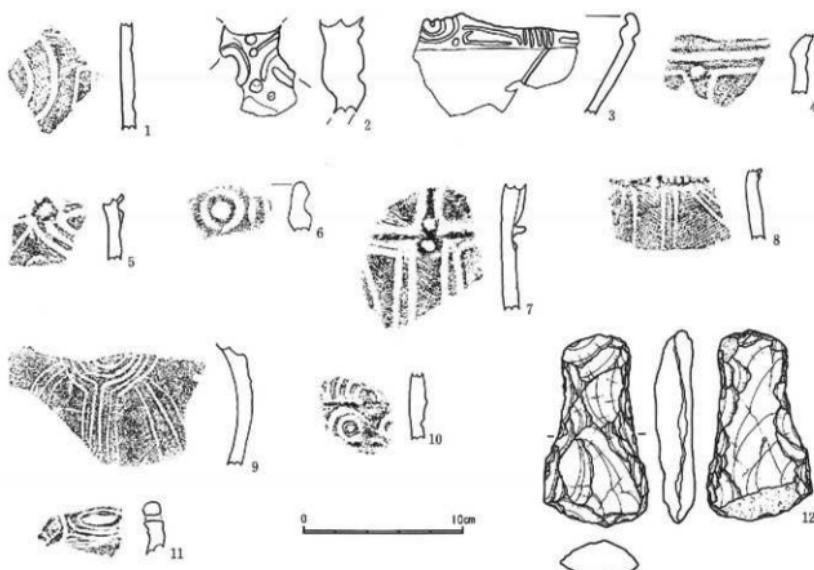
1~2は猪沢式土器。3~4は曾利IV式に比定される。5~6は称名寺式土器。7~10は堀之内式土器。7は堀之内1式、8~10は堀之内2式に比定される。



第10図 B-2区出土遺物 (1/3)

B-3区出土遺物

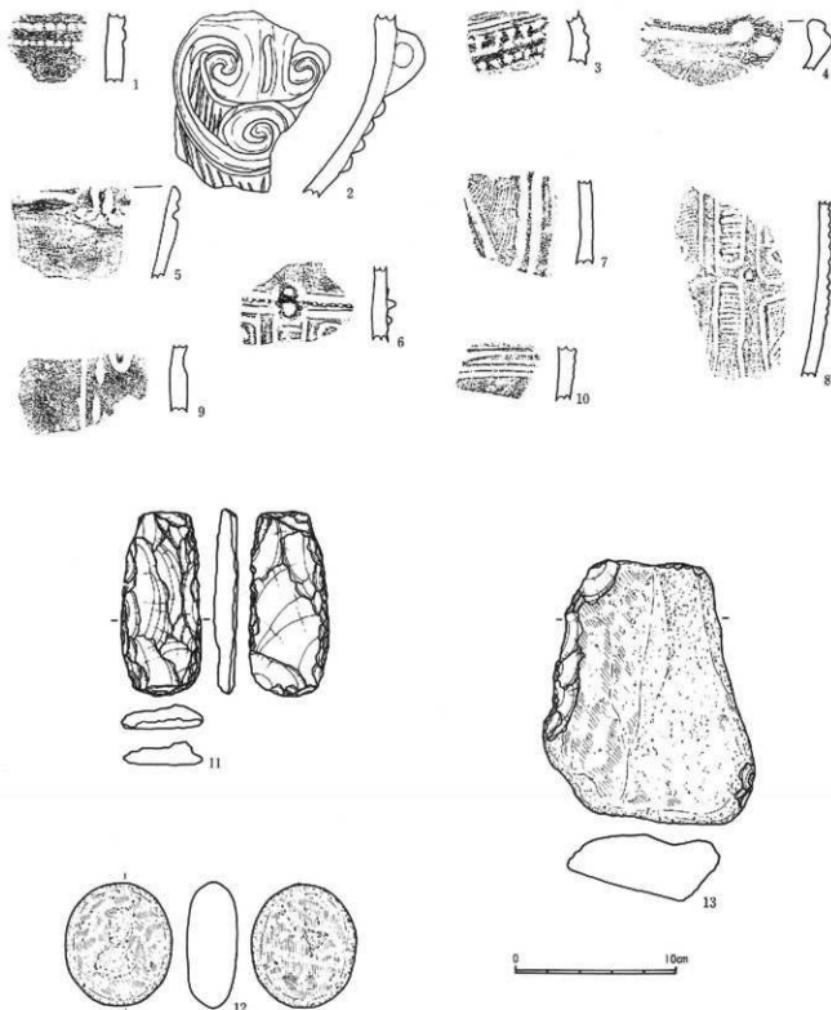
1は称名寺式土器。2~11は堀之内式土器。2~10は堀之内1式に比定され、11は堀之内2式に比定される。12は撥形の打製石斧。石材は砂岩。



第11図 B-3区出土遺物 (1/3)

B-4区出土遺物

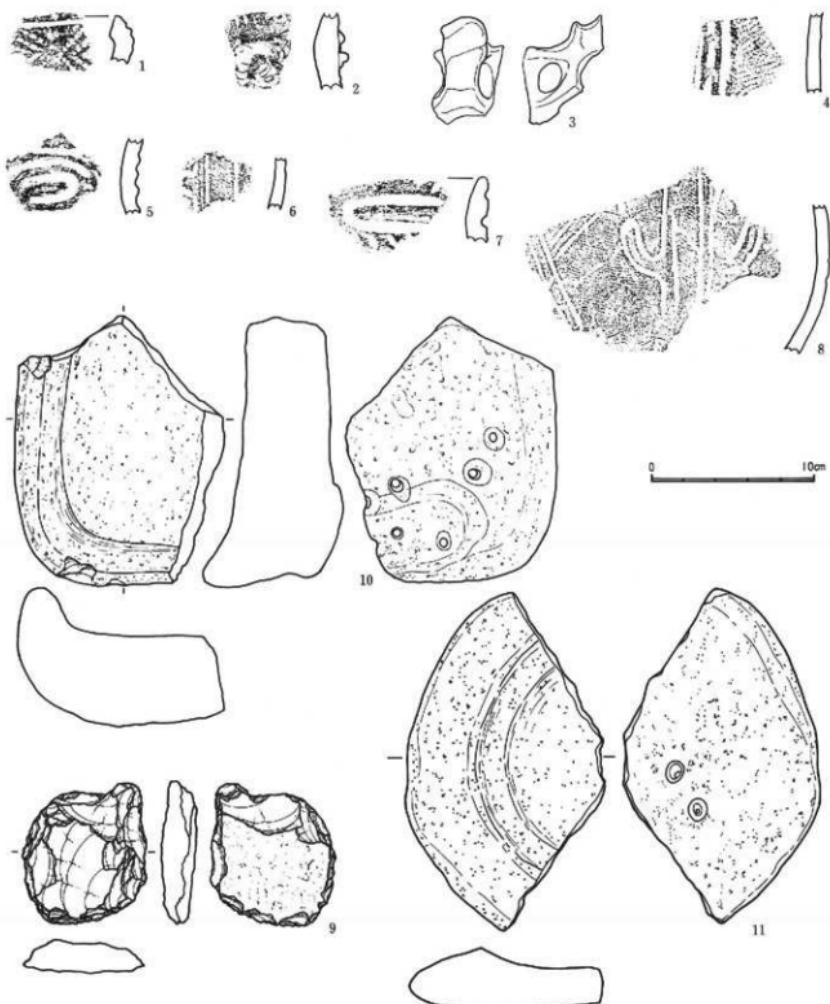
1は猪沢式土器。2～3は曾利式土器。4～9は堀之内1式に比定される。10は晩期終末の浮線文土器。11は短冊形の打製石斧。石材はホルンフェルス。12は磨石。表面に2つ、浅い凹みがあり、表裏面が磨面。石材は石英斑岩か。13は凝灰岩製の礫器。不定形な自然礫の一辺に、片面だけの加工による刃部を作っている。



第12図 B-4区出土遺物 (1/3)

B-5区出土遺物

1~2は中期中葉。1は猪沢式土器、2は藤内1式に比定される。3~8は堀之内式1土器。3は注口土器の把手部分。9は粘板岩製の打製石斧。胸部から刃部が欠損している。10~11は石皿。10は作業面がほぼ平坦で、裏面に脚部がつく。11はあまり深くない凹みのある作業面で、縁は幅がある。裏面に2個直径1cm前後の凹みがある。石材は10・11ともに安山岩。



第13図 B-5区出土遺物 (1/3)

B - 6 区出土遺物

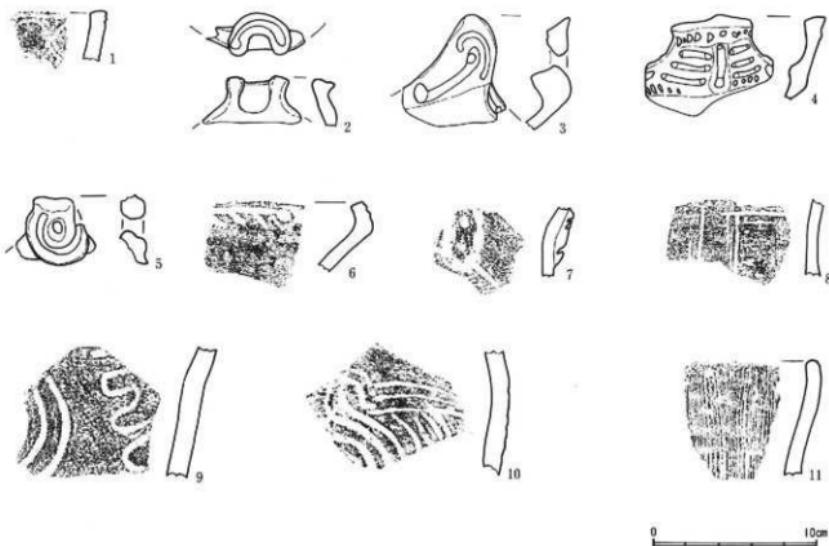
1は堀之内1式に比定される。沈線施文後に単節R L繩文を施している。



第14図 B-6区出土遺物 (1/3)

C - 2 区出土遺物

1は猪沢式土器。2~10は堀之内1式土器。11は繩文後期。



第15図 C-2区出土遺物 (1/3)

C - 3 区出土遺物

1は繩文時代中期初頭の深鉢形土器で五領ヶ台2式の終末に位置付くであろう。口縁部には粘土板を貼り付けた2種類の突起が対で計4単位構成となっている。ハート状の粘土板が貼り付けられた突起は細い押引き文がハートの外周に施文され、さらに中をヘラ状工具による細い沈線で抽象的な人面装飾が描かれている。口縁部文様帶は突起に施文されているものよりも太い押引き文が口縁直下にめぐっている。その下を横方向の区画線は棒状工具によるやや太い沈線で、縱方向の区画線をヘラ状工具による細い沈線で引き表現効果を変えている。頸部の無文帯をはさみ胴部文様はR L繩文施文後に棒状工具で縱位の波状沈線を描き、胴部を4単位に分割している。2は曾利IV式土器。地文として絞杉状の条線が施文され、その上から縱位の波状沈線が垂下する。

3~4は中期初頭五領ヶ台式土器で4は浅鉢形土器。5は中期中葉藤内1式のバネル文土器胴部。6は加曾利EIV式に比定される。地文として単節L R繩文施文後に沈線が施されている。7~9は称名寺式土器。10~32は後期前業。10~27は堀之内1式に比定され、27は下北原系土器。28~32は堀之内2式に比定され、32は粗製土器である。

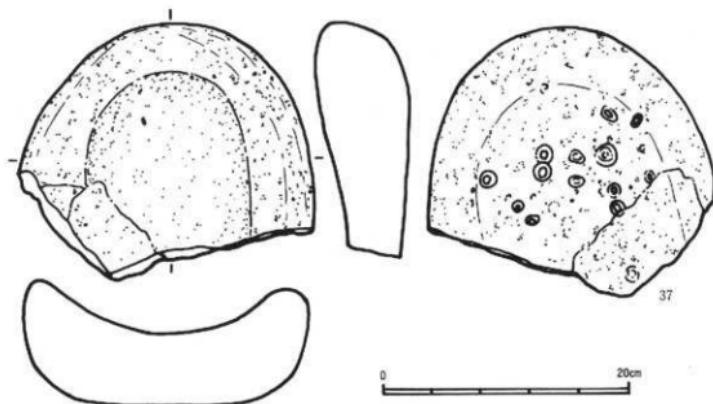
33～35は磨製石斧。33・34は定角式で、35は未製品と思われる。石材は33・34が凝灰岩、35がホルンフェルス。36は打製石斧の未製品。扁平の棒状礫を加工している途中で折れたものと考えられる。石材は粘板岩。37は安山岩製の石皿。半分欠損しているが作業面のくぼみは深く、掃き出し口がある。裏面に直径1cm前後のくぼみが14個ある。



第16図 C-3区出土遺物(I) (1/3)



第17圖 C-3區出土遺物(2) (1/3)

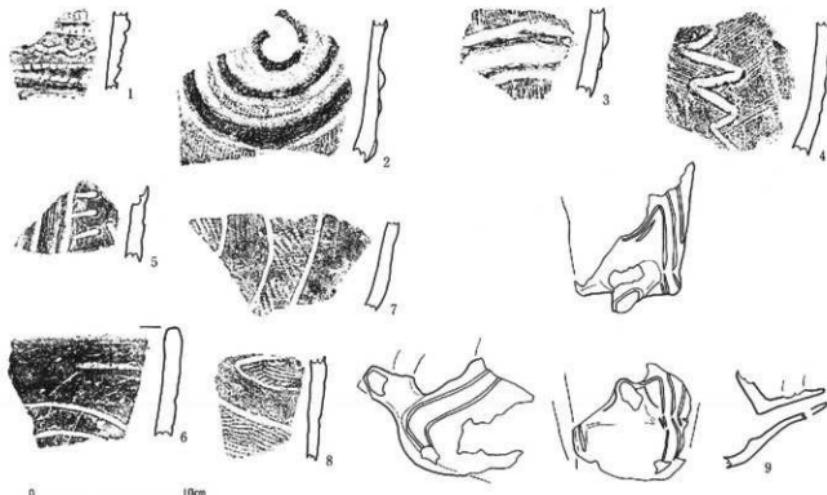


第18図 C-3区出土遺物(3) (1/4)

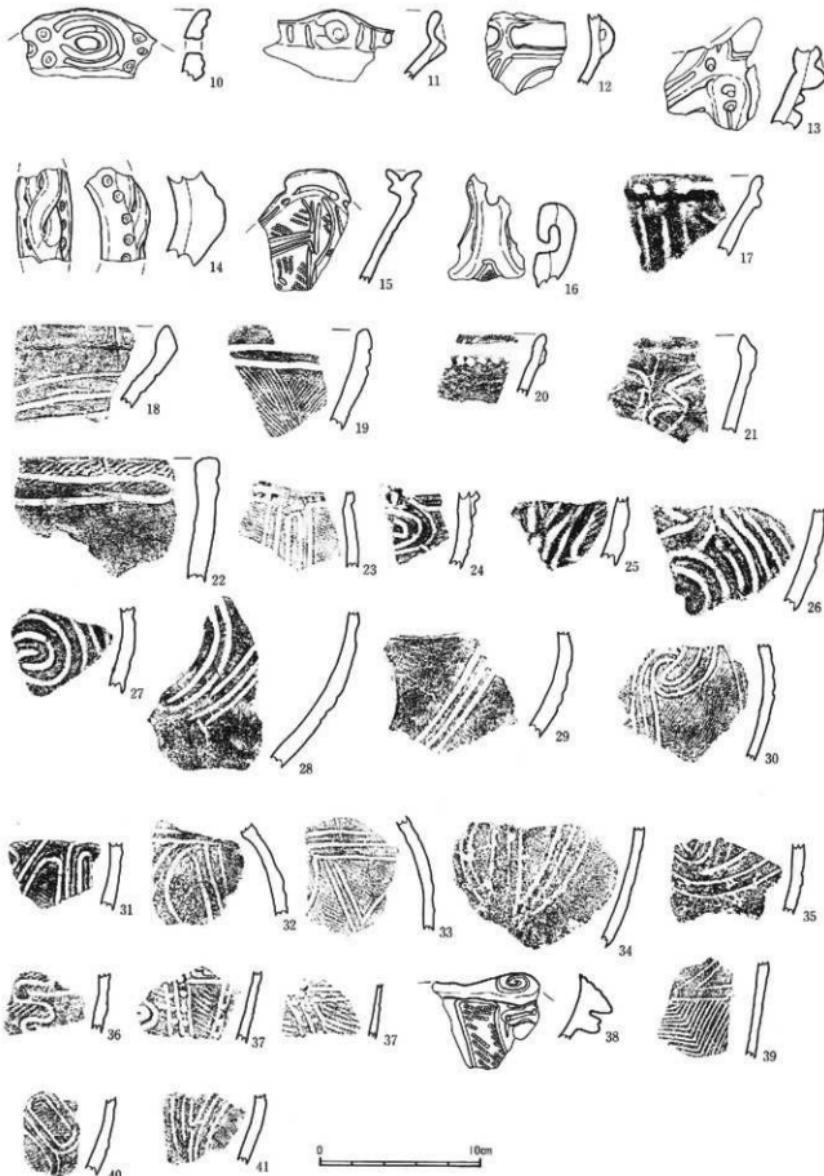
C-4区出土遺物

1は格沢式土器。2～5は曾利式土器。2～4は曾利IV式、5は曾利V式に比定される。6～8は称名寺式土器。9～37は堀之内1式に比定される。9は注口土器。注口部はやや斜めに据え付けられており、注口の途中から把手がでている。また、注口が取り付けられている部分は角張っている。38～41は堀之内2式。39は朝顔形深鉢土器胸部片。

40～41は定角式の磨製石斧。石材は41蛇紋岩、40が凝灰岩。42は横刃形石器。一部自然面が残る。石材は砂岩か。



第19図 C-4区出土遺物(1) (1/3)



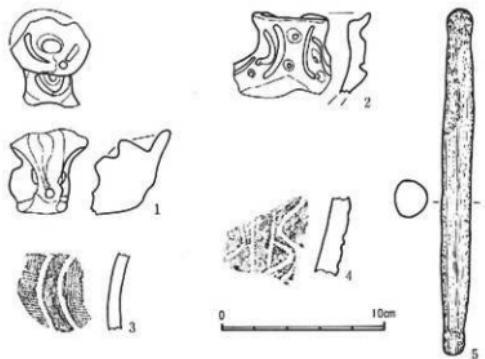
第20图 C-4区出土遗物(2) (1/3)



第21図 C-4区出土遺物(3) (1/3・2/3)

C-5区出土遺物

1~4はすべて縄文時代後期初頭に位置づけられる。1は称名寺併行の関沢類型の把手部分。2~3は称名寺式土器。5は両頭の小型石棒。石材は緑泥片岩。



第22図 C-5区出土遺物 (1/3)

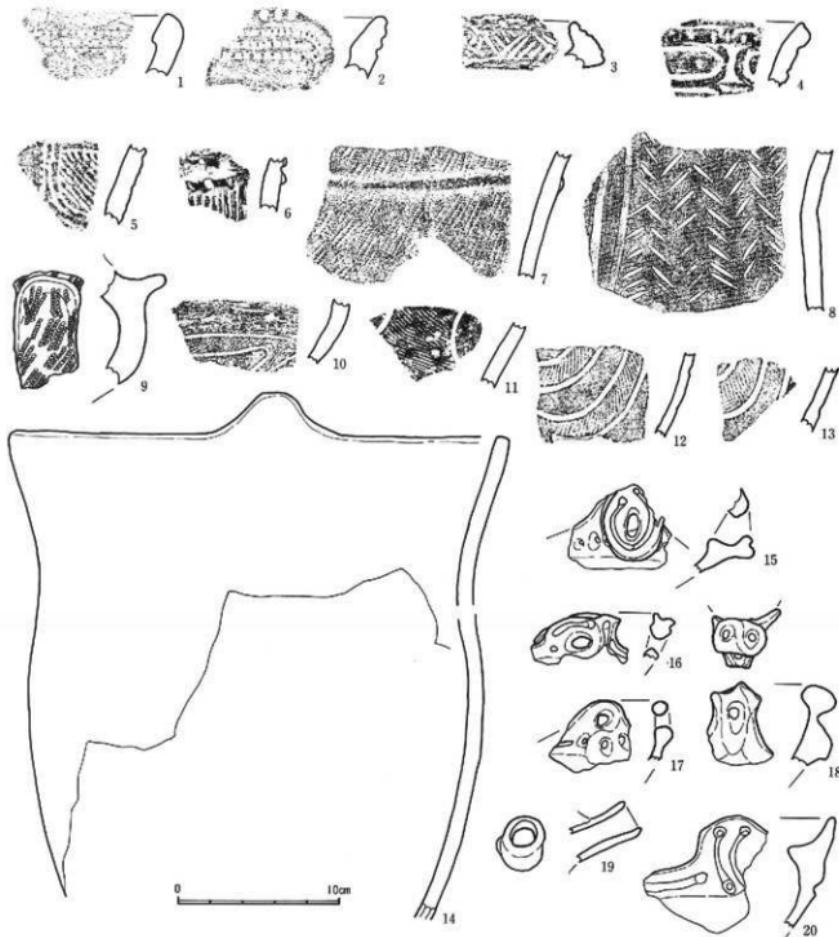
3 3号集石と出土遺物 (第23・24図、図版12・14・17)

調査区の南側ほぼ中央において確認されたこの集石は現在の畠境にあたる石垣の下から検出された。本集石は縄文時代後期の土器や集石が多く出土した黒色土帯の中には含まれていなく、黒色土帯よりもやや西に離れた場所 (II-d・eグリッド) に位置する。調査時においてこの集石は畠境の石垣真下にありしかも同方向に並べられていることから、石垣の基盤を構成する石列であると考えていたが調査最終日に石列内より縄文時代の石棒が発見され、付近を精査したところ多くの縄文土器が出土した。本来ならばこの集石及びその付近の調査を念入り

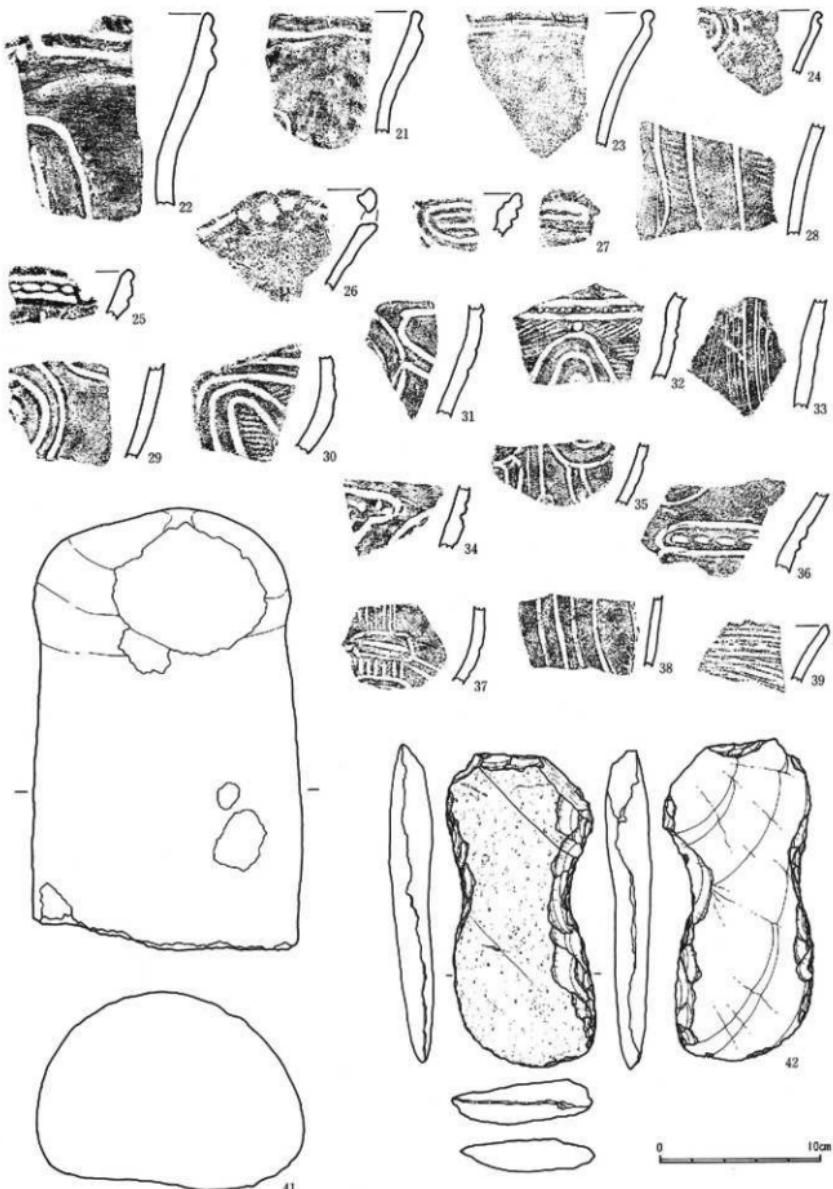
に行うべきであるが、この時点において調査は当初予定していた日程よりも1ヶ月近く遅れていたことから集石の写真を撮り、付近の遺物を採集するだけのことしか行えなかった。

遺物としては縄文時代後期を中心とする土器片が多く出土した。

1～7は縄文時代中期中葉に比定される。3は浅鉢で押引き文と沈線で交互に斜位の線を引く。8は曾利V式土器。9は加曾利EIV式土器の両耳壺の把手部分。10～13は称名寺式土器。14～38は堀之内式土器。14は一単位の突起を持つ粗製深鉢土器。19は注口土器の注口部。38は下北原系土器。40は砂岩製の大型打製石斧。形態は分銅形。41は安山岩製の石棒。表面だけ加工され、裏面は自然面を残している。断面はカマボコ状になっている。重量は9.5kgを量る。



第23図 3号集石出土遺物(1) (1/3)

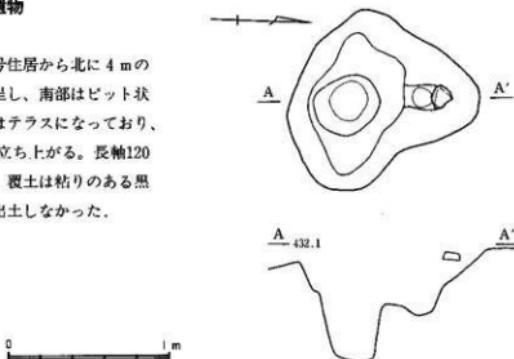


第24图 3号集石出土遺物(2) (1/3)

## (2) 土坑・埋設土器と出土遺物

### I号土坑（第25図、図版9）

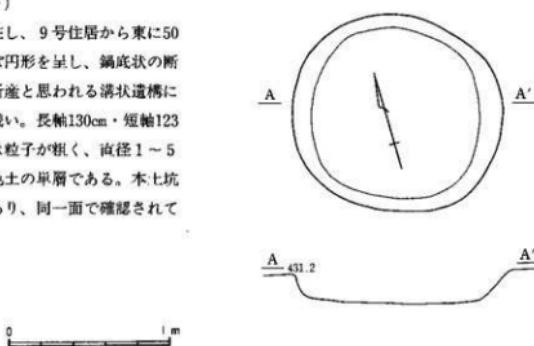
II-fグリッドに所在し、9号住居から北に4mの位置にある。形状は不整合形を呈し、南部はピット状に深く掘り込まれている。北側はテラスになっており、一部やや掘り深められ緩やかに立ち上がる。長軸120cm・短軸100cm・深さ73cmを測る。覆土は粘りのある黒褐色土の單一層である。遺物は出土しなかった。



第25図 1号土坑 (1/30)

### 2号土坑（第26図、図版9）

I・II-fグリッドに所在し、9号住居から東に50cmの位置にある。形状はほぼ円形を呈し、鍋底状の断面形をなす。中世～近世の所産と思われる溝状構造に上部を削平され掘り込みは浅い。長軸130cm・短軸123cm・深さ20cmを測る。覆土は粒子が粗く、直径1~5mmのローム粒子を含む黒褐色土の單層である。本土坑の10cm程西側に4号焼土があり、同一面で確認されているが関係は不明。

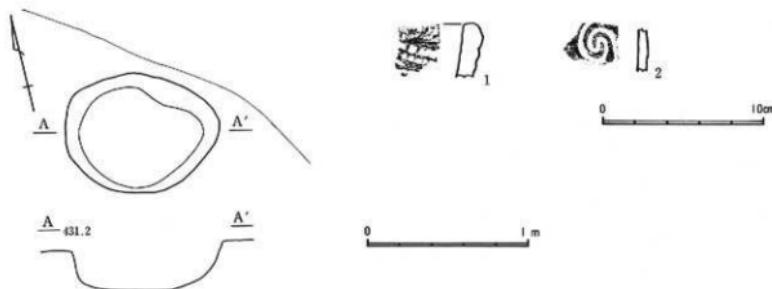


第26図 2号土坑 (1/30)

### 3号土坑（第27図、図版9）

II-fグリッドに所在し、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の9号住居を切っている。形状は不整合円形で鍋底状の断面形を呈している。長軸95cm・短軸74cm・深さ28cmを測り覆土は黒色土の單層である。

遺物は土器片が少し出土したが図示したのは1の縄文時代中期猪澤式土器と2の縄文時代後期堀之内1式の土器片のみである。土坑が弥生時代後期後半～古墳時代後期後半の9号住居を切ってつくられていることから遺物は流れ込みによってもたらされたものであろう。



第27図 3号土坑出土遺物 (1/30・1/3)

4号土坑 (第28図、図版9)

II-gグリッドに所在し、1.5m東側には7号住居がある。形状は不整橢円形を呈し、すり鉢状の断面形をなす。長軸70cm・短軸48cm・深さ20cmを測り、覆土はしまりのやや弱い暗オリーブ褐色土の単層である。遺物は図示したものは2点のみで何れも縄文時代後期に比定される。



第28図 4号土坑出土遺物 (1/30・1/3)

5号土坑 (第29図、図版9)

II-gグリッドに所在し、遺構上部南側の一部が1号溝に切られている。形状はほぼ橢円形を呈する。南半分は急角度で立ち上がり、北半分はテラスを持ち緩やかに立ち上がる。長軸67cm・短軸55cm・深さ30cmを測り、覆土は粘性的のやや強い灰黄褐色土の単層である。

遺物は細片が多く図示できたものは縄文時代壙之内式土器片2点(1・2)のみである。



第29図 5号土坑出土遺物 (1/30・1/3)

6号・7号土坑（第30図、図版9・10・18・19）

I-gグリッドに所在し、7号土坑が6号土坑を切っている。

6号土坑の形状は隅丸方形を呈し、鍋底状の断面形をなす。長軸70cm・短軸57cm・深さ30cmを測り、覆土はしまりのやや弱い暗褐色土の単層である。

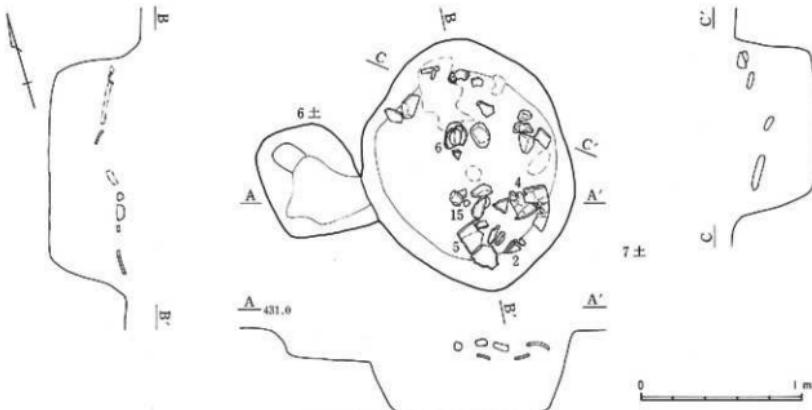
遺物は僅かに出土したが図示できるのは縄文土器底部片No.1のみである。

7号土坑の形状はほぼ楕円形を呈する。土坑底部は平坦で壁は急角度で立ち上がる。長軸150cm・短軸127cm・深さ53cmを測り、覆土は粘性が強く粒子の密な黒褐色土の単層である。

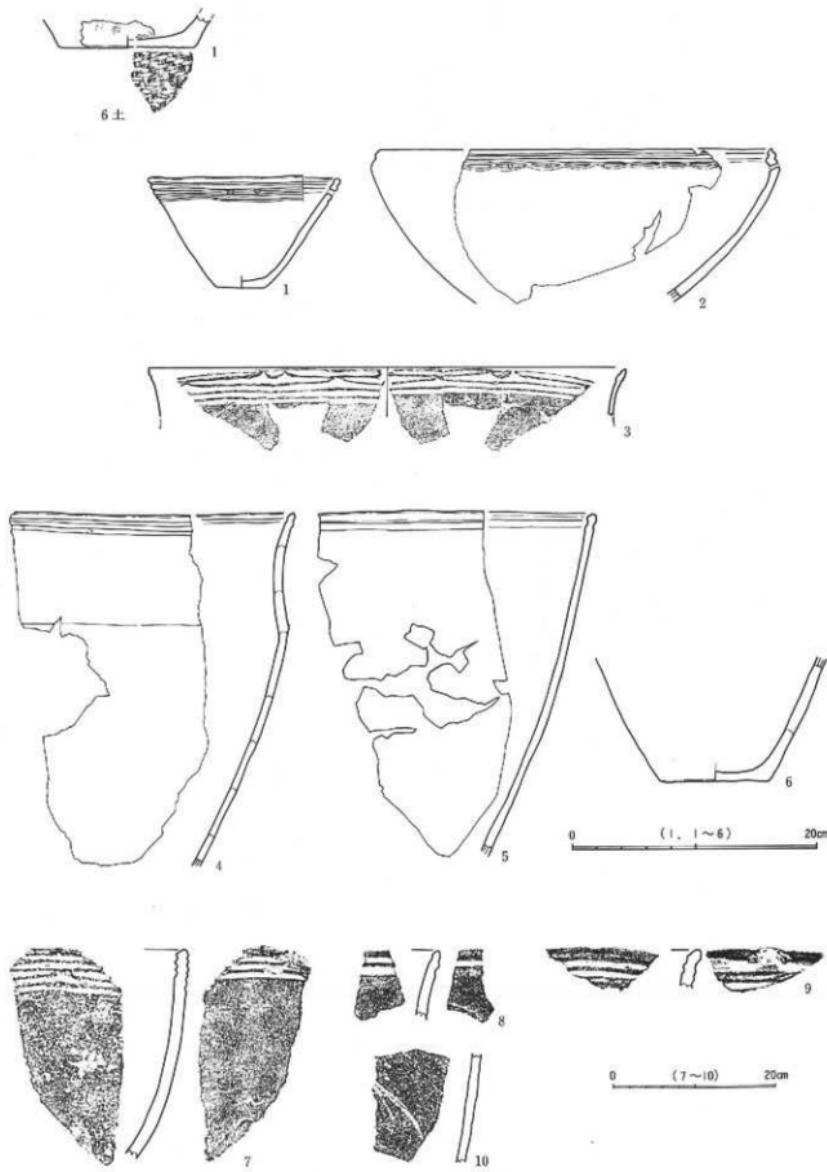
遺物は6号土坑からは図示した縄文土器底部片1が出土したのみである。7号土坑からは土坑の上面において縄文時代晩期の浮線文系土器が一例で出土した。1は小型の鉢で底部から口縁部にかけて直線的に開く。口縁部に4条、内部に2条の沈線がめぐる。2は底部から口縁部にかけてやや内湾する浅鉢である。屈曲した肩部にレンズ状付帯文が施され、その上から口唇部にかけて沈線が2条めぐる。外面に赤色塗彩の施された痕跡が認められ、体部にはミガキが施されている。3は口縁部にかけて緩やかに外反して開く變形土器。口縁部に内面4条、外面5条の平行沈線がめぐり、内外面ともに平行沈線のえぐり込みによる浮線文の「匱」字状を呈する工字文になっている。また、内外面ともに赤色塗彩の施された痕跡が認められる。4は頸部がくびれ肩部に稜を持つ壺。口縁部は緩やかに外反して開く。口縁部外面には2条の平行沈線がめぐり、内面には1条の沈線がめぐる。肩部から下の外面には粗いへら削り後にミガキに近いナデによる調整がなされている。5はほぼ直線的に口縁部にかけて開く深鉢。外面上半に横方向の粗いへら削り後にミガキに近いナデによる調整がなされている。内面・外面の口縁端部にそれぞれ1条の沈線がめぐる。外面に赤色塗彩の施された痕跡が認められる。6は上器底部。7はほぼ直線的に口縁部にかけて開く深鉢。口縁部直下の内面に3条、外面に5条の平行沈線が施される。外面の文様帶には一部平行沈線のえぐり込みによって浮線が「匱」字状工字文を呈している。8は變形土器口縁部。内面に1条、外面に2条平行沈線が施される。9は變形土器口縁部。内面に2条、外面には少なくとも2条の平行沈線がめぐる。10は胴部土器片。

11-14は打製石斧。12と13は完形で撥形を呈する。石材は11が粘板岩、12がホルンフェルス、13が頁岩、14が綠色凝灰岩。15-16は磨り痕が認められないが形状・大きさ等から磨き石と考えられる。共に石材は砂岩。17は扁平な棒状の礫。上端部の一部が打ちかかれ、下端が磨り減り少しくぼんでいる。石材は片岩か。18は安山岩製の凹石。表に2ヶ所、裏に3ヶ所のくぼみがあり、片側面に打ち欠き痕がある。

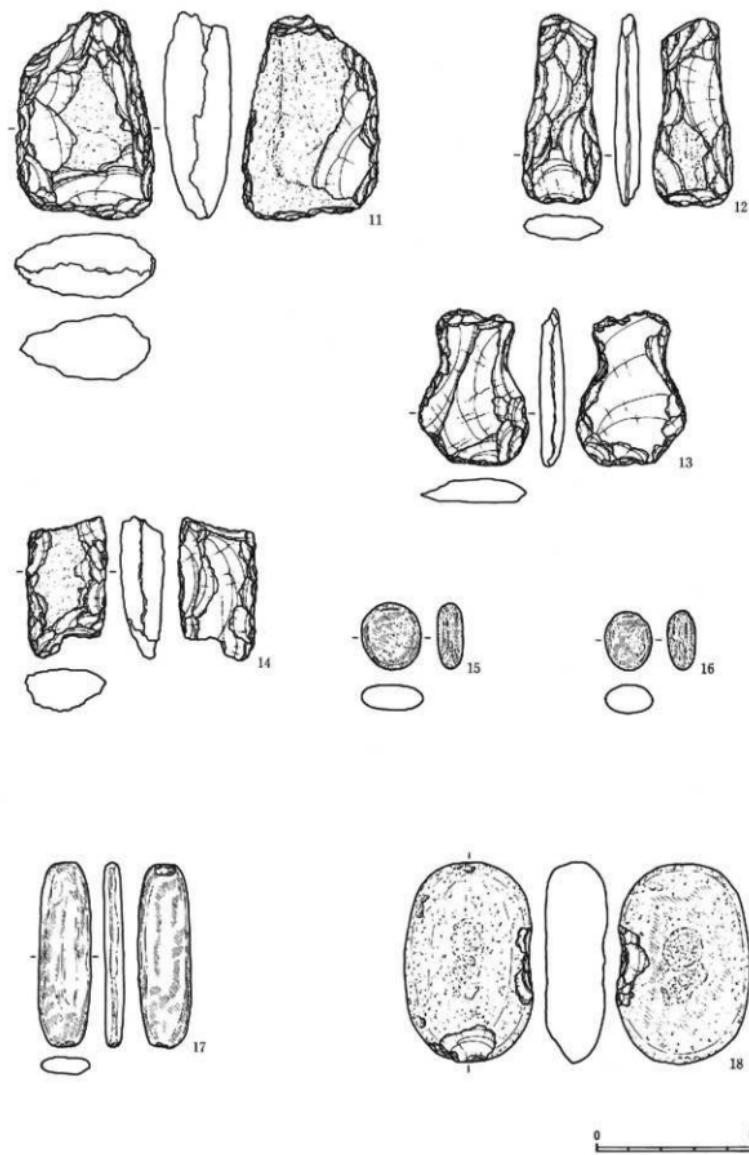
この他に遺物を確認した面とほぼ同じ面で白色粘土塊が確認された。



第30図 6号・7号土坑 (1/30)



第31图 6号·7号土坑出土土器 (1/3·1/4)



第32图 7号土坑出土石器 (1/3)

8号土坑（第23図）

I-fグリッドに所在し、50cm東側に8号住居がある。形状は不整楕円形を呈し、北東部・南西部が深く掘り込まれている。壁はやや急角度で立ち上がる。長軸103cm・短軸63cm・深さ36cmを測り、覆土は粘性のやや弱いオリーブ褐色土の単層である。遺物は出土していない。

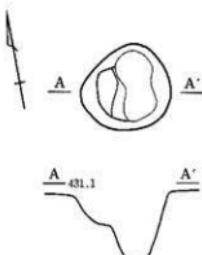


第33図 8号土坑 (1/30)

9号土坑（第34図、図版10）

I-gグリッドに所在し、1号溝と2号溝に挟まれ土坑上部を切られている。形状は不整円形を呈し、西部にテラスを持つ。断面形はすり鉢状を呈し、壁はやや急角度で立ち上がる。長軸55cm・短軸50cm・深さ42cmを測り、覆土は粒子のやや密な暗灰黄褐色土の単層である。

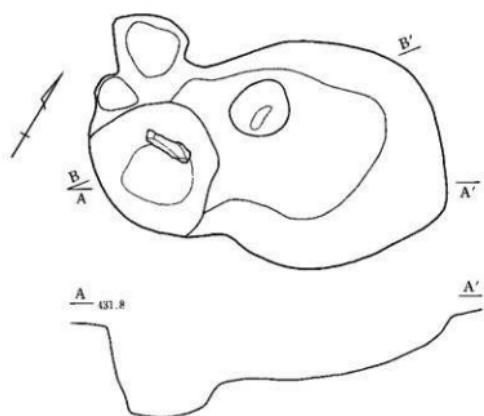
遺物は縄文土器片が僅かに出土したが細片のため図示できるものはない。



第34図 9号土坑 (1/30)

10号土坑（第35図）

II-gグリッドに所在し、2号焼土が70cm東にある。形状は不整楕円形を呈する。南西隅が深く掘り込まれ、



第35図 10号土坑 (1/30)

バケツ状の断面形を示し壁はやや直角気味に立ち上がる。北東半部は1段高くテラス状になり、やや西よりに深さ67cmのピットが掘り込まれ、壁は緩やかに立ち上がる。10号土坑プラン確認面において人頭大の礫が立て据えられた状態で検出された。長軸214cm・短軸143cm・深さ63cmを測る。

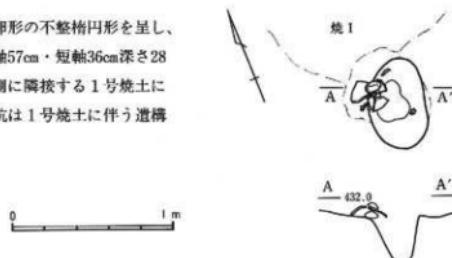
遺物は縄文時代中期中葉格沢式土器片(1)と後期壺之内1式(2・3)の土器片が僅かに出土している。



第36図 10号土坑出土遺物 (1/3)

#### 11号土坑 (第37図)

II-gグリッドに所在する。形状は卵形の不整橢円形を呈し、断面は壁がほぼ直角に立ち上がる。長軸57cm・短軸36cm・深さ28cmを測る。縄文土器底部が本土坑と北側に隣接する1号焼土に架かって伏せられていたことから本土坑は1号焼土に伴う遺構であると考えられる。



第37図 11号土坑 (1/30)

#### 13号土坑 (第38図)

III-gグリッドに所在し、14号土坑が70cm西側にある。形状は隅丸方形を呈し、断面は鍋底状で壁はやや直角気味に立ち上がる。直軸53cm・短軸45cm・深さ23cmで、覆土は粒子がやや密な暗灰黄土の単層である。遺物は出土していない。

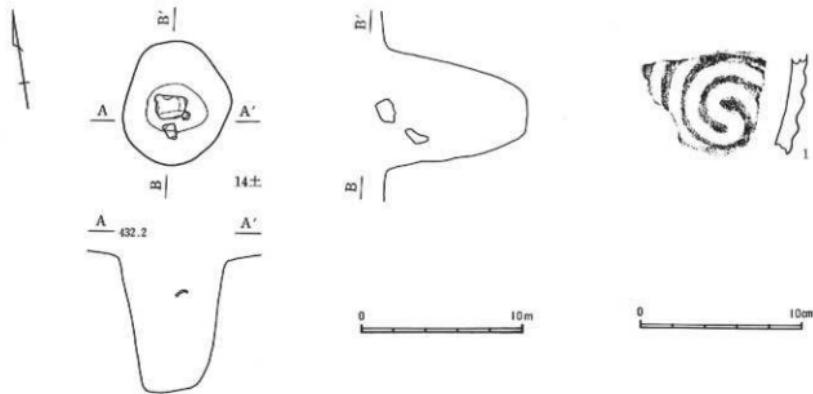


第38図 13号土坑 (1/30)

#### 14号土坑 (第39図)

III-gグリッドに所在し、1号住居の1m東側に位置する。形状は不整橢円形を呈し、断面は狭い底部から壁がやや外反しながら急角度で立ち上がる。長軸78cm・短軸63cm・深さ84cmを測り、覆土はしまりある暗茶褐色土の単層である。遺物は渦巻文を持つ縄文時代後期壺之内1式の鉢形土器胴部破片が出土している。

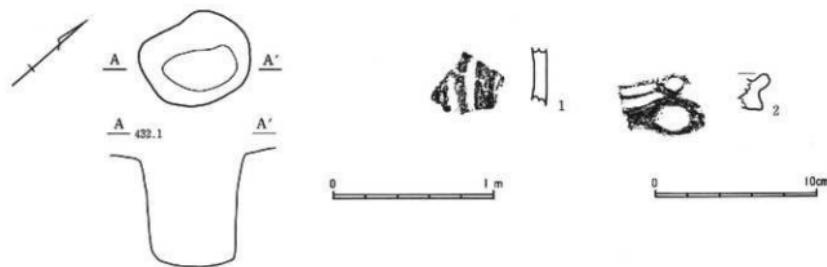
遺物は渦巻文を持つ縄文時代後期壺之内1式の鉢形土器胴部破片(1)が出土している。



第39図 14号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

#### 16号土坑 (第40図)

III-g グリッドに所在し、1号焼土の20cm北側に位置する。形状は不整楕円形を呈し、断面は平坦な底部から壁が直角に立ち上がる。長軸65cm・短軸54cm・深さ68cmを測り、覆土はしまりのある暗茶褐色土の単層である。遺物は縄文時代後期壺之内1式土器片が僅かに出土している。

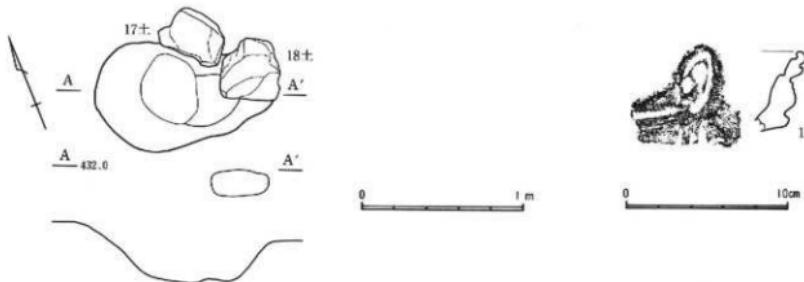


第40図 16号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

#### 17号・18号土坑 (第41図)

II-g グリッドに所在し、1号埋甕の40cm東側に位置する。17・18土坑とも覆土がしまりのやや強い灰黄褐色土の単層であるため切りあい関係は不明である。形状は両土坑合わせて不整楕円形を呈する。17号土坑の壁は外反しながら緩やかに立ち上がり、18号土坑の壁はそれよりやや内側に緩く立ち上がる。長軸110cm・短軸62cm・深さ32cmを測る。

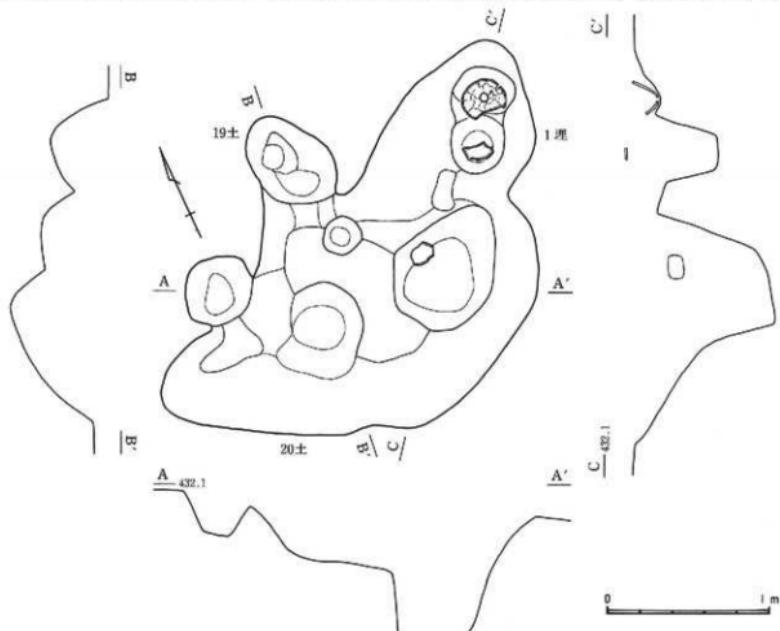
遺物は17号土坑より縄文時代後期壺之内1式土器片（1）が出土している。18号土坑は遺物が出土していない。



第41図 17号・18号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

19・20号土坑・1号埋設土器 (第42図、図版14・18)

II-f・gグリッドに所在し、1号住居の3m南に位置する。それぞれ19号土坑・20号土坑・1号埋設土器を掘り進めていくうちに重複する状況になり切り合い関係は不明であるが、出土した遺物から判断すると19・20号土坑が1号焼土を切っていると判断される。形状は不整橢円形の組み合わせにより複雑化している。この3つの遺構は南東部が最も深く掘り込まれ、西部にテラスを持ち1号埋設土器南部・19号土坑及び西部のこぶ状の張り出し部にそれぞれテラス面より20~30cm前後深いピット状の掘り込みを持つ。3つの遺構を合わせた規模は長軸305cm・短軸206cm・深さはそれぞれ36cm (19号坑)、88cm (20号土坑)、19cm (1号埋設土器) を測る。覆土は、19号



第42図 19号・20号土坑、1号埋設土器 (1/30)

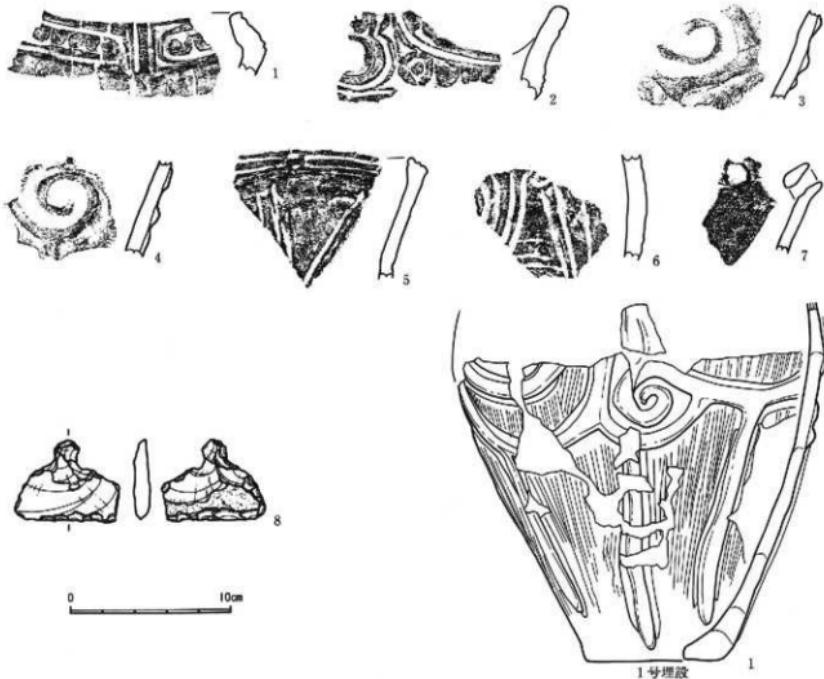
土坑が黒褐色土の単層、20号土坑がしまりのやや強く粒子が密な灰黄褐色土の単層である。

1号埋設土器は正位に埋設されていた。上部が縄文時代後期の集石群によって破壊されており、単独のものか住居に伴うものであるのか判断できなかった。

遺物は、19号土坑からは縄文時代後期の土器片が若干出土したが細片であるため図示できるものはない。

20号土坑からは100点以上の縄文土器片が出土した。代表的な遺物を図示したが遺物は3時期程度の時間差があり、その内主体を占めるのは縄文時代後期前葉の壠之内期の上器である。1・2は縄文時代中期初頭五領ヶ台2式土器である。1は深鉢形土器口縁部で2が浅鉢形土器である。3・4は縄文時代中期後葉曾利IV式に比定され、3・4とも溝巻文を持つ条線地文の深鉢形土器削部片である。5～7は縄文時代後期前葉壠之内1式に比定され、7は注口土器である。8は横型の石匙、刃部が一部欠損している。石材はホルンフェルス。

1号埋設土器は縄文時代中期後葉曾利IV式に比定される。縦位の条線地文に扁平な1本隆帯で溝巻文が描かれ、懸垂する隆帯が胴下半部の縱区画をつくる。胴上半部は意図的に打ちかかれたと思われ存在しない。底部には孔が穿たれている。

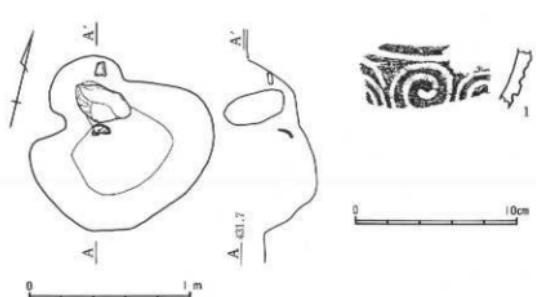


第43図 20号土坑、1号埋設出土遺物 (1/3)

#### 21号土坑 (第44図、図版10)

II-fグリッドに所在し、20号土坑の4m南側に位置する。形状は不整橢円形に張り出し部を持つひょうたん形を呈し、壁がやや緩やかに立ち上がる断面形を示す。長軸112cm・短軸108cm・深さ35cmを測り、覆土は粘性が高く粒子の粗い褐色土の単層である。

遺物は縄文時代後期に比定される胴部土器片が出土している。



第44図 21号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

第45図 22号土坑 (1/30)

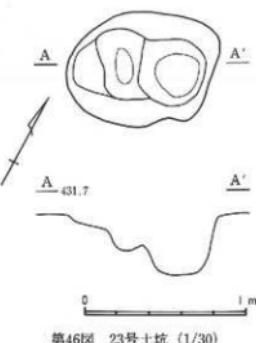
#### 22号土坑 (第45図)

II-f・gグリッドに所在し、29号土坑の2m東側に位置する。形状は北東部がやや広がる不整橿円形を呈し、南西部がテラス状になり壁はやや直角に立ち上がる断面形を示す。長軸70cm・短軸55cm・深さ26cmを測り、覆土はしまりのやや弱い褐灰色土の単層である。

遺物は繩文時代後期の土器片が僅かに出土したが図示できるものはない。

#### 23号土坑 (第46図)

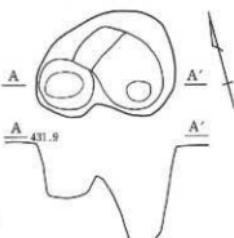
II-gグリッドに所在し、33号土坑の1m北側に位置する。形状は不整橿円形を呈し、南西部にテラスを持つ。北東部が深く掘り込まれ、壁はやや直角に立ち上がる。長軸87cm・短軸72cm・深さ37cmを測り、覆土は粒子がやや粗い黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。



第46図 23号土坑 (1/30)

#### 24号土坑 (第47図)

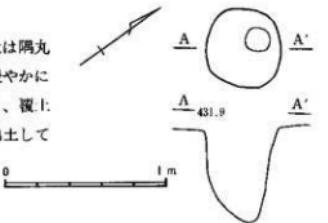
II-f・gグリッドに所在し、1号埋設土器の60cm南側に位置する。形状は不整橿円形を呈し、西及び南の壁際がそれぞれピット状に深く掘り込まれ、壁は急角度で立ち上がる。長軸86cm・短軸63cm・深さ62cm・33cmを測り、覆土は粘性のやや強いオリーブ褐色土の単層である。遺物は出土していない。



第47図 24号土坑 (1/30)

25号土坑（第48図）

II-gグリッドに所在し、10号土坑の1m北側に位置する。形状は隅丸方形を呈し、北よりの壁が急角度で南側から東部はそれよりやや緩やかに立ち上がる断面形を示す。長軸50cm・短軸46cm・深さ58cmを測り、覆土はしまりが強く粒子の密なオリーブ褐色土の単層である。遺物は出土していない。

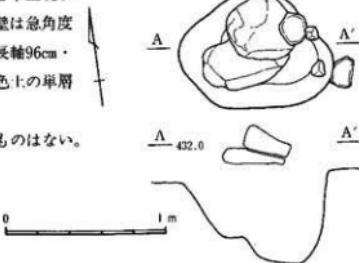


第48図 25号土坑 (1/30)

26号土坑（第49図）

II-gグリッドに所在し、24号土坑の60cm東に所在する。縄文時代後期の集石群を構成する大きな礫（長軸0.8~1m）2枚を取り除くと本土坑が検出された。形状は不整台形を呈する。北部に最深部を持ち、壁は急角度で立ち上がり、南半分はテラス状になり緩やかに立ち上がる。長軸96cm・短軸72cm・深さ56cmを測り、覆土は粘性的のやや強いオリーブ褐色土の単層である。

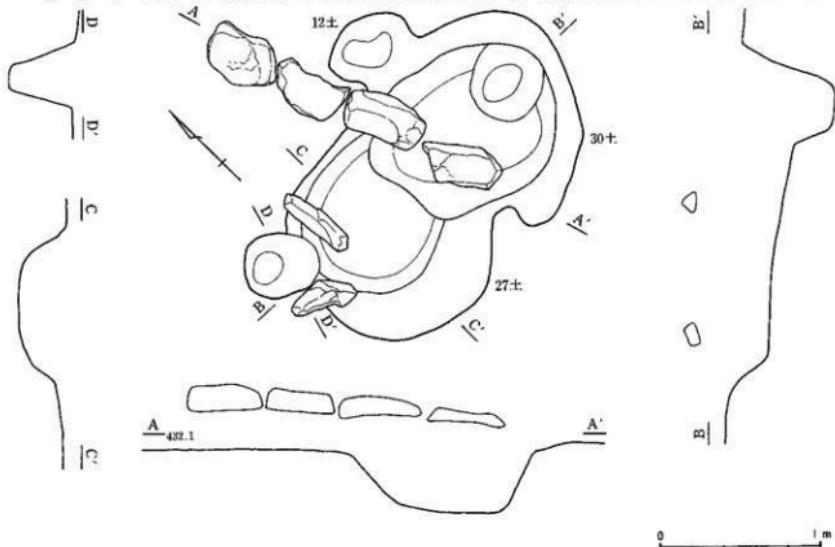
遺物は縄文時代後期の土器片が約20点出土したが図示できるものはない。



第49図 26号土坑 (1/30)

12・27・30号土坑（第50・51図、図版6）

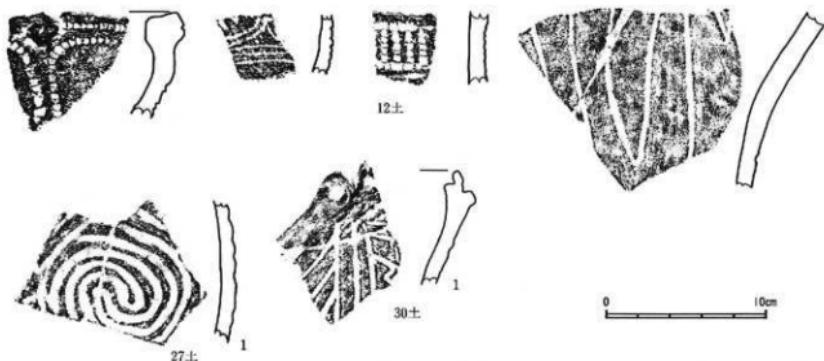
II-III-f・gグリッドに所在し、1号住居の1m南側に位置する。南北に列をなしている大きな礫を取り除



第50図 12号・27号・30号土坑 (1/30)

くと直下より検出された。形状は不整形で数個にピットや土坑が切りあい複雑化している。前後関係は27号土坑が30号土坑を切っているが、30号土坑と12号土坑の切りあい関係は不明。12号土坑は東部が深くピット状に掘り込まれ、西部はテラス状になっている。壁は外反しながら急角度で立ち上がる。30号土坑は20~30cmの浅い掘り込みで、断面形は鍋底状を示す。12・30号土坑は長軸203cm・短軸130~150cm・深さ76cmを測り、27号土坑は長軸47cm・短軸40cm・深さ42cmを測る。覆土は12号土坑が粒子の粗い暗褐色土、27号土坑がしまりと粘性が強い褐灰色土、30号土坑は粒子が密で粘性の強い灰黄褐色土で何れも単層である。

遺物は12号土坑で縄文中期猪沢式土器（1~3）、縄文後期壠之内式土器（4）が出土している。27号土坑では縄文後期壠之内式土器胴部破片が出土している。30号土坑でも僅かであるが縄文後期壠之内式土器が出土している。

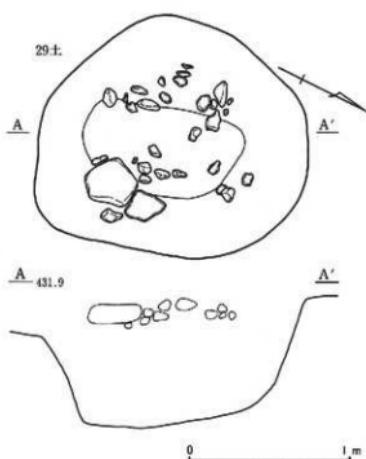


第51図 12号・27号・30号土坑出土遺物 (1/3)

#### 29号土坑（第52・53図、図版10）

II-fグリッドに所在し、31号土坑が西に隣接する。10cm~30cm前後の礫が土坑上部のほぼ同じレベルで確認された。形状は不整円形を呈する。底部は平坦で西から南壁はやや外反しながら急角度で立ち上がり、北東部はやや内湾しながら急角度で立ち上がる。長軸168cm・短軸148cm・深さ60~64cmを測る。覆土は粒子がやや密のよい黄褐色土の単層で直径1~5mmの焼土粒子を土坑の上部から底部まで満遍なく含む。

遺物は縄文後期壠之内式土器片が80点近く出土したが、図示できるのは僅かである。



第52図 29号土坑 (1/30)

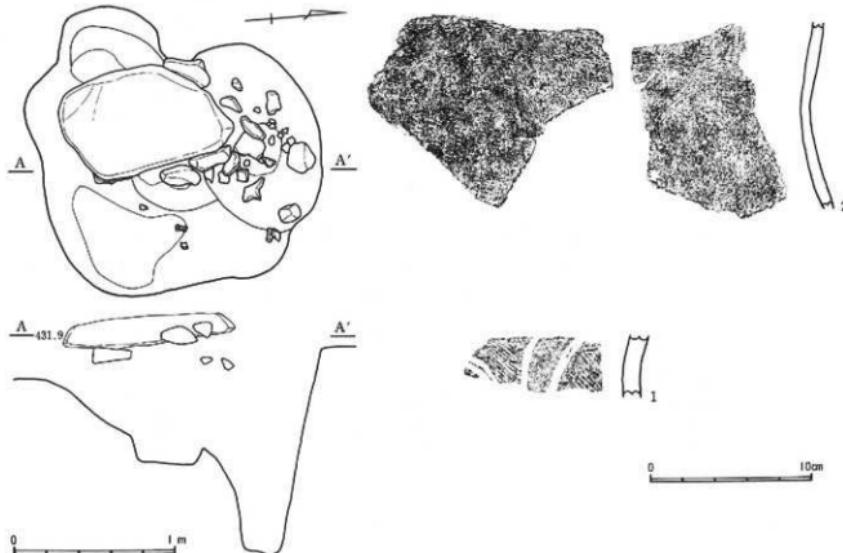


第53図 29号土坑出土遺物 (1/3)

31号土坑 (第54図)

II-f グリッドに所在し、9号住居の2.5m北側に位置する。長軸1m×短軸0.7mの大きな礫が土坑直上に乗っていた。形状は3~4基の土坑又はピット状の遺構の切り合いで複雑化している。北部がピット状に深く掘り込まれ、南半分はテラス状になって中央部は浅く掘り込まれている。断面は北壁が急角度で立ち上がり、他の壁は外反しながら緩やかに立ち上がる。長軸183cm・短軸175cm・深さ125cmを測り、覆土は粒子が密でしまりのやや強い暗オリーブ褐色土の単層である。

遺物は縄文土器片が20点近く出土した。1は縄文後期初頭の称名寺式に比定されるものである。2は縄文後期窯之内式土器の粗製深鉢。

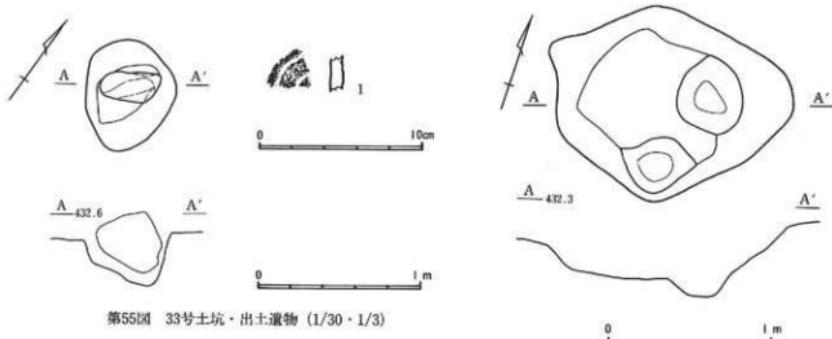


第54図 31号土坑・出土遺物 (1/30 · 1/3)

33号土坑 (第55図)

II-g グリッドに所在し、8号住居の5.5m北側に位置する。土坑の中央に40×38×20cmの礫が据えられた状態で検出された。形状は卵状の不整橢円形を呈し、北東部よりに掘り窪められ西部はややテラス状になっている。また、壁は急角度で立ち上がる。長軸70cm・短軸55cm・深さ32cmを測り、覆土はしまりがやや強く粒子が密な暗オリーブ褐色土の単層である。

遺物は縄文時代後期の土器片が僅かに出土した。

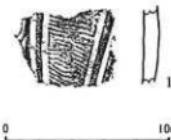


第55図 33号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

0 1m

### 34号土坑 (第56図)

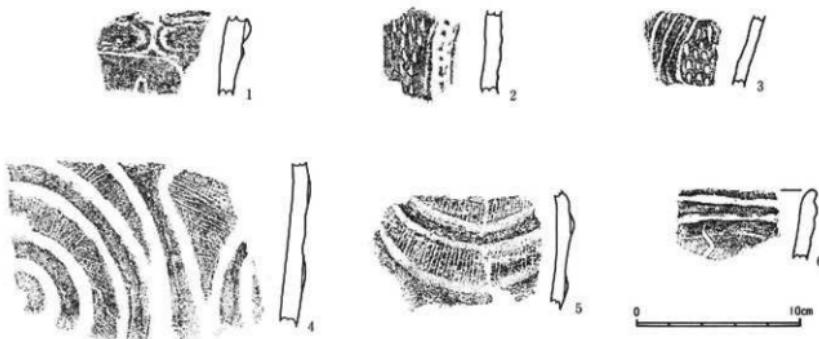
II-e グリッドに所在し、9号住居の4m北側に位置する。形状は不整橢円形を呈する。東部と南部に深い掘り込みを持ち、壁は緩やかに立ち上がる。長軸153cm・短軸118cm・深さ32cmを測り、覆土はしまりのやや強い暗オリーブ褐色土の単層である。遺物は縄文後期の土器片が僅かに出土した。



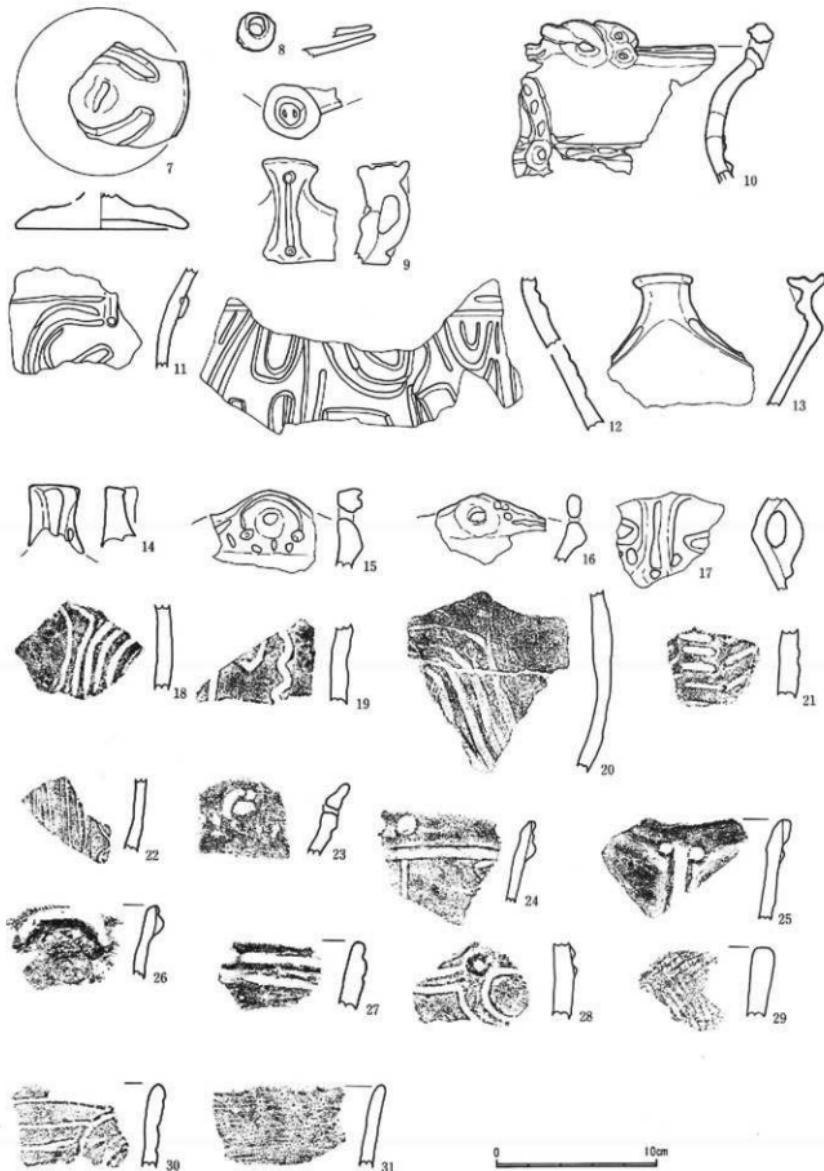
第56図 34号土坑・出土遺物 (1/30・1/3)

### (3) 遺構外出土遺物 (第57~60図、図版17・19・20)

1は縄文時代中期階沢式土器。隆帯で橢円区画をつくっている。2~6は曾利式土器。7~30は後期前葉の堀之内式土器。30は堀之内2式土器でそれ以外は堀之内1式に比定される。7は上製の蓋。沈線により文様が描かれしており、つまみ部分は削れてなくなっている。断面形はほぼ水平に近い。8は注口土器注口部。31は弥生時代前期の条痕文土器。

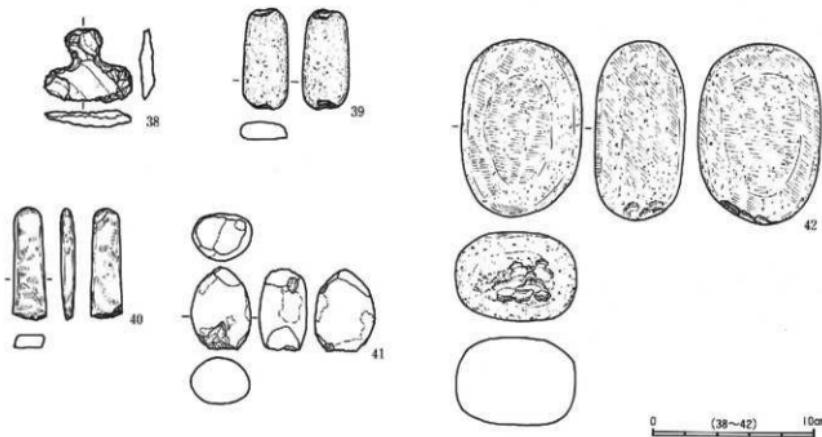
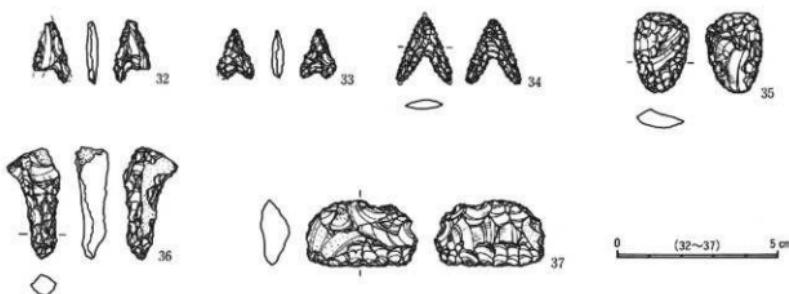


第57図 遺構外出土遺物(1) (1/3)

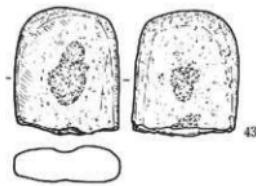


第58図 遺構外出土遺物(2) (1/3)

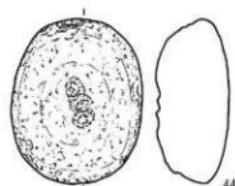
32~34は石鎚。石材は黒曜石。35は黒曜石製のスクレイバー。側縁から上端にかけて刃部を作っている。36は2次加工のある剝片。カギ形石器のつまみ部分の可能性がある。石材は黒曜石。37は黒曜石製の石匙。形態は斜型でつまみ部分が欠損している。38はほぼ完形の横型の石匙。石材はホルンフェルス。39は粘板岩製の石鎚。打ち欠きにより礫の両端にえぐりを入れている。上端のえぐりは打ち欠き後に磨られている。重量は33.9gを量る。40は定角式の磨製石斧。刃部が欠損している。石材は粘板岩か。41・42は磨石。41は一般的な磨石と異なり、上下端に大きな2つの面からなる粗い磨面が向かい合い、中央部で棱をなしている。下端部は一部欠損しており、比熱を受けたのか黒い付着物がある。42は石材が安山岩。表・裏・片側面・上端面に磨面があり、下端面に敲打痕がある。43~46は凹石。石材は43が凝灰岩。44~46が安山岩。47・48は打製石斧。47は短曲形ではば完形。47が頁岩か。石材は48がホルンフェルス、49は横刃形石器。石材はホルンフェルス。



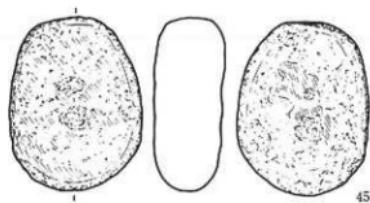
第59図 漁構出土土石器(1) (1/3・2/3)



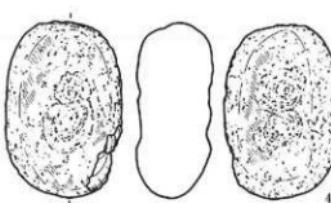
43



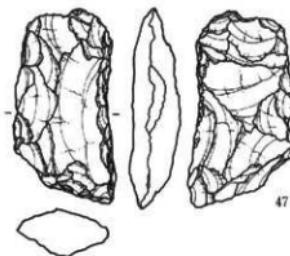
44



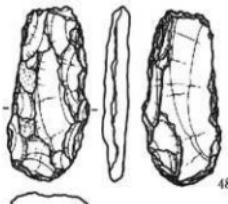
45



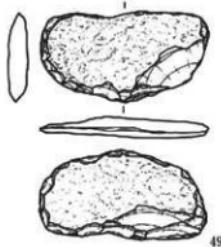
46



47



48



49

0 10cm

第60圖 遺構外出土石器(2) (1 / 3)

### 第3節 弥生・古墳時代の遺構と遺物

#### (1) 壁穴居址

1号住居址（第61・62図、第1表、図版3）

III-f・g区に位置し、北側に7m離れて10号住居址がある。上部に削平を受け、南側は床面近くまで擾乱を受けており、遺存状態はあまりよくない。

平面形態は円形を呈し、規模は長軸が5.7m、短軸5.5m、壁高は14~24cmを測る。長軸方向の方位はN-55°-Wを示す。

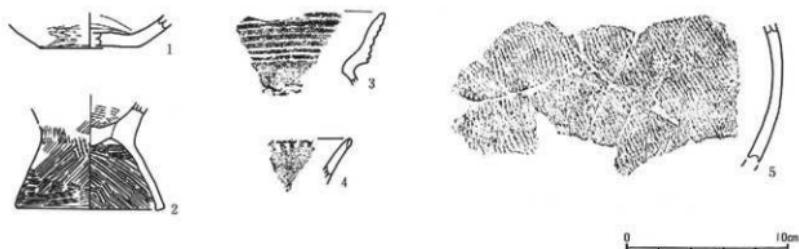
床面は平坦で堅緻であり、南側には床面よりやや浮いた状態で炭化物が確認された。

覆土は6層に分けられ、自然な堆積を示していた。

ピットは壁に沿って6箇所検出された。それぞれの規模は次のとおりである。P<sub>1</sub>: (長軸) 56cm × (短軸) 50cm × (深さ) 25cm P<sub>2</sub>: 48cm × 38cm × 15cm P<sub>3</sub>: 44cm × 36cm × 70cm P<sub>4</sub>: 64cm × 40cm × 34cm P<sub>5</sub>: 50cm × 46cm × 15cm P<sub>6</sub>: 30cm × 28cm × 25cm。いずれも柱穴と考えられるが、P<sub>2</sub>、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>は補助的な柱穴の可能性が高い。

炉は住居址中央部で検出された。床を浅く掘り込んだあとに粘土を貼った粘土敷きがで、80cm × 70cmを測る不正円形を呈している。炉の周囲には白色粘土を用いた土手が全周する。

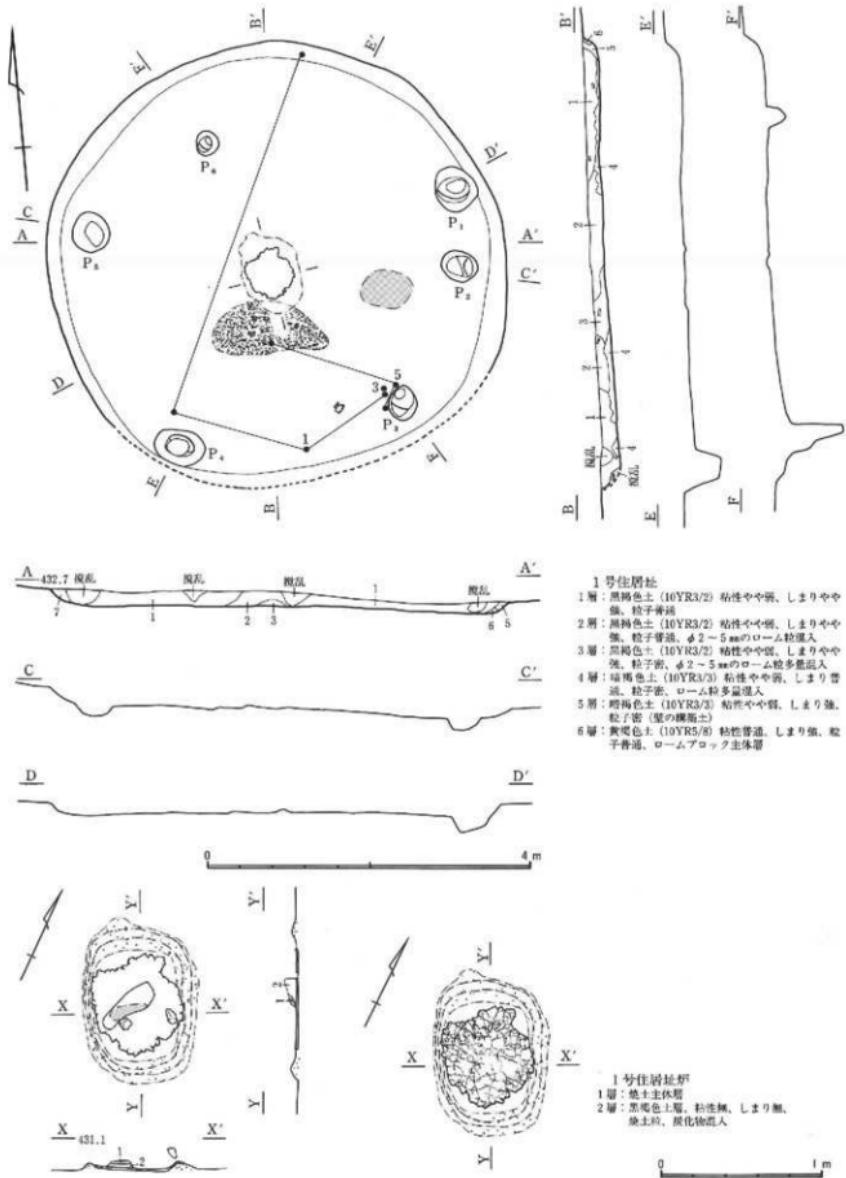
出土遺物はきわめて少ない。床面から甕の胴部破片が出土したのみであるが、離れた破片が接合するなど、特異な出土状態を示していた。また、擬四線を持つ北陸系の甕型土器の口縁部破片が出土している。



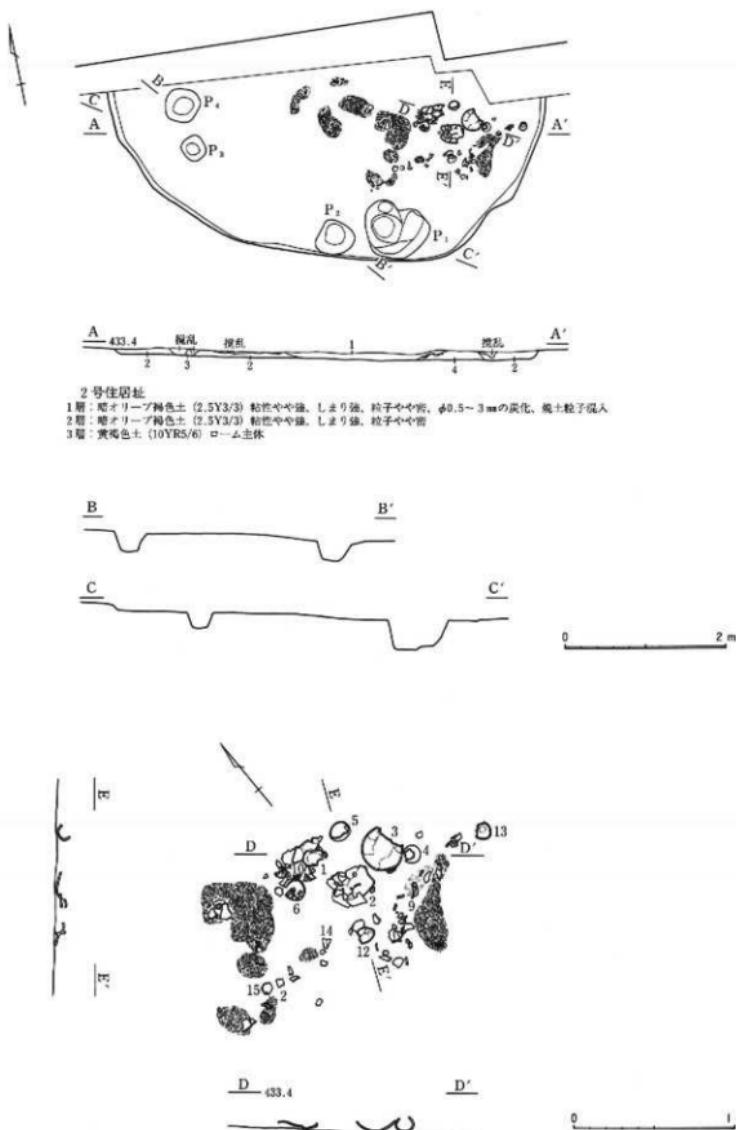
第61図 1号住居址出土土器 (1/3)

第1表 1号住居址出土遺物観察表

1	壺	A : b (6.2)、h (2.0)。B : 底部1/2。C : 外面一ナデのちヨコヘラミガキ。底部摩減著しく不明。内面一ヘラナデ。D : 黒色粒多量に含む。E : 良。F : 外面橙色 (5YR7/8)、内面浅黄橙色 (7.5YR8/4)。
2	台付甕	A : b (9.0)、h (6.6)。B : 脚部1/2。C : 内外面一粗いハケ。D : 密。E : 良。F : 外面橙色 (7.5YR7/6)、内面橙色 (5YR6/8)。
3	甕	B : 口縁部破片。C : 外面一擬四線。内面一ヨコナデ。頸部ケズリ。D : 密。E : 良。F : 暗赤褐色 (2.5YR5/8)。
4	甕	B : 口縁部破片。C : 外面一口脣部キザミ。内面一ヨコハケ。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。
5	甕	B : 脚部破片。C : 外面一太いタテハケ。内面一ヘラナデ。D : 白石粒疎らに含む。E : 良。F : 外面橙色 (2.5YR6/8)、内面橙色 (5YR6/6)。



第62図 1号住居址・炉 (1/60・1/30)



第63図 2号住居址・遺物出土状況図 (1/60・1/30)

## 2号住居址（第63～65図、第2・3表、図版4・21）

IV-e・f区に位置し、南西側に4.3m離れて3号住居址がある。上部に削平を受け、北側を道路によって破壊されており、南側1/3のみを残すが、遺存状態はあまりよくない。

平面形態は遺存状態が不良なため明確ではない。規模は残存部の長軸で5.2m、壁高は2～4cmを測る。

床面は平坦でやや軟弱であり、南東側には多量の炭化物や焼土が床面よりやや浮いて散在していた。覆土および床面の状態の観察結果から焼失の可能性は低い。

覆土は3層に分けられ、ほぼ自然な堆積を示していた。第1層には炭化物が多量に混入していた。

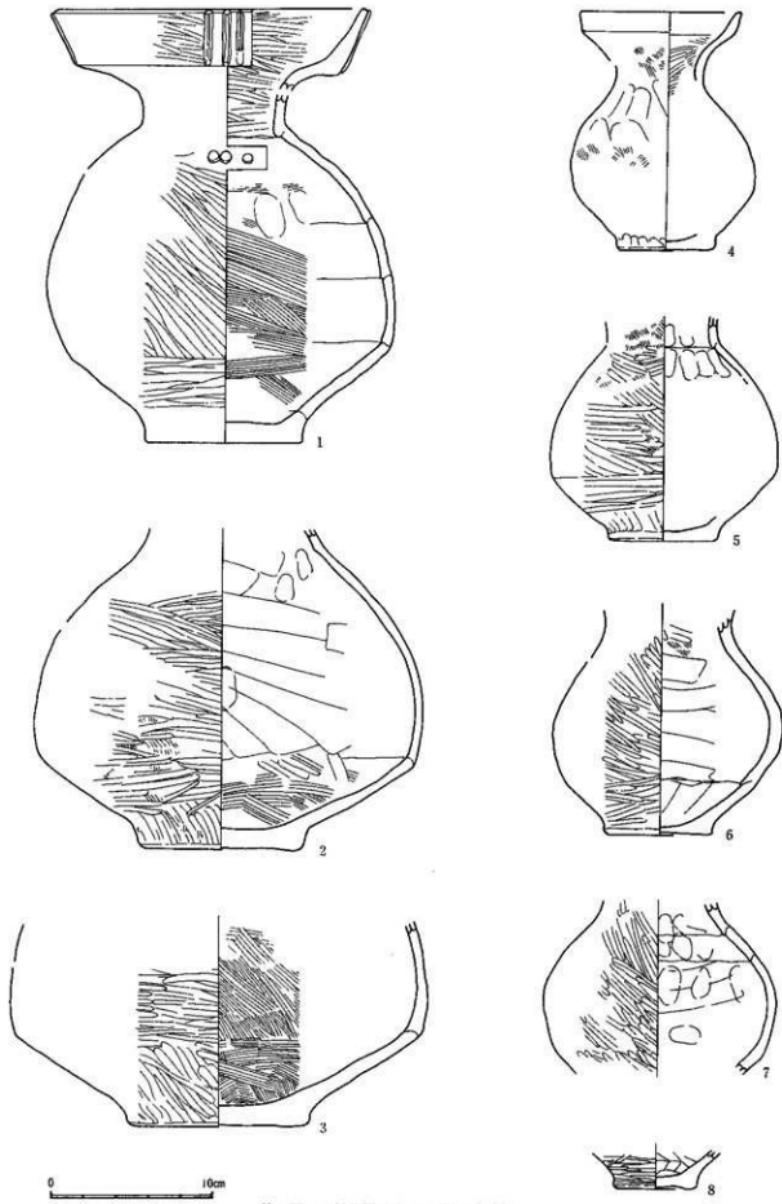
ピットは壁に沿って4箇所検出された。それぞれの規模は次のとおりである。P<sub>1</sub>：（長軸）80cm×（短軸）60cm×（深さ）40cm P<sub>2</sub>：45cm×43cm×20cm P<sub>3</sub>：32cm×28cm×20cm P<sub>4</sub>：44cm×44cm×26cm。いずれも柱穴と考えられるが、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は規模が若干小さいことから補助的な柱穴の可能性が高い。

かは検出されなかった。

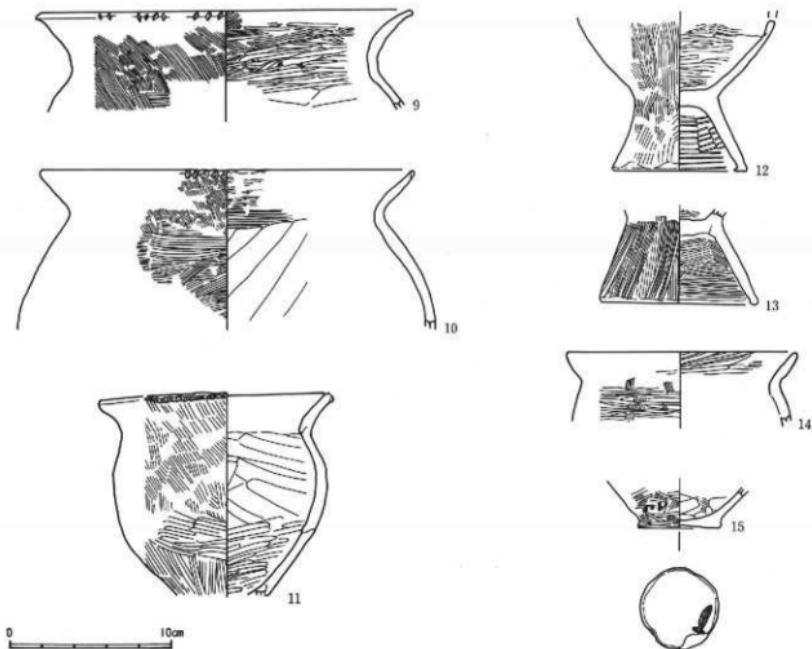
出土遺物は豊富で、住居址東側の床面上および床面よりやや浮いた状態で多量の遺物が出土した。特に遺物が集中する東部では、床面から若干浮いた形で壺型土器の胴部下半が正位の状態で2個並んで出土し、その周囲に小型壺が置かれていた。同一個体の破片が広範囲に散乱していることから、埋没過程での土器廃棄の可能性を残している。また、周囲に炭化物や焼土が散在することから、火を伴った土器廃棄の行為があった可能性が高い。

第2表 2号住居址出土遺物観察表(1)

1	壺	A : l (19.0)、b 9.5、h 27.1。B : 口縁部～胴部上半1/2、以下完形。C : 外面一口縁部～底部ヘラミガキ。頸部摩滅により不明。内面一口縁部～頸部ヨコハケのちヨコヘラミガキ。胴部上半指揮えのちヨコハケ。ナデが部分的にいる。以下ナナメハケ。D : 白石粒含む。E : 良。F : 黄褐色(7.5YR7/8)。G : 口縁部に棒状貼付文(3本4單位)。胴部に円形貼付文(3個3単位)。
2	壺	A : b 9.4、h (19.9)。B : 底部～肩部片。C : 外面～肩部以下ナナメヘラミガキ。底部不定方向のヘラミガキ。内面～肩～胴部指揮えのちヘラナデ。輪積み痕以ト粗いヨコハケ。D : 接触物多量に含む。E : 良。F : 外面浅黄色(7.5YR8/6)、内面褐色(5YR7/8)。G : 胴部外面に黒斑あり。
3	壺	A : b 10.8、h (12.9)。B : 底部～胴部片。C : 外面～ヨコヘラミガキ。輪積み痕以下ハケのちタテヘラミガキ。底部不整方向のヘラミガキ。内面～ナナメハケ。輪積み痕以下ヨコハケ。D : 接触物多量に含む。E : 良。F : 外面浅黄色(7.5YR8/6)、内面褐色(5YR7/8)。G : 胴部外面に黒斑あり。
4	壺	A : 19.8、b 5.6、h 14.8。B : ほぼ完形。C : 外面～口縁部ヨコナデ。頸部から胴部上半ハケのちタテ方向のヘラナデ。以下摩滅若しく不明。内面一口縁部摩滅。頸部ハケ。D : 白石粒・黒色粒含む。E : 良。F : 橙色(2.5YR6/8)。
5	小型壺	A : b 6.4、h (13.9)。B : 頸部～底部はほぼ完形。C : 外面～頸部タテハケ。頸部以下ハケのちヘラミガキ。内面～頸部輪積み痕と指頭痕が残る。頸部以下ヘラナデ。D : 接触物多量に含む。E : 良。F : 明赤褐色(2.5YR5/8)。G : 胴部外面に黒斑。
6	小型壺	A : b 5.8、h (14.0)。B : 頸部～底部完形。C : 外面～胴部以下ナナメから横方向のヘラミガキ。底部不整方向のヘラミガキ。内面～頸部ナナメハケのちナナメヘラミガキ。胴部以下ヘラナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色(5YR6/6)。G : 胴部外面に黒斑。
7	小型壺	A : h (10.1)。B : 頸部～胴部片2/5。C : 外面～ナナメヘラミガキ。内面～頸部輪積みに伴う指頭痕あり。その後ヘラナデ。胴部下半ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色(5YR6/6)。G : 胴部外面に黒斑。
8	小型壺	A : b 5.1、h (2.4)。B : 底部1/2。C : 外面～ハケのちヨコヘラミガキ。底部不定方向のヘラミガキ。内面～ヘラナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色(5YR6/6)。
9	甕	A : l (22.8)、h (6.5)。B : 口縁部から肩部片。C : 外面一口唇部キザミ。口辺部細かいナナメハケ。内面一口縁部ヨコハケのちヘラミガキ。肩部ヘラナデ。D : 白石粒・黒色粒多量含む。E : 良。F : 橙色(2.5YR6/8)。
10	甕	A : l (23.0)、h (9.9)。B : 口縁部から肩部片。C : 外面一口唇部キザミ。口辺部細かなタテハケ。胴部細かなヨコハケ。内面一口縁部細かなヨコハケ。頸部ナナメ方向のヘラナデ。D : 密。E : 良。F : 外面灰褐色(7.5YR4/2)、内面褐色(5YR6/6)。



第64圖 2號住居址出土土器(1) (1/3)



第65図 2号住居址出土土器(2) (1/3)

第3表 2号住居址出土遺物観察表(2)

11	台付甕	A : l (14.3)、h (12.7)。B : 脚部のみ欠損。C : 外面一口唇部キザミ。口辺部以下タテハケ。肩部中位に部分的にヨコヘラミガキが入る。内面一口縁部ナデ。頸部～脚部中位ヘラナデ。中位以下ヨコヘラミガキ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。
12	台付甕	A : b (8.2)、h (9.5)。B : 脚部下半から脚部完形。C : 外面一纏維束状の工具によるタテハケ。内面一肩部ハケのちヘラミガキ。脚部太いヨコハケ。D : 密。E : 良。F : 外面灰褐色 (7.5YR4/2)、内面橙色 (5YR6/6)。
13	台付甕	A : b9.6、h (5.9)。B : 脚部2/5。C : 外面一肩部タテハケ。端部ヨコナデ。内面一肩部順時計回りのハケ。脚部ヨコハケ。D : 白石粒多量含む。E : 良。F : 外面橙色 (7.5YR7/6)、内面橙色 (5YR7/8)。
14	鉢	A : l (14.0)、h (4.5)。B : 口縁部～脚部片。C : 外面一口縁部ヨコハケのちヨコナデ。肩部以下タテハケのちヘラミガキ。内面一口縁部ヨコハケのちナメヘラミガキ。頭部以下摩滅および剥離により不明。D : 密。E : 良。F : 橙色 (7.5YR4/3)。
15	鉢	A : b5.2、h (2.9)。B : 底部のみ完形。C : 外面一タテハケのち不整方向のヘラミガキ。内面一ヨコハケのちヘラナデ。D : 换繊物なく密。E : 良。F : 外面橙色 (5YR7/6)、内面橙色 (2.5YR6/8)。G : 外面に黒斑。底部にシダの圧痕。

3号住居址（第66図、図版5）

III・IV-e区に位置し、北東側に4.8m離れて4住居址がある。上部に削平を受け、部分的に搅乱があることから遺存状態はよくない。

平面形態はほぼ円形を呈し、規模は長軸が3.5m、短軸3.0m、壁高は10~20cmを測る。長軸方向の方位はN-14°-Wを示す。

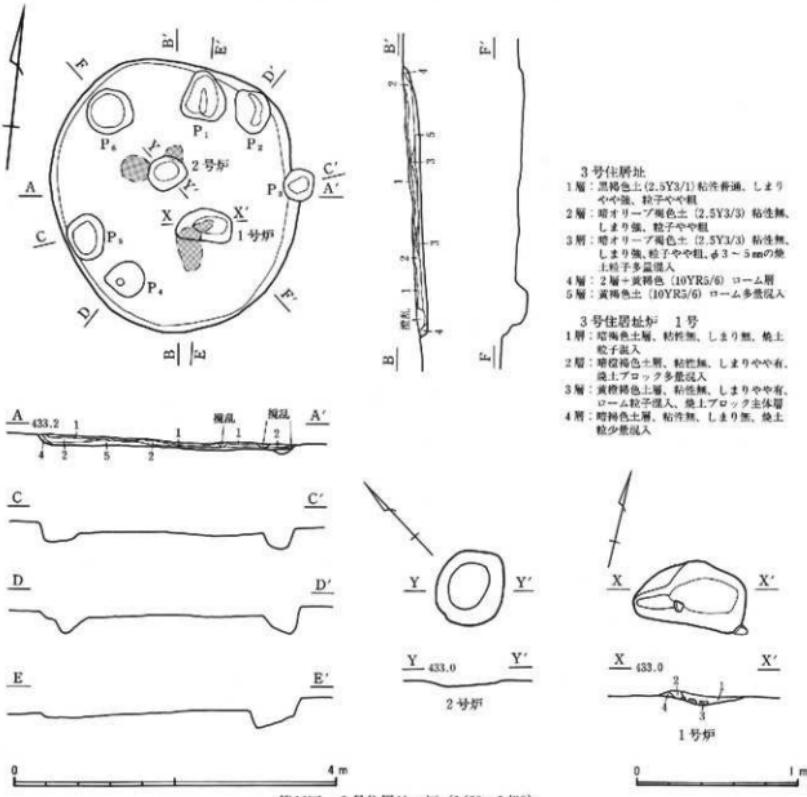
床面は軟弱で、住居址中央部や北側に焼土溜りが2箇所検出された。

覆土は5層に分けられ、ほぼ自然な堆積を示していた。第3層には直径3~5mmの焼土粒が多量に混入している。

ピットは壁に沿って6箇所検出された。それぞれの規模は次のとおりである。P<sub>1</sub>: (長軸) 60cm × (短軸) 52cm × (深さ) 25cm P<sub>2</sub>: 58cm × 44cm × 25cm P<sub>3</sub>: 40cm × 36cm × 20cm P<sub>4</sub>: 50cm × 46cm × 20cm P<sub>5</sub>: 58cm × 42cm × 12cm P<sub>6</sub>: 60cm × 56cm × 18cm。いずれも柱穴と考えられる。

炉は2箇所で検出された。いずれも床を浅く掘り込んだ地床である。No.1は不整橿円形を呈し、60cm × 40cm。No.2は円形を呈し40cm × 40cmを測る。

出土遺物はきわめて少なく、ほとんどが細片で図示できるものはなかった。



第66図 3号住居址・炉 (1/60, 1/30)

4号住居址（第67・68図、第4表、図版5・21）

IV-d・e区に位置し、北東側に6.5m離れて2号住居址がある。上部に削平を受けるが遺存状態は良好である。

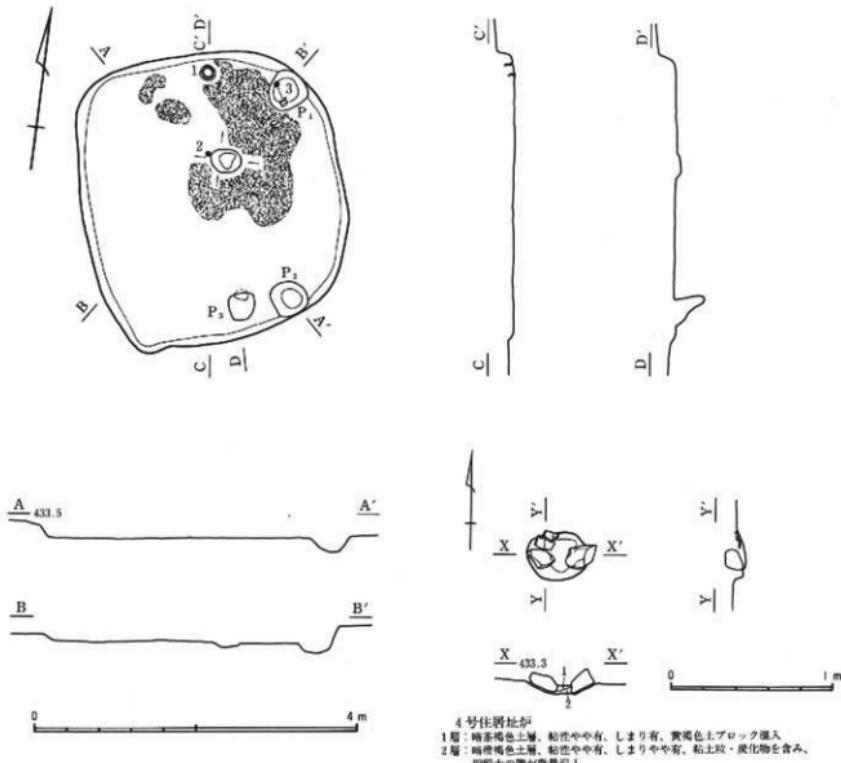
平面形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸が3.6m、短軸3.3m、壁高は10~20cmを測る。主軸方位はN-16°-Wを示す。

床面は全面が平坦で堅緻であり、北東側には炭化物が飛散していた。

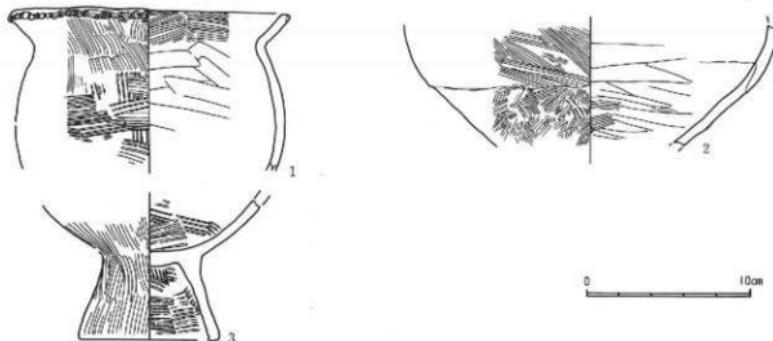
ピットは北側から南側の壁に沿って3箇所検出された。それぞれの規模は次のとおりである。P<sub>1</sub>：(長軸)48cm×(短軸)48cm×(深さ)12cm P<sub>2</sub>：42cm×42cm×20cm P<sub>3</sub>：40cm×32cm×35cm。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>が柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>は斜めにうがたれていることから、出入り口施設に伴う可能性が高い。

炉は住居址中央やや北よりで検出された。床を浅く掘り込んだ地床炉で、ほぼ橢円形を呈し、35cm×28cmを測る。炉の上部には15~20cm×10cm大の石が2個置かれていた。

出土遺物は覆土内のものが多く、住居址中央から北側にかけて散在する。北壁際の床面直上から甕型土器が逆位で出土している。また、P<sub>1</sub>の覆土上層から台付甕の脚部が出土している。



第67図 4号住居址・炉 (1/60・1/30)



第68図 4号住居址出土遺物 (1/3)

第4表 4号住居址出土遺物観察表

1	甕	A : l 16.6, h (10.0)。B : 口縁部～胴部上位完形。C : 外面一口唇部ヨコハケのちキザミ。頸部～胴部上位太いタテハケ。中位太いナナメハケ。内面一口縁部細かいヨコハケ。頸部以下ナナメ方向のヘラナデ。D : 桟繩物少ない。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。G : 胴部外面に炭化物付着。
2	甕	A : h (7.5)。B : 脇部破片。C : 外面一細かいナナメ方向のハケ。輪積み底より下に不整方向の短いハケ。一部ナデ消される。内面一丁寧なヘラナデ。下位には板状工具などを用いたヘラナデ(ハケの条痕より不明瞭)。D : 直径3mm大の石粒を疎らに含む。E : 良。F : 外面橙色 (7.5YR7/6)、内面褐色 (7.5YR4/3)。
3	台付甕	A : b 8.2, h (8.4)。B : 脚部完形。C : 内外面ともに太いハケ。D : 直径3mm大の石粒を疎らに含む。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。

#### 5号住居址 (第69・70図、第5表、図版6)

III-c区に位置し、北東側に2.4m離れて3号住居址がある。上部に削平を受け、全体に搅乱されていることから遺存状態は不良で、南壁の検出ができなかった。

平面形態は不整方形を呈し、規模は長軸が4.5m、短軸4.2m、壁高は5~10cmを測る。長軸方向の方位はN-6°-Wを示す。

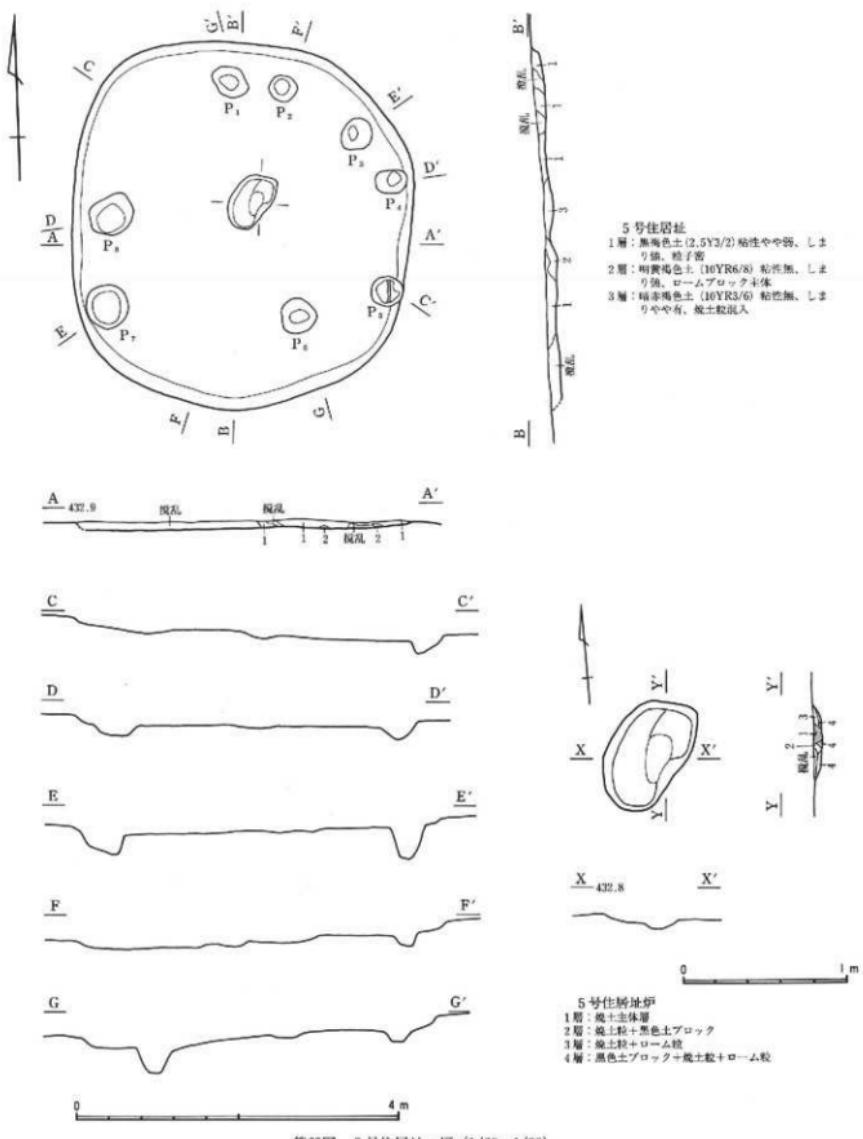
床面は軟弱で、全体に焼土が飛散している。耕作による搅乱をかなり受け、床の残りが非常に悪い。

覆土は2層に分けられる。搅乱がひどいが、ほぼ自然な堆積を示していた。

ピットは壁に沿って8箇所検出された。それぞれの規模は次のとおりである。P<sub>1</sub>：(長軸)46cm×(短軸)36cm×(深さ)12cm P<sub>2</sub>：33cm×33cm×15cm P<sub>3</sub>：42cm×38cm×42cm P<sub>4</sub>：38cm×28cm×18cm P<sub>5</sub>：40cm×38cm×16cm P<sub>6</sub>：44cm×43cm×30cm P<sub>7</sub>：53cm×50cm×24cm P<sub>8</sub>：54cm×46cm×15cm。

炉は住居址中央部や北よりから検出された。床を浅く掘り込んだ地床炉で、不整橢円形を呈し、76cm×45cmを測る。

出土遺物はきわめて少なく、ほとんどが細片で図示できるものはなかった。



### 6号住居址（第70・71図、第5表、図版6・21）

IV-d区に位置し、東側に1.5m離れて4号住居址がある。上部に削平を受け南側が搅乱されているが、遺存状態は比較的良好である。

平面形態は住居址北側が調査区域外にかかるため一部不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。規模は長軸が5.7m、短軸は(4.9)m、壁高は8~20cmを測る。長軸方向の方位はN-3°-Wを示す。

床面はほぼ全面が平坦で堅緻であるが、南側は搅乱を受け軟弱な状態となっている。住居址の中央から北東にかけて直径20~40cm大の礫が散在している。

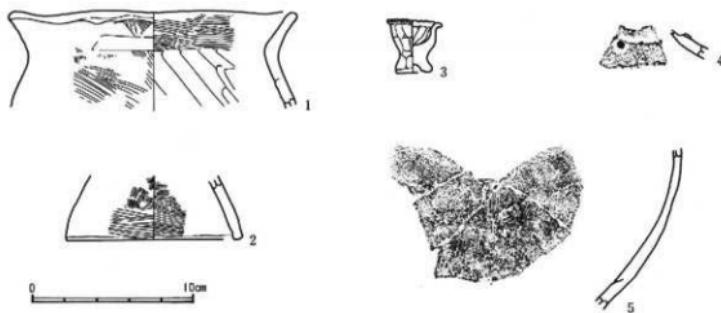
覆土は3層に分けられ自然な堆積を示していたが、他の住居址の覆土に比べ礫の混入が顕著である。

ピットは壁に沿って8箇所検出された。 $P_1 \sim P_3$ 、 $P_4 \sim P_6$ 、 $P_8$ が柱穴で、それぞれの規模は次のとおりである。 $P_1$ ：(長軸)48cm×(短軸)38cm×(深さ)28cm  $P_2$ ：42cm×38cm×21cm  $P_4$ ：60cm×52cm×15cm  $P_5$ ：60cm×48cm×46cm  $P_6$ ：48cm×44cm×12cm  $P_8$ ：48cm×42cm×15cm。

南東隅に位置する $P_3$ と南西隅に位置する $P_7$ は貯藏穴と思われ、規模はそれぞれ $P_3$ が105cm×75cm、深さ33cm、 $P_7$ が90cm×83cm、深さ42cmを測る。

炉は住居址中央や北東よりから検出された。床を浅く掘り込んだ地床炉で楕円形を呈し、70cm×55cmを測る。炉の南側縁辺に枕石が1個設置されている。

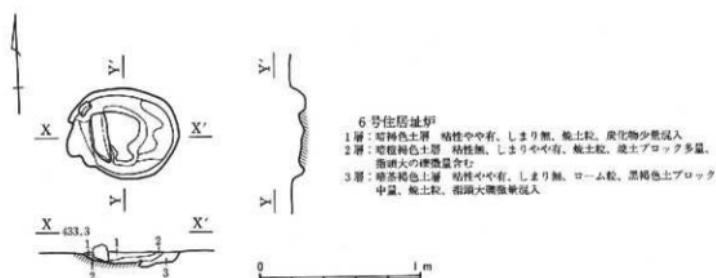
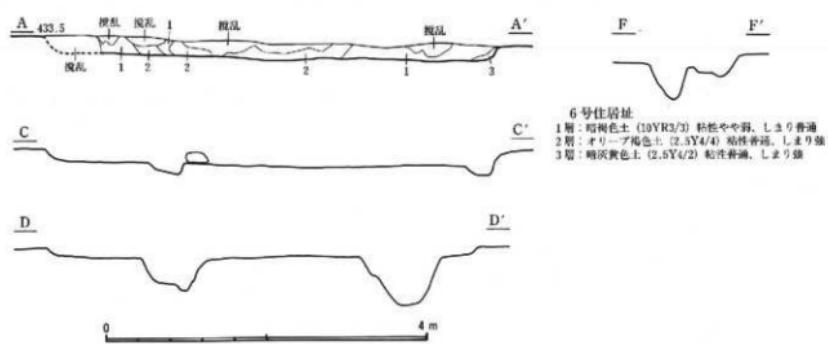
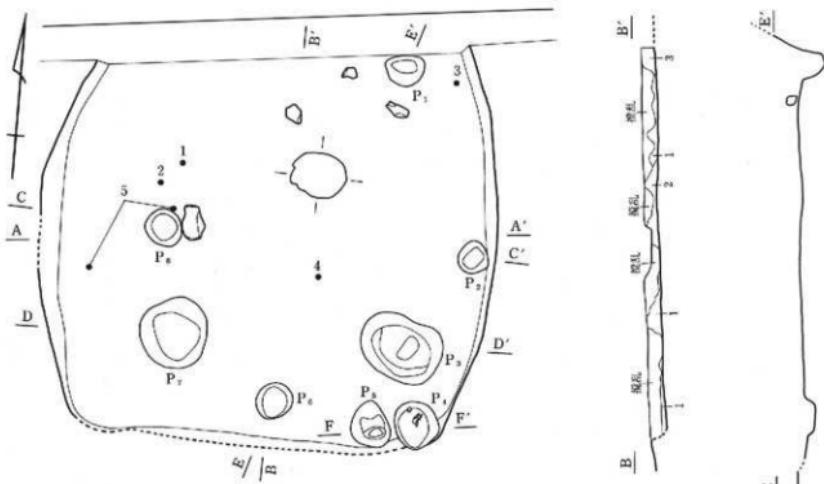
出土遺物は住居址の全面にわたり出土したが細片が多く、ほとんどが覆土内のもので床直のものは少ない。住居址南西側の覆土内よりミニチュア土器が出土している。



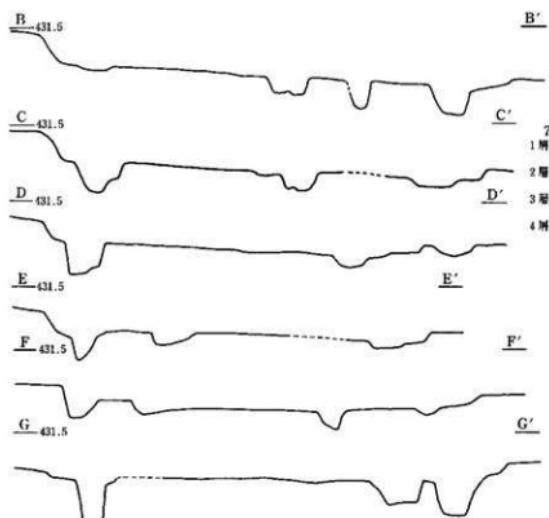
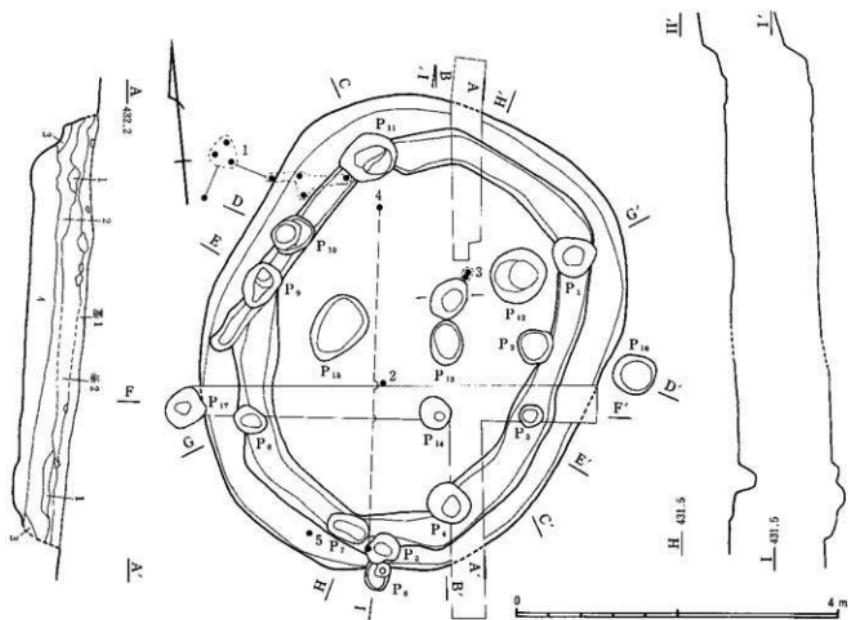
第70図 6号住居址出土遺物 (1/3)

第5表 6号住居址出土遺物観察表

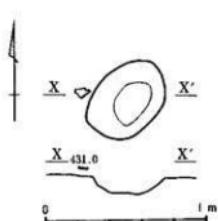
1	甕	A : I (17.3), h (6.0)。B : 口縁部-肩部破片。C : 外面-口唇部ナデ。口辺部以下タテハケのち粗いナデ。内面-口縁部ヨコハケ。肩部ヨコハケのちヘラナデ。D : 密。E : 良。F : 明赤褐色 (2.5YR5/8)。
2	台付甕	A : b (10.6), h (4.0)。B : 脚部破片。C : 外面-上部ナデのち粗いタテハケ。下部ナナメハケ。内面-細かいヨコハケ。D : 密。E : 良。F : 外面橙色 (7.5YR6/6)、内面橙色 (5YR6/6)。
3	ミニチュア	A : 1.3.3, b 2.0, h 3.3. B : 完形。C : 外面-口唇部キザミ。体部指揮のちナデ。内面-ナデ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。
4	壺	B : 肩部破片。C : 外面-タテヘラミガキ。内面-指頭痕。D : 白石粒・黒色粒多量含む。E : 良。F : 外面橙色 (7.5YR6/6)、内面-よい黄褐色 (10YR5/4)。
5	甕	B : 脚部破片。C : 外面-ナナメハケ。内面-ヨコハケ。輪積み底以下ナナメハケ。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : 黄褐色 (7.5YR8/8)。G : 外面に炭化物付着。



第71図 6号住居址・炉 (1/60・1/30)



- 1層：暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強、しまり強、粒子や小根。颗粒状の黑色土混入  
 2層：オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 粘性やや強、しまり普通、粒子普通  
 3層：褐灰色土 (10YR4/1) 粘性普通、しまりやや弱、粒子や小根  
 4層：暗灰褐色土 (2.5Y4/2) 粘性やや強、しまり強、粒子密、ローム粒子多量混入



第72図 7号住居址・炉 (1/60・1/30)

7号住居址（第72図、図版7）

I・II-g・h区に位置し、南西側に3.7m離れて8号住居址がある。上部を溝状遺構に切られ、また南側を削平されているが、遺存状態は比較的良好である。

平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸が5.9m、短軸は4.8m、壁高は10~30cmを測る。長軸方向の方位はN=30°-Wを示す。

床面はほぼ全面が平坦であるが、部分的に擾乱を受け軟弱な状態となっている。

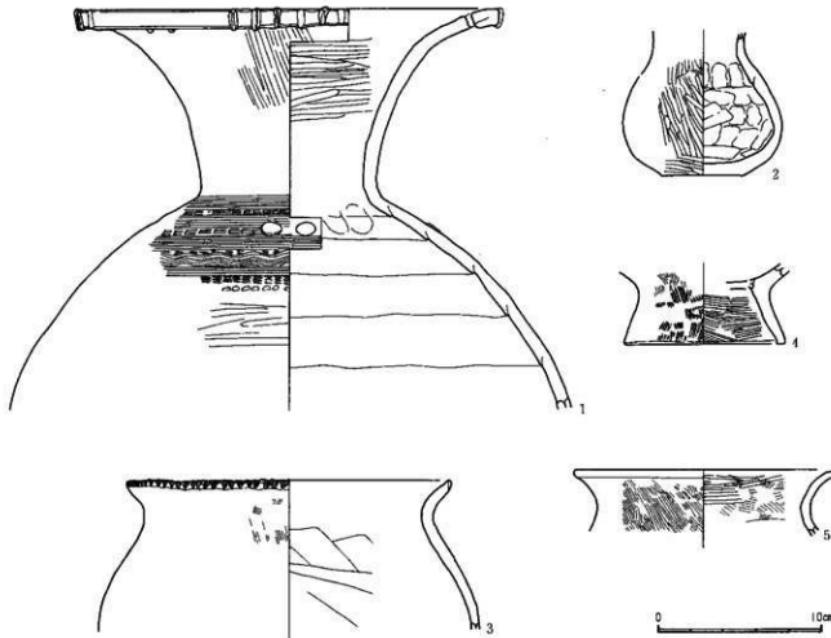
覆土は4層に分けられ、自然な堆積を示している。

壁際には幅30~60cm、深さ5~10cmの周溝が全周する。周溝の底部は平坦である。

ピットは周溝内に壁に沿った形で9箇所、住居址中央部付近に5箇所、屋外ピットが3箇所、の計17箇所が検出された。それぞれの規模は次のとおりである。 $P_1$ : (長軸) 55cm × (短軸) 49cm × (深さ) 48cm  $P_2$ : 45cm × 43cm × 14cm  $P_3$ : 30cm × 28cm × 10cm  $P_4$ : 55cm × 48cm × 30cm  $P_5$ : 40cm × 38cm × 8cm  $P_6$ : 35cm × 30cm × 15cm  $P_7$ : 52cm × 34cm × 24cm  $P_8$ : 42cm × 32cm × 58cm  $P_9$ : 58cm × 43cm × 40cm  $P_{10}$ : 55cm × 45cm × 40cm  $P_{11}$ : 73cm × 58cm × 38cm  $P_{12}$ : 70cm × 68cm × 30cm  $P_{13}$ : 56cm × 40cm × 14cm  $P_{14}$ : 42cm × 38cm × 34cm  $P_{15}$ : 90cm × 62cm × 16cm  $P_{16}$ : 54cm × 50cm × 15cm  $P_{17}$ : 50cm × 50cm × 22cm。周溝内に位置するピットが柱穴と思われる。

炉は住居址中央やや北東よりから検出された。擾乱を受け遺存状態はあまりよくない。床を浅く掘り込んだ地床炉で楕円形を呈し、55cm × 40cmを測る。

出土遺物は住居址のほぼ全面にわたり出土したが、ほとんどが覆土上層のものである。また、住居址の北西側には口縁に棒状浮文をもつ壺型土器No.1の破片が散乱して出土し、一部が7号住居址内に流入していた。



第73図 7号住居址出土遺物 (1/3)

第6表 7号住居址出土遺物観察表

1	壺	A : l 25.8, h (25.0)。B : 口縁部3/5、頸部以下1/3。C : 外面一口唇部ヨコナデ。頸部粗いナナメハケ。胴部上方に横縞模様を4段施し、その間に縦状文2段、横縞波状文1段を施す。その下に横縞状工具による刺突文および並列点文を施す。以下にヨコヘラミガキ。内面一摩滅著しく調整不明。口辺部にヨコヘラミガキ、頸部に指揮え残る。D : 挿葉物多量に含む。E : やや不良。F : 浅黄褐色(10YR8/4)。G : 口辺部に棒状貼付文(6本4単位)、口辺部上方に2孔1単位の小孔(4単位)、胴部に円形貼付文(2個4単位)あり。
2	小型壺	A : b 5.0, h (8.9)。B : 約1/2。C : 外面一頸部摩滅により不明。胴部以下ヘラナデのちヘラミガキ。底部不定方向のヘラミガキ。内面一頸部輪積み時の指痕残す。胴部以下指揮えのちヘラナデ。D : 直径3mmの大白石粒を疎らに含む。E : 良。F : 外面淡赤褐色(2.5YR5/8)、内面橙色(2.5YR6/8)。
3	甕	A : l (19.8), h (9.4)。B : 口縁部～胴部破片。C : 外面一口唇部ヨコナデのち刻み。頸部以下は摩滅により不明。一部タテハケ残る。内面一口縁部摩滅により不明。頸部以下ナナメ方向のヘラナデ。D : 黒色粒等挿葉物多量に含む。E : 良。F : 外面浅黄色(7.5YR8/6)、内面橙色(2.5YR6/8)。
4	台付甕	A : b (9.6), h (5.0)。B : 脚部破片。C : 外面一太いタテハケ。部分的にナナメが入る。内面一胴部下半ヘラナデ。脚部太いヨコハケ。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : 橙色(2.5YR6/8)。
5	甕	A : l 15.8, h (4.0)。B : 口縁部のみ完形。C : 外面一口唇部ヨコナデ。頸部以下細かいタテハケ。内面一口縁部以降ヨコハケのち一部ヨコヘラミガキ。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : 橙色(5YR7/8)。

## 8号住居址(第74・75図、第7表、図版7・21)

I-f・g区に位置し、西側に3.5m離れて9号住居址がある。上部を溝状造構に切られるが、遺存状態は良好である。

平面形態は住居址南側2/3が調査区域外にかかるため一部不明であるが、隅丸方形を呈すると思われる。規模は(5) m × (3.6) m、壁高は40~50cmを測る。主軸方向は不明。

床面は全面が堅緻で、貼り床となっている。ほぼ平坦であるが北東隅部はやや高くなっている。また北東隅には焼土溜りが検出された。

覆土は6層に分けられ、レンズ状の自然な堆積を示している。

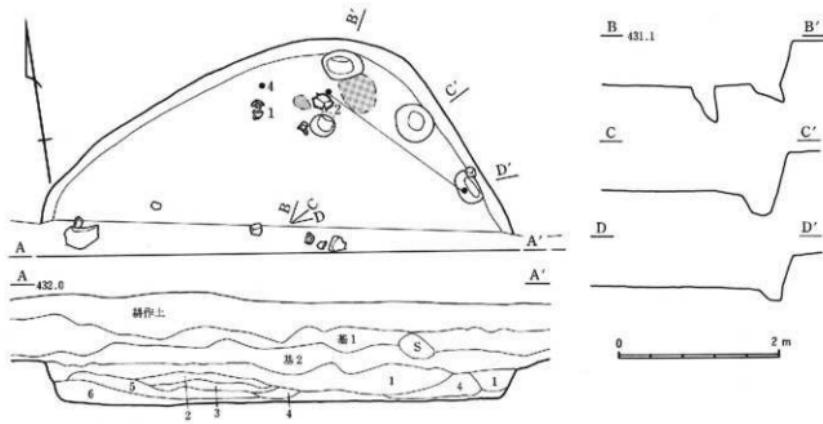
ピットは東側の壁に沿って4箇所検出された。それぞれの規模は次のとおりである。P<sub>1</sub>:(長軸)50cm×(短軸)36cm×(深さ)25cm P<sub>2</sub>:50cm×46cm×28cm P<sub>3</sub>:43cm×26cm×16cm P<sub>4</sub>:30cm×30cm×45cm。

炉は検出されなかった。調査区域外に位置すると思われるが不明である。

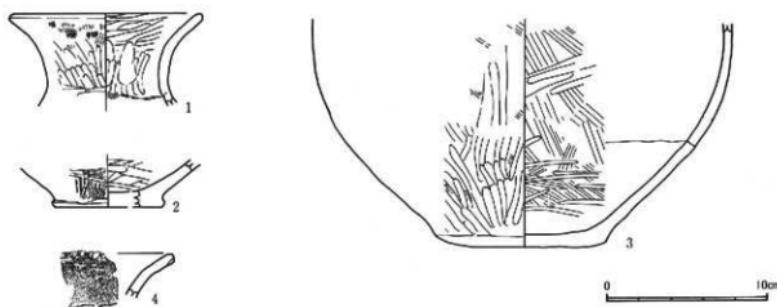
出土遺物は北東隅に集中して検出され、床面上から正位で壺型土器の胴部～底部片が出土している。

第7表 8号住居址出土遺物観察表

1	壺	A : l 11.6, h (5.6)。B : 口縁部～頸部完形。C : 外面一口縁部ヨコナデ。口辺部～頸部タテハケのちタテヘラミガキ。肩部ヨコヘラミガキ。内面一口縁部ヨコヘラミガキ。頸部指揮えのちタテヘラミガキ。D : 黒色微粒子多量に含む。E : 良。F : 橙色(7.5YR7/6)。
2	甕	A : b (6.6), h (2.9)。B : 底部破片。C : 外面一太いハケのち部分的にヘラミガキ。内面一ハケのちミガキに近い丁寧なナナメ。D : 非常に密。E : 良。F : 外面橙色(5YR6/6)、内面橙色(2.5YR6/8)。
3	甕	A : b 10.4, h (14.0)。B : 底部完形。C : 外面一胴部以下ナナメハケのちタテヘラミガキ。内面一粗いハケのち疎らに細かいヨコヘラミガキ入る。D : 密。E : 良。F : 外面橙色(5YR6/6)、内面橙色(5YR7/8)。G : 底部木製痕がかすかに残る。
4	甕	B : 口縁部破片。C : 外面一口唇部割れ。口辺部ナナメハケ。内面一ハケのちヘラミガキ。D : 白石粒・黒色粒含む。E : 良。F : 橙色(2.5YR6/8)。



第74図 8号住居址 (1/60)



第75図 8号住居址出土遺物 (1/3)

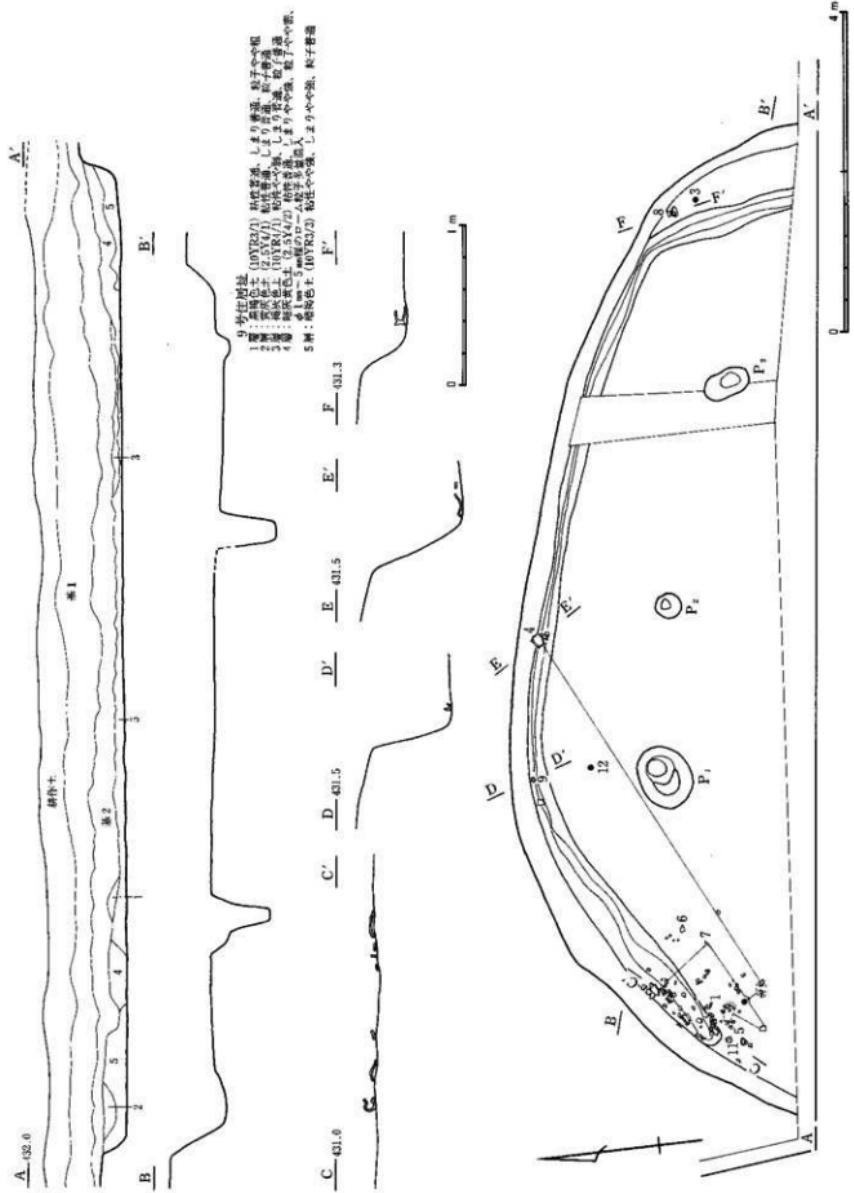
#### 9号住居址 (第76・77図、第8表、図版8・22)

I・II-e・f区に位置し、北東側に12m離れて1号住居址がある。上部を溝状遺構と3号土坑に切られるが、遺存状態は比較的良好である。

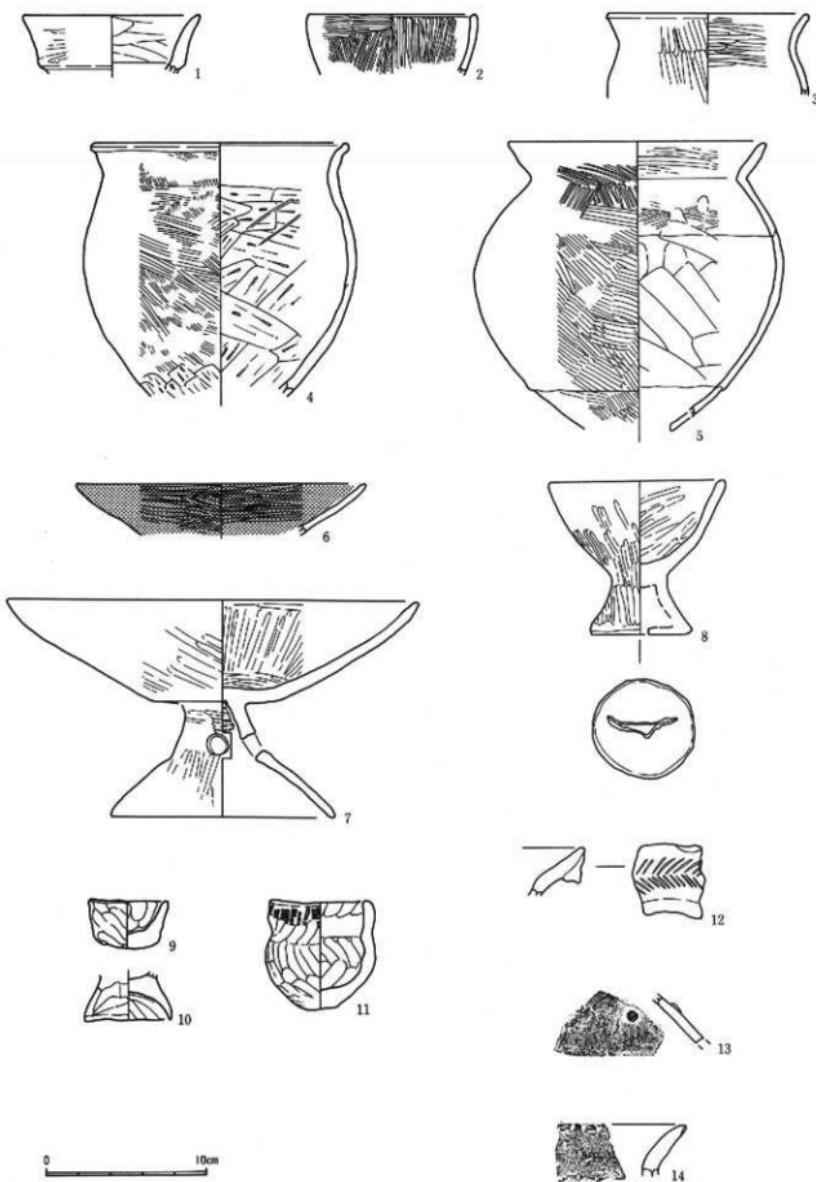
平面形態は住居址南側が調査区域外にかかるため不明である。規模は現存長で(12.3)m×(4)m、壁高は30~40cmを測る大型住居である。主軸方向は不明。

床面はやや軟弱。

覆土は5層に分けられ、ほぼ自然な堆積を示している。



第76图 9号住居址 (1/60 - 1/30)



第77圖 9號住居址出土遺物 (1/3)

壁際には幅15~60cm、深さ4~13cmの周溝があり、北西壁で途切れている。周溝の底部は平坦である。

ピットは北側の壁に沿って3箇所検出された。それぞれの規模は次のとおりである。P<sub>1</sub>：(長軸)80cm×(短軸)65cm×(深さ)74cm P<sub>2</sub>：32cm×30cm×62cm P<sub>3</sub>：60cm×30cm×74cm。

炉は検出されなかった。調査区域外に位置すると思われるが不明である。

出土遺物は豊富で、住居址のほぼ全面から出土している。遺物のほとんどは床面から若干浮いた形で出土している。特に上器片が集中していた北西隅の周溝周辺には、台付甕一個体分の破片が散乱し、その南側からミニチュア上器、高坏などが出土している。これらはすべて周溝の底および床面から浮いた形で出土しており、周溝埋没後に廃棄されたものと考えられる。また床面上の遺物として、脚部が中空の高坏が北東隅の壁際より横位で出土している。

出土した土器は他の住居址に比べ器種構成が豊富で、在地系の土器のほか、北陸系の壺型土器、尾張系の壺型土器、高坏なども含まれている。

第8表 9号住居址出土遺物観察表

1	壺	A : 1 (10.8)、h (3.6)。B : 口縁部破片。C : 外面一口縁部一部ヨコヘラミガキ残る。頸部ナデ。内面一口縁部ヘラナデ。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : 外面橙色 (7.5YR7/6)、内面橙色 (5YR7/8)。
2	壺	A : 1 (10.3)、h (3.8)。B : 口縁部破片。C : 外面一口縁部上半ヨコヘラミガキ。以下ナナメヘラミガキ。内面一細かなタテヘラミガキ。D : 黒色微粒子含む。E : 良。F : 外面橙色 (5YR6/6)。
3	鉢	A : 1 (12.2)、h (5.2)。B : 口縁～脚部破片。C : 外面一口縁部ナデ。以下タテヘラミガキ。内面一ハケのちヨコヘラミガキ。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : によい橙色 (7.5YR6/4)。
4	壺	A : 1 (15.8)、h (15.7)。B : 口縁から脚部2/5。C : 外面一口唇部ヨコナデ、口辺～脚部ヨコハケからナナメハケ。下部にケズリ入る。内面一口縁部ヨコハケのちナデ。頸部以下ケズリ。D : 挾雜物多量に含む。F : 外面灰褐色 (7.5YR4/2)、内面橙色 (5YR6/6)。G : 内面に炭化物付着。
5	甕	A : 1 (16.0)、h (18.0)。B : 口縁～脚部4/5。C : 外面一口縁部ナナメハケのちヨコナデ。頸部以下タテハケ～ナナメハケ。内面一口縁端部ヨコナデ。口辺部ヨコハケ。脚部上半指押えのちヨコハケ。脚部下半指押えのちヘラナデ。D : 白石粒、赤色粒多量に含む。E : 良。F : 外面橙色 (5YR7/6)、内面橙色 (5YR6/6)。G : 脚部内外面に炭化物付着。
6	高坏	A : 1 (17.8)、h (3.2)。B : 口縁部破片。C : 内外面ともに細かなヨコヘラミガキ。D : 密。E : 良。F : 明赤色。G : 内外面ともに赤色。
7	高坏	A : 1 (25.3)、b13.8、h13.7。B : 脚部ほぼ完形。C : 外面一部タテヘラミガキ。脚部上半ヨコヘラミガキ。裾部タテヘラミガキ。内面一部タテヘラミガキ。脚部上部ヨコハケ。裾部摩滅。D : 赤色粒多量に含む。E : やや甘い。F : 橙色 (5YR7/8)。G : 三方透かし。
8	高坏	A : 1 (10.8)、b5.5、h9.5。B : ほぼ完形。C : 外面一口唇部ヨコナデ。以下タテヘラミガキ。底部ナデ。内面一部ナナメヘラミガキ。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。G : 脚部中空。
9	ミニチュア	A : 1 (4.7)、b3.2、h3.0。B : 完形。C : 内外面ともにナデ。D : 白石粒多量に含む。E : 良。F : によい黄橙色 (10YR7/4)。G : 底部に黒斑。
10	ミニチュア	A : b5.3、h (3.0)。B : 脚部のみ1/2。C : 外面～脚部ヘラナデ。端部ヨコナデ。内面一ヘラナデ。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : 外面橙色 (5YR6/6)、内面灰褐色 (5YR6/6)。
11	ミニチュア	A : 1 (6.0)、b1.9、h6.9。B : 完形。C : 外面一口縁部歯齒状工具による刺突文。以下ヘラナデ。内面一ナデ。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : 橙色 (5YR7/6)。
12	壺	B : 口縁部破片。C : 外面一折り返し口縁部凹線文。口辺部ヨコナデ。内面一先端の鋭い工具による矢羽根状文様。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。
13	壺	B : 脚部破片。C : 外面一細網文を綾杉状に施す。円形貼付文。内面一太いヨコハケ。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : 外面橙色 (5YR7/8)、内面橙色 (5YR6/8)。
14	甕	B : 口縁部破片。C : 外面一口唇部カザミ。口辺部タテハケ。内面一ヨコハケのちヨコヘラミガキ。D : 白石粒を若干含む。E : 良。F : 外面暗赤褐色 (5YR3/2)、内面明赤褐色 (5YR8/6)。

## (2) 遺構外出土遺物

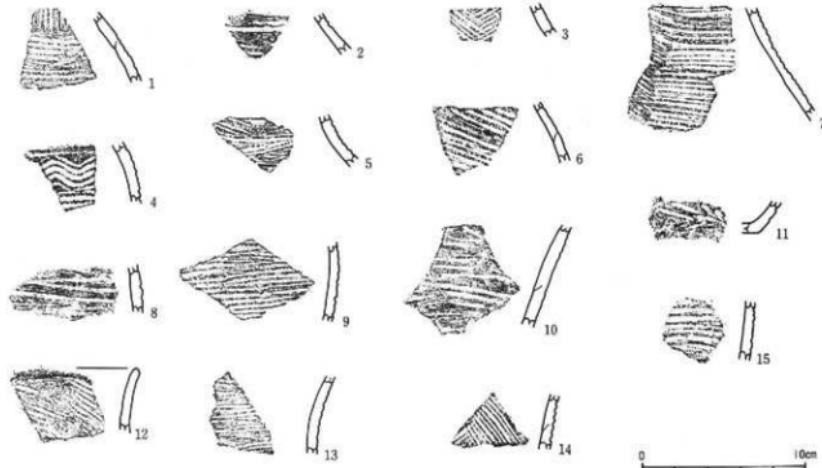
### 1) 弥生時代前期後半～中期初頭の土器 (第78図、第9表、図版22)

いわゆる条痕文系と呼ばれる土器である。1～11が壺型土器、12～15が甕型土器であるが、破片のため器種の決定については若干不明瞭な部分を残している。条痕の施文に貝殻を用いたものは1例もなく、ヘラ状工具、先端部が丸い棒状工具および櫛状工具を用いたものである。条痕の施文方向はヨコが多いが、3は縦方向の羽状となっている。3、7は施文方法および形態から、他の土器に比べて若干時期が早い可能性が高い。4は壺型土器の胴部と考えられるが、ヘラ状工具により横線と波状文を施している。12は甕型土器の口縁部であるが、割みを持たず口辺部にヘラ状工具による条痕が施されている。

### 2) 弥生時代後期後半～古墳時代の土器 (第79・80図、第10表、図版22)

遺構外から検出された土器のうちおもに外来系のものを掲載した。1、6～8、17はいわゆる北陸系の土器で、甕型土器が大部分を占めるが、壺型土器および鉢型土器も若干見られる。破片が多いため全体を把握できるものは少ない。17は口縁部外面に擬円線が施され、内面肩部以下にケズリが入るいわゆる月影式の甕型土器で、北陸系の代表的なものである。搬入品と思われるものはなく、すべて在地で製作されたものと考えられる。北陸系の土器のほとんどは調査区南東側から出土している。

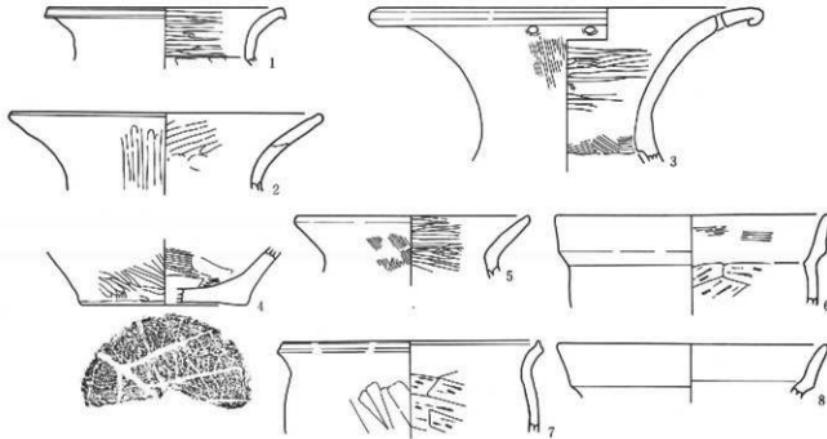
18、19はいわゆる尾張系の土器である。18はS字状口縁台付甕の肩部破片と思われるが、器壁が厚く、胎土も異なることからS字を模倣した在地の土器の可能性が高い。19は高環の口縁部破片であるが、内面にヘラ状工具を用いた文様が施されている。



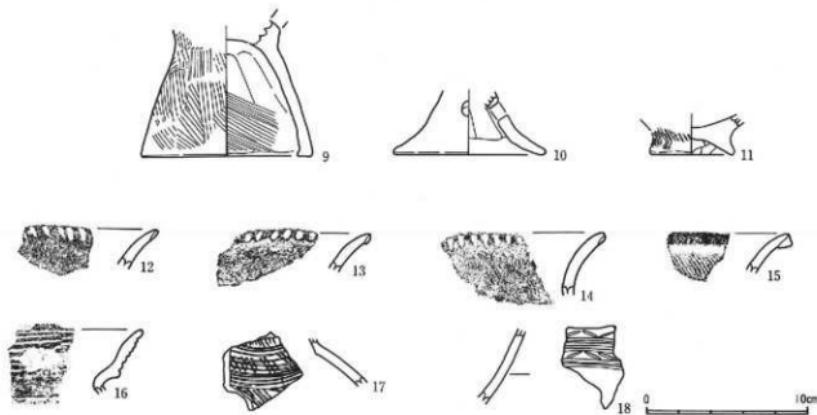
第78図 遺構外出土土器(1) (条痕文系)

第9表 道構外出土遺物観察表（条痕文系）

1	壺	B:肩部破片。C:外面一櫛状工具による条痕。内面一ナデ。D:微白石粒多量に含む。E:良。F:橙色(7.5YR6/8)。
2	壺	B:肩部破片。C:外面一ヘラ状工具による条痕。内面一指押え。D:密。E:良。F:外面にぶい黄褐色(2.5YR6/3)、内面黒色(2.5YR2/1)。
3	壺	B:肩部破片。C:外面一櫛状工具による条痕。内面一ナデ。D:挟雜物少量含む。E:良。F:明黄褐色(10YR7/6)。
4	壺	B:胴部破片。C:外面一ヘラ状工具による平行沈線および液状文。内面一ナデ。D:白石粒多量に含む。E:良。F:にぶい黄褐色(10YR6/4)。
5	壺	B:肩部破片。C:外面一2本単位の工具による条痕。内面一ナデ。D:挟雜物少量含む。E:良。F:橙色(5YR6/6)。
6	壺	B:胴部破片。C:外面一櫛状工具による条痕。内面一ナデ。D:白石粒多量に含む。E:良。F:にぶい黄褐色(10YR4/3)。
7	壺	B:肩部破片。C:外面一櫛状工具による条痕。内面一ナデ。D:白石粒・金雲母多量に含む。E:良。F:橙色(7.5YR7/6)。
8	壺	B:胴部破片。C:外面一ヘラ状工具による条痕。内面一ナデ。D:白石粒・金雲母多量に含む。E:良。F:外面黒褐色(10YR3/2)、内面にぶい黄褐色(10YR6/4)。
9	壺	B:胴部破片。C:外面一櫛状工具による条痕。内面一ヘラナデ。D:白石粒・金雲母多量に含む。E:良。F:外面にぶい黄褐色(10YR5/4)、内面明黄褐色(10YR6/6)。
10	壺	B:胴部破片。C:外面一棒状工具による浅い条痕。内面一ヘラナデ。D:挟雜物少量含む。E:良。F:橙色(5YR6/8)。
11	壺	B:底部破片。C:外面一ヘラ状工具による浅い条痕。内面一ナデ。D:白石粒・金雲母多量に含む。E:良。F:にぶい黄褐色(10YR4/3)。
12	甕	B:口縁部破片。C:外面一ヘラ状工具による条痕。内面一ヘラケズリ。D:白石粒・金雲母多量に含む。E:良。F:明赤褐色(5YR5/6)。
13	甕	B:胴部破片。C:外面一ヘラ状工具による条痕。内面一ヘラナデ。D:挟雜物含む。E:良。F:橙色(5YR6/6)。
14	甕	B:胴部破片。C:外面一櫛状工具による条痕。内面一ヘラナデ。D:微白石粒含む。E:良。F:外面にぶい黄褐色(10YR5/4)、内面にぶい黄褐色(10YR4/3)。
15	甕	B:胴部破片。C:外面一櫛状工具による条痕。内面一ヘラケズリ。D:白石粒多量に含む。E:良。F:外面明赤褐色(5YR5/6)、内面黒色(2.5YR2/1)。



第79図 道構外出土遺物2) (弥生後期~古墳前期) (1/3)



第80図 遺構外出土遺物(3) (弥生後期～古墳前期) (2) (1/3)

第10表 遺構外出土遺物観察表(1)

1	壺	A : l (14.4)、h (3.6)。B : 口縁部破片。C : 外面一口口唇部擬四線。口辺部ヨコナデ。内面一口縁～頭部ヨコハケのちヨコヘラミガキ。頭部以下ヘラナデ。D : 密。E : 良好。F : にぶい橙色 (7.5YR7/4)。
2	壺	A : l (19.0)、h (4.9)。B : 口縁部破片。C : 外面一口口唇部ヨコナデ。口辺部タテヘラミガキ。内面一口縁部ナナメヘラミガキ。D : 赤色粒子多量に含む。E : 良好。F : にぶい黄褐色 (10YR7/4)。
3	壺	A : l (23.0)、h (9.5)。B : 口縁～頸部破片。C : 外面一摩滅著しく調整不明。部分的にタテハケ残る。内面一口縁部ハケのちヨコヘラミガキ。頭部ヨコハケ。D : 挿雜物多量に含む。E : 良好。F : にぶい黄褐色 (10YR5/4)。G : 内面に赤色並彩の痕跡あり。2孔1単位の小孔あり。
4	壺	A : b (10.0)、h (3.6)。B : 底部l/2。C : 外面一ハケのちナナメヘラミガキ。内面一ハケのち強いナデ。D : 挿雜物多量に含む。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。G : 木葉底。
5	甕	A : l (14.2)、h (3.8)。B : 口縁部破片。C : 外面一口口唇部ヨコナデ。口辺部以下ナナメハケのちナデ。内面一ハケのちヨコヘラミガキ。D : 白石粒、金雲母多量に含む。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。
6	甕	A : l (15.8)、h (5.8)。B : 口縁～頸部破片。C : 外面一口唇部凹状のヨコナデ。頸部ヨコナデ。胴部纏維束状の工具によるナデ。内面一口縁～頭部纏維束状の工具によるナデ。胴部ヘラケズリ。D : 密。E : 良。F : 明赤褐色 (2.5YR5/6)。
7	甕	A : l (16.3)、h (3.3)。B : 口縁部破片。C : 外外面一ヨコナデ。D : 非常に密。E : 良・硬質。F : 橙色 (5YR7/8)。
8	鉢	A : l (16.6)、h (5.7)。B : 口縁部破片。C : 外外面一摩滅により調整不明。D : 挿雜物多量に含む。E : 良。F : 淡橙色 (2.5YR7/8)。
9	台付甕	A : b (15.0)、h (5.5)。B : 脚部破片。C : 外面一タテハケ。内面一ヘラナデのちナナメハケ。D : 挿雜物多量に含む。E : 良。F : 外面淡浅黃褐色 (7.5YR7/8)、内面橙色 (5YR6/8)。
10	台付甕	A : b 5.0、h (2.5)。B : 脚部完形。C : 外面一太いタテハケ。端部ナデ。内面一ケズリ。D : 微石粒多量に含む。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。
11	高坏	A : b (9.2)、h (3.9)。B : 脚部破片。C : 外面一ヨコナデ。内面一脚部ヘラナデ。裾部強いヨコナデ。D : 金雲母多量に含む。E : 良。F : 浅黃橙色 (7.5YR8/6)。

第11表 遺構外出土遺物観察表(2)

12	甕	B：口縁部破片。C：外面一口唇部キザミ。口辺部タテハケ。内面一ナナメハケのちヨコヘラミガキ。D：密。E：良。F：淡褐色（2.5YR6/8）。
13	甕	B：口縁部破片。C：外面一口唇部キザミ。口辺部ナデ。内面一ヨコハケのちヨコヘラミガキ。D：挟雜物少量含む。E：良。F：淡褐色（7.5YR4/3）。
14	甕	B：口縁部破片。C：外面一口唇部キザミ。口辺部タテハケ。内面一摩滅により調整不明。D：挟雜物多量に含む。E：良。F：橙色（5YR7/8）。
15	甕	B：口縁部破片。C：外面一口唇部キザミ。口辺部タテハケ。内面一ナナメハケのちヨコヘラミガキ。D：微白石粒多量に含む。E：良。F：によい黄褐色（10YR5/4）。
16	甕	B：口縁部破片。C：外面一口縁部擬四線。頸部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ。D：挟雜物多量に含む。E：良。F：によい赤褐色（5YR4/3）。
17	S字甕	B：肩部破片。C：外面一ナナメハケのち横描横縁文。内面一ヘラナデ。D：微白石粒多量に含む。E：良。F：橙色（5YR6/6）。
18	高环	B：口辺部破片。C：外面一ナナメヘラミガキ。内面一ヘラ状工具による直線文（3本）と（2本）の間に山形に施された沈線が2段作る。以下ヘラミガキ。D：長石多量に含む。E：良。F：によい黄褐色（10YR7/4）。

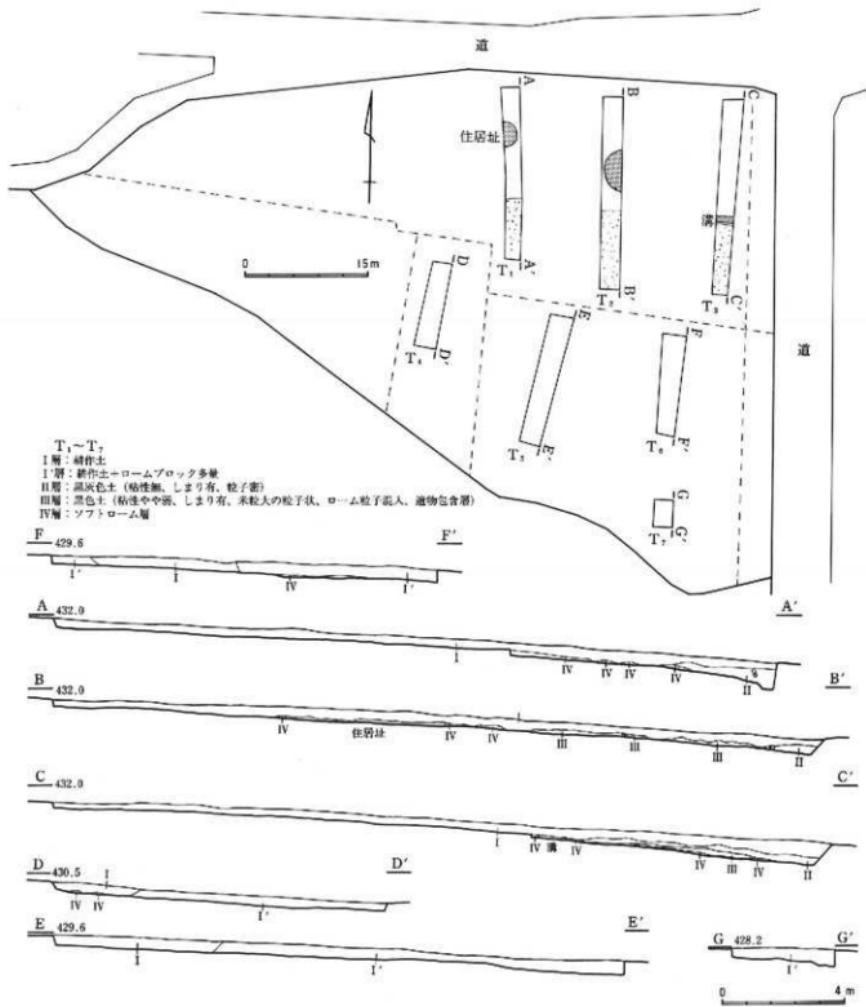
## 第4節 その他の遺構と遺物

### (1) 溝状遺構

1号溝状遺構・2号溝状遺構（第5図・図版12）

I・II-e～hグリッドに所在し、調査区南側に位置する。I-gグリッドにおいて2号溝状遺構が分岐する。1号溝状遺構は東西方向に走り2号溝状遺構と分岐するところにおいて急角度で走行方位を南北方向に変え、北へ向かうにしたがって浅くなっている。2号溝状遺構は南西-北東方向に緩やかな弧を描きながら走行し、調査区西部より遺跡の外へと伸びている。それぞれの遺構において礫が出土しているが流れ込みによるものであろう。1・2号溝状遺構とも深さが15cm程度で断面形は皿状を呈している。

1号溝状遺構と2号溝状遺構の切り合い関係は不明だが、1号溝状遺構は弥生時代終末～古墳時代初頭の8・9号住居を2号溝状遺構は同じく古墳時代初頭の7号住居をそれぞれ切っている。遺物は出土していない。

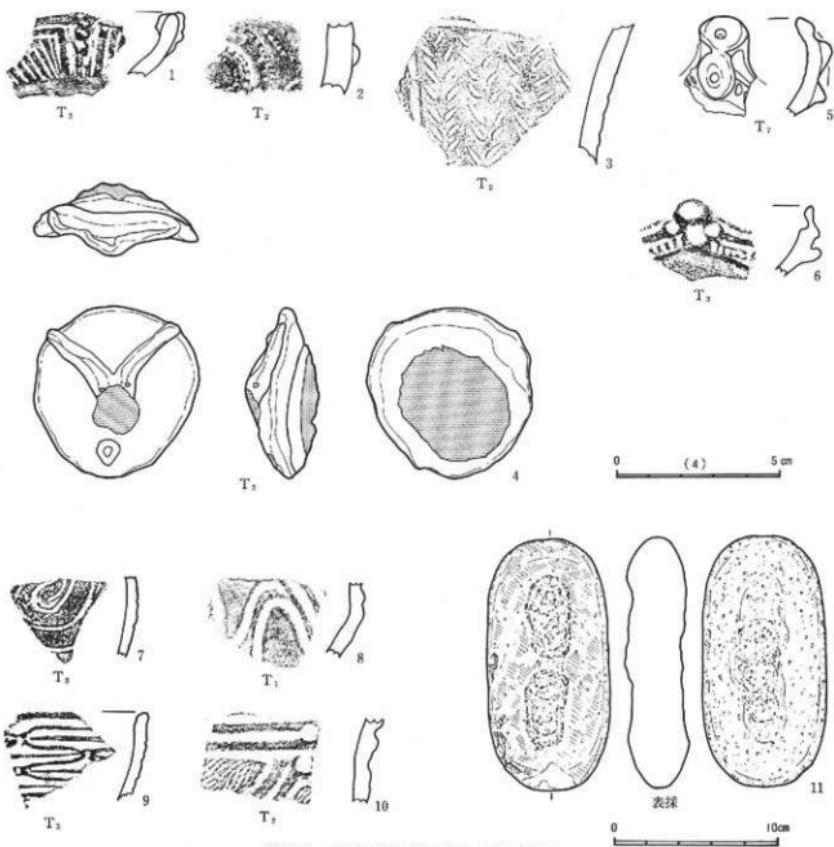


第81図 試掘トレンチ配置図及びセクション図 (1/600・1/160)

## 第5節 試掘調査

遺跡の発掘調査範囲を確定する試掘調査において出土した遺物を図示する。

1～2は縄文時代中期落鉢式土器。3は曾利V式土器。4は土偶頭部。粘土紐の貼り付けによって鼻・眉をつなげ、棒状工具による刺突で目を表現している。鼻の一部と脣部以下は欠損して存在しない。5～9は堀之内1式土器。10は縄文時代晚期終末の離山式に比定され、網状文が結節点から三分岐している。



第82図 試掘出土遺物(1) (1/3・2/3) (縦文)

第12表 試掘出土遺物観察表

1	甕	A : l (15.0)、h (3.2)。B : 口縁部-頸部破片。C : 外面-口唇部ヨコナデ。以下タテハケ。内面-口縁ヨコハケ。頭部ヘラナデ。D : 挾雜物多量に含む。E : 良。F : 橙色 (2.5YR6/8)。
2	甕	B : 口縁部破片。C : 外面-口唇部キザミ。口辺部ナナメハケ。内面-ヨコハケ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR6/6)。
3	甕	B : 口縁部破片。C : 外面-口縁部太いナナメハケ。内面-太いヨコハケ。D : 密。E : 良。F : 橙色 (5YR7/8)。



第83図 試掘調査出土遺物(2) (1/3) (弥生~古墳時代)

## 第IV章 調査の成果と課題

今回の調査では住居址9軒、土坑31基、溝状遺構2条、埋設土器1、焼土溜まり7、集石群が検出された。本章では時期ごとに遺構・遺物の様相を述べる。

### 第1節 旧石器時代～縄文時代の遺構と遺物について

#### (1) 旧石器時代

一括遺物の中で旧石器時代のナイフ形石器と二次加工のある剥片が検出されている。本遺跡の近隣に所在する六科丘遺跡や県教委が調査した長田口遺跡などの市之瀬台地上の遺跡においても当該期のナイフ形石器が発見されている。隣接地の県教委の調査では鍛屑であるAT層(姶良Tn火山灰)が検出されている(保坂和1993)。保坂康夫氏は山梨県内の旧石器時代をI～VI期にわけて分類している(保坂康1999)が本遺跡出土の石器はAT層以降で石刃技法の卓越するIV期に位置付くものであろう。このIV期は県内及び全国的な規模においても遺跡が増加する時期とされており、台地上において発見される旧石器はほとんどこの時期のものであると考えられる。從来、この時代の遺跡の存在についてはあまり注意が払われなかつた傾向があるが、台地上にはキャンプサイト的な小遺跡が散在していると考えられ、今後の調査において十分に注意する必要があろう。

#### (2) 縄文時代中期

縄文時代で最も占いものでは中期初頭の土器が出土している。遺構に伴うものはないが特に第16図1番の土器は五領ヶ台2式の文様構成を残しつつ次の猪沢式期初段階に盛興するハート型人面装飾を持っていることから、同タイプの土器の初源的な形態を示すものであろう。この土器は長野県大石遺跡出土例のようにヘラ状工具によるシャープな沈線で抽象的な顔面表現を行い、且つ五領ヶ台式土器の特徴である縄文地文になっている。これは次の猪沢期に盛興する無文地で押し引き文や陰線で顔面表現を行うものと明らかに異なっており、クランク化せず縱方向の構成を持つ觸部文様と共に中期初頭の様相をよく残すものである。

中期中葉段階としては猪沢期の土器が若干と藤内期の土器がわずかに出土している。中期後葉は曾利IV～V式土器が出土している。そのほとんどが網片であるが曾利IV期の埋設土器が1基出土している。過去の県教委が行った調査とあわせて本遺跡の縄文時代中期の様相は中期初頭五領ヶ台終末から中葉の猪沢期にかけて僅かに遺構・遺物が見られる程度で、その後中期後葉の曾利IV～V期までは土器片が少し確認されるものの遺構は発見されていない。しかし、何にせよ本遺跡における遺物や遺構の出土量は当該期の他の遺跡と比べてみても多いとは言えず、縄文時代中期の本遺跡は断続的に短期間営まれた小集落であったのであろうと想像される。

#### (3) 縄文時代後期

縄文時代後期に入ると後期初頭称名寺～堀之内2式までの遺物が本遺跡において数多く出土している。土器は残念ながらほとんどが破片資料であるが、その遺物量から中期とは異なった縄文人の頻繁な活動が窺い知れる。

遺物は調査区南側の谷に向かい緩やかに傾斜し始めるところから堆積する黒色土帯に多く含まれている。時期としては中期中葉猪沢式土器・中期後葉曾利IV～V式土器・後期初頭称名寺式土器・後期前葉堀之内式土器・晚期終末水1式土器などが含まれているが圧倒的に量が多いのは後期初頭～前葉にかけてのものである。この後期の土器について細かく見ていくと称名寺式土器はI式中段階(註1)のものがやや見られ、さらに次の堀之内式土器は1式中段階から2式古段階にかけてのものが圧倒的に多く、黒色土帶出土土器の半数以上をこの時期のものが占める。朝顔形深鉢土器や注口土器など様々なタイプの土器が出土しているが、主に西側に分布し称名寺式土器の系譜を引く下北原系の土器は出土量が少なく、本遺跡の中では客体的な土器といえる。

特殊な遺物としては土製の蓋と土偶頭部が出土している。土製の蓋は県教委が行った本遺跡の調査でも当該期

のものが出土している。県教委の調査で出土した土製蓋は断面形が碗状になっており、断面形がほぼ水平に近い今回の出土品と様子が異なる。七偶は試掘調査で出土したものだが大泉村金生遺跡出土の七偶に木遺跡出土のものと類似する上偶頭部があり、縄文時代後期前半に位置付けられる。また、この上偶はその形態からハート形土偶に分類されよう。

後期前葉期之内2式土器以降の遺物は晩期の浮線文土器まで出土しておらず、特定期間のみに生活が行われていたことが推測される。調査区に隣接する県教委の農道敷設に伴う発掘調査においても台地上面の平坦部では後期の遺物があまり出土してなく、台地の端の緩斜面に縄文後期の遺物が多く出土している。このような台地緩斜面から谷部にかけて遺構や遺物が確認されるというあり方は長坂町別当西遺跡や明野村岸敷添遺跡などの縄文時代後期初頭～前葉の遺跡の立地と同じであり、本遺跡においても盛土保存を決めた調査区外南側から台地縁辺部にそっての谷を望む緩斜面に当該期の集落が存在する可能性は高い。

調査区南側の黒色土帯（黒色土グリッド）において確認された集石群は付近から縄文時代後期前半の遺物が多量に出土したことや一部に石を並べたような跡が見られたことから当時の配石遺構群と考えられる。特に縦直下に掘り込みを持つ20・26・30・31土坑などは当該期の墓坑であると考えられるが、（註1）に記したように弥生時代終末～古墳時代初頭の7・8・9号住居の付近は土層の逆転が起こっていたり、耕作土が浅い為に搅乱で破壊されたりしている部分も多くあり、配石本来の姿を残していないと考えられることから本遺跡で検出された集石群全体に対しての積極的な評価は避けたい。また、調査で検出された単独の焼土址は本集石群に伴うものであると考えられる。

遺構に伴うものではないが黒色土グリッドA-2区より黒曜石の原石が3点とスクレーバーが1点（第6図5～8番）まとめて出土している。この黒曜石の重量は150～950gを量り、県内で出土した黒曜石の原石の中でもかなり大型の部類に入る。長崎元廣氏は長野県の縄文時代における黒曜石貯蔵について研究しており（長崎1984）、それによると「黒曜石貯蔵例は加工痕の無い原石数点ないし數十点からなる類型と、原石数点と加工痕を持つ石核や剥片とが組み合わさる類型とに2大別される。」とあり、本遺跡出土の黒曜石は後者の類型にあたる。長崎氏はさらには黒曜石貯蔵が屋外と屋内（住居内）の2種類に分けられるとしており、屋外例については黒曜石が積まれたように、かなりの厚みを持って出発することから、掘り込みは不明であっても、旧地表面下に埋納されていたと推測している。本遺跡の出土状況は黒曜石が屋外に積まれたようにして出土したことから長崎氏が述べるように本来浅い掘り込みがあり、そこに黒曜石を埋納したものと考えられる。これほどの大きな黒曜石には交換財として大きな価値があったと思われ、黒曜石原産地域および黒曜石を媒介する集落・集団との密接な交易があったと推測される。本遺跡出土の黒曜石原石は遺構に伴うものではなく明確な時期決定が出来ないが、黒色土グリッドA-2区出土土器が後期前葉の期之内式と晩期後半の浮線文土器に限られていることから、そのどちらかの時期に位置付くものであろう。

#### （4）縄文時代晩期

今回の調査では縄文時代晩期の浮線文系土器が出土している。特に7号土坑より出土した一活の遺物は県内における縄文時代晩期後半の資料を補完するものとして貴重なものである。

浮線文土器は概ね3細分されており、第一段階が女鳥羽川式（女鳥羽川段階）、第2段階が離山式（離山段階）、水1式の占段階、第3段階が水1式の新段階にあたっている（註2）。7号土坑の出土遺物（第31図）についてみてみると、離山式に出現し水1式の段階で盛興する縦密条痕文がみられず、女鳥羽川式土器の特徴とされるレンズ状付帯文が浅鉢に認められる（第31図2番）。深鉢・甕ともに縫縫が内外面に1条～数条認められ、浮線網状文は未発達である。このことから7号土坑の一活資料は女鳥羽川式に比定されるであろう。この女鳥羽川式は東北の大洞A古段階・新潟の鳥屋I式・東海の五貫森式に併行し、前形式である佐野II式を母体として形成された中部高地系の土器と考えられており、山梨県内においての女鳥羽川式段階の資料としては金生遺跡2号配石、中道遺跡遺構外出土土器などがあるが、単独遺構出土による一活資料としては本遺跡の7号土坑がはじめて（註

3)となる。また、第31回3番の甕形土器は外面向に「匁」字状の工字文がみられ、あまり内面の装飾が認められない甕形土器においてこのようなかたちを探るものは珍しいといえる。7号土坑一括土器の組成を見ると甕と深鉢、浅鉢で構成されており、金生遺跡2号配石出土土器の中で特徴的な甕形土器が認められない。これは造構の性格の差によるものだと思われる。7号土坑では白色粘土塊や土器を磨くのに使用したと思われる小型の磨石などが検出され、土器作りに関連した遺物が出土している。多量の土器が出土する縄文時代の遺跡においても土器の制作を示唆するような遺構・遺物の出土は稀であり、7号土坑の遺物組成の有り方は土器製作を考える上で参考になるものであろう。

註1 三田村美彦 1999「後期初頭」「山梨県史 資料編」の称名寺式土器3分類による。

註2 中沢道彦氏は浮線文土器に関する一連の研究（中沢1991・1993・1998）において、氷I式に先行する土器形式として女鳥羽川式、離山式を提唱している。本稿においてはこの中沢氏の区分を用いる。

註3 金生遺跡2号配石出土遺物に関しては晩期の数時期にわたっている。新津氏はこの遺構が祭壇によってある程度の期間使用され続けた施設としている（新津1983）。

#### 引用・参考文献

- 上野修一 1955 「ハート形土偶の系譜とその周辺」「関東地方後期の土偶」『土偶とその情報』研究会  
大島正之 1993 「山梨県下出土縄文土製蓋覚書」「山梨県考古学協会誌 第6号」 山梨県考古学協会  
小林青樹 1994 「縄文晚期終末の土器群について」「健康村遺跡」新宿区区民健康村遺跡発掘調査団  
小宮山隆 1995 「八ヶ岳山麓とその周辺地域の縄文後期前半集落の形成と変遷について」  
『研究報告 第6集』 帝京大学山梨文化財研究所  
小宮山隆 1997 「別当西遺跡」長坂町教育委員会  
設樂博己 1982 「中部高地における弥生土器の成立過程」「信濃」第34号4巻 信濃史学会  
清水 博 1985 「上の山遺跡」鶴形町教育委員会  
長崎元廣 1984 「縄文の黒曜石貯蔵場と交易」「中部高地の考古学III」長野県考古学会  
中沢道彦 1991 「長野県の概要」「東日本における縄作の受容 第Ⅲ分冊 東日本埋蔵文化財研究会  
中沢道彦 1993 「「女鳥羽川式」生成小論」「突帝文土器から条痕文土器へ」 条痕文土器研究会  
中沢道彦 1998 「[氷I式]の細分と構造に関する試論」「水遺跡発掘調査資料図譜」水遺跡発掘調査資料図譜刊行会  
中山誠二 1985 「甲斐における弥生文化の成立」「研究紀要2」山梨県埋蔵文化財センター  
中山誠二 1993 「甲斐弥生土器編年の現状と課題」「研究紀要9」山梨県埋蔵文化財センター  
新津 健ほか 1989 「金生遺跡II(縄文時代編)」山梨県教育委員会  
新津 健 1983 「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」「研究紀要1」山梨県埋蔵文化財センター--  
新津 健 1990 「山梨における屋外配石の変遷」シンポジウム「縄文時代屋外配石の変遷—地域的特色とその画期—」  
山梨県考古学協会  
保坂和博ほか 1993 「長田口遺跡」山梨県教育委員会  
保坂康夫 1999 「旧石器時代の編年」「山梨県史 資料編2」山梨県  
三田村美彦 1999 「後期初頭・後期前葉」「山梨県史 資料編2」山梨県  
山下考司 1986 「金山・下木戸・中道遺跡」並崎市教育委員会  
吉本洋子・渡辺誠 1999 「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究」「日本考古学」第8号 日本考古学協会

## 第2節 弥生時代後半～古墳時代前期の遺物について

今回発掘をおこなった地点は、1988年から1991年にかけて山梨県教育委員会により調査が行われた（以下1988～1991年調査）場所のもっとも南側に隣接するものである。1988～1991年の調査で、弥生時代後半～古墳時代初頭の集落が市之瀬台地奥部の緩傾斜地帯に形成されていたことが確認されており、今回の調査でも弥生時代後半から古墳時代前期にかけての住居址を9軒確認し、台地南側縁辺部の集落の状況を明らかとすることことができた。

### (1) 長田口遺跡出土土器の編年位置付け

今回確認された住居址の多くは、耕作により上部が削平され、また床面までの搅乱を多く受けていることから、遺存状態が不良で時期決定をおこなえる資料が少ない。また、本遺跡の大きな特徴として、編年をおこなう際のメルクマークとなっているS字状口縁台付壺（以下S字）をほとんど伴わないということが挙げられる。これは他の同時期の遺跡と比較しても特異なことであり、編年をおこなう上で大きな障害となる。そこで、県内におけるS字を核とした土器様相の研究成果を基に、外米系土器など他の土器の様相を加味し編年位置付けをおこなうこととしたい。なお、弥生時代の編年は中山誠二氏による編年を、古墳時代の編年は小林健二氏の編年を用いている。

弥生5期併行 2・4・6号住居址出土遺物が該当する。器種はおもに壺、台付壺によって構成され、若干の鉢が伴う。壺は幅広の有段口縁に棒状貼付文を付し、下膨れで腰折れした駿河系の土器が主体となっている。小型壺も下膨れで腰折れした土器が主体をなすが、この他に胴部最大径を中位にもつ球形のものも見られる。壺はいずれも在地系のもので、刻み口縁がほとんどであるが、6号住居址出土の壺のような単純口縁も存在する。口唇部断面は方形を成すものが多く、胴部最大径をほぼ中位に持っている。

弥生6期併行 8号住居址出土遺物が該当する。資料が断片的なため器種構成は不明瞭である。壺の口縁は單純口縁となり球形胴部を持つ。この他に7号住居址に流入した壺も同時期に該当すると思われる。この壺は口縁部に棒状貼付文を、胴部に円形貼付文といった駿河系の特色を持つ土器であるが、胴部上半には櫛描縦文、横線文、波状文、刺突文といった他の地域に見られる施文がなされている。

古墳Ⅱ期併行 1・9号住居址出土遺物が該当する。器種はおもに壺と高环によって構成されている。外米系土器の影響を受けたものが多く、在地系が少ないという特徴をもつ。外米系土器のうち主体は北陸系と尾張系で、駿河系土器は姿を消している。また第76図の4、5など外米系土器の影響を受けて成立した在地の土器が混在している。4の壺は北陸系の影響下で成立したものと思われる独特な形態となっており、また山梨県下でも近年出土例が増加している5の台付壺は「く」の字に屈曲した口縁やタタキに類似した板状工具による粗いハケなど庄内式の焼に似せて作成している。第76図7の高环はいわゆる尾張の元型式のもので、内湾した脚部と大きく広がる壺部を特徴としている。村前東A遺跡IVa区68号住から出土しているものとほぼ同一の形態である。

### (2) 外来系土器について

從来より全国各地で土器の移動が問題とされ、特に弥生時代後期における「東海系土器」の動きが早くから注目されるようになり、また、発掘による資料数の増加に伴い北陸系土器の移動にも目が向けられるようになってきた。

近年、山梨県下においても外米系土器の資料数が増加し、東海系土器とともに北陸系土器の様相も把握されるようになってきている。このような状況の中、本遺跡からも多量の外米系土器を得ることができた。今回は外米系土器の中でも北陸系、東海系の土器に絞って若干の考察を加えたい。

北陸系土器 古墳Ⅱ期に併行する土器で、器種としては壺がほとんどで、若干の壺と鉢が伴う。1・9号住居

址から出土し、また遺構外資料として調査区南東区からまとまって出土している。搬入品は確認されなかった。注目されるのは、いわゆる月影式の甕のようにはほとんど形状が本産地のものと酷似するものがある一方で、在地土器の形状の一部（おもに口縁部）あるいは調整技法に北陸系の要素が混ざるものも見られることである。これは尾張系土器には見られない様相の一つである。

尾張系土器 北陸系と同じく古墳II期に併行する土器で、器種としては壺、高环、甕がある。9号住居址から出土し、また遺構外資料として調査区南東区から2点出土している。9号住居址から出土したパレス式の甕は1988~1991年調査でも確認されており、ほぼ同時期のものと考えられる。遺構外から出土した内面にヘラ状工具により平行沈線と弧文によって構成される文様が施されている高环は、尾張の元屋敷式に類似を求めることができる。この高环は近年確認例が増加しており、石川県松任市倉部山戸遺跡や千葉県小田部墳丘墓を初めとして各地から報告がある。山梨県内では村前東A遺跡、櫻田遺跡から出土している。また遺構外よりS字甕の肩部が出土しているが、胎土、器壁の厚みより模倣して製作されたものと考えられる。他の遺跡に比べS字土器の出土量が極端に少ない本遺跡におけるS字甕の受容状態などを知る上で重要な資料の一つといえよう。

今回確認された土器のうち搬入されたものではなく、すべて在地で作成されたと考えられるが、北陸系土器のあり方とは異なり、在地土器に尾張系の文様などを一部取り入れるような例は見られない。

#### 引用参考文献

- 大村直ほか 1991 「千葉県」「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第Ⅲ分冊」
- 小林健二 1993 「山梨県域の土器様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 小林健二 1995 「山梨県出土の北陸系土器」「山梨県考古学論集Ⅳ」山梨県考古学協会
- 小林健二 1998 「甲斐における古式土器の成立」「寺修考古学」第7号
- 清水 博ほか 1998 「櫻田B遺跡」南都町教育委員会
- 岡根孝夫ほか 1985 「六科丘遺跡」横川町教育委員会他
- 高野玄明ほか 1995 「櫻田遺跡」山梨県教育委員会
- 橋木英道 1991 「石川県（加賀・能登地域）の土器編年と東海系土器」「東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器 第Ⅰ分冊」
- 中山誠二 1993 「甲斐弥生土器編年の現状と課題」「研究紀要9」山梨県考古学博物館他
- 保坂和博ほか 1993 「長田口遺跡」山梨県教育委員会
- 保坂康夫 1993 「平野遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会
- 三山村美彦 1997 「村前東A遺跡発報4」山梨県教育委員会
- 宮本哲郎ほか 1983 「金沢市西念・南新保道路」金沢市教育委員会
- 米田明満 1991 「獅子之前遺跡発掘調査報告書」山梨県教育委員会

## 写真図版



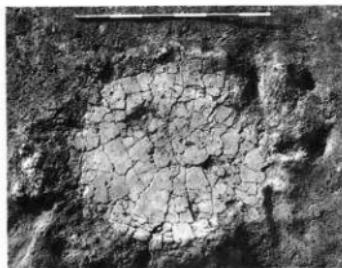


調査区全景

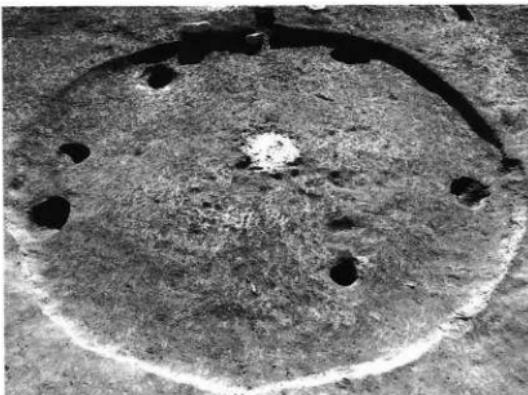


調査区より富士山を望む

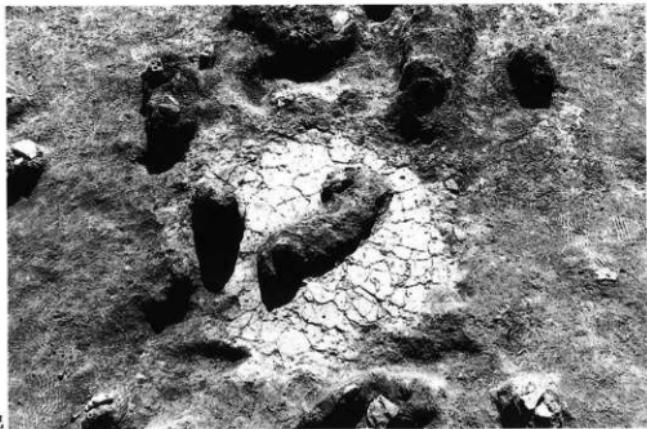
(1) 1号住居址



(2) 1号住居址炉



(3) 1号住居址炉出土状况



(4) 1号住居址遗物出土状况



(5) 1号住居址

图版 4



(1) 2号住居址遗物出土状况（全景）



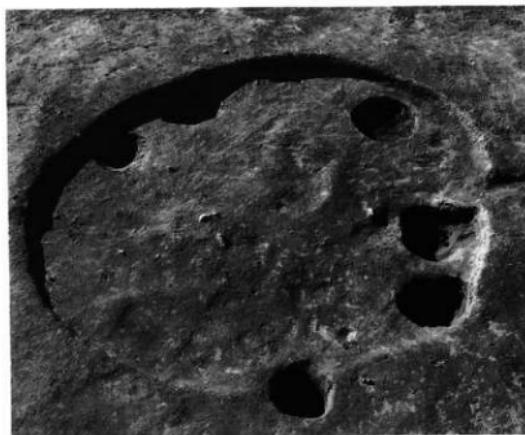
(2) 2号住居址遗物出土状况（部分）



(3) 2号住居址



(4) 2号住居址遗物出土状况（部分）



(1) 3号住居址



(3) 4号住居址炉遺物出土状況



(2) 4号住居址



(5) 4号住居址遺物出土状況(部分)

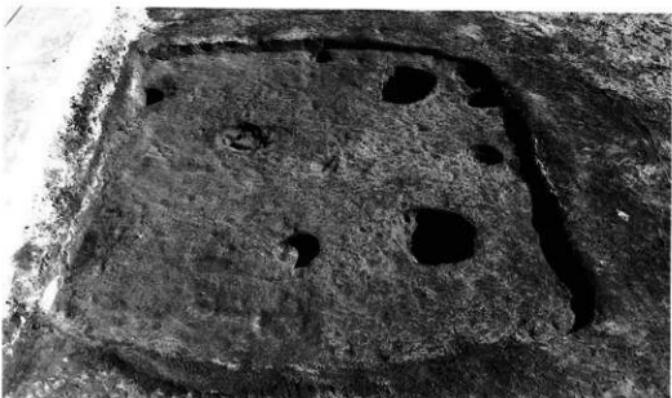


(4) 4号住居址遺物出土状況

图版 6



(1) 5号住居址



(2) 6号住居址



(3) 6号住居址炉



(1) 7号住居址



(3) 8号住居址遺物  
出土状況(部分)



(4) 8号住居址遺物  
出土状況(部分)



(2) 8号住居址



(1) 9号住居址



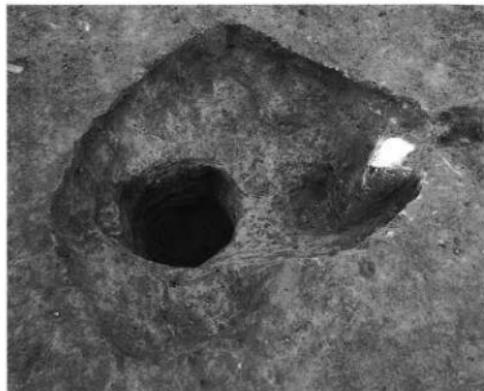
(2) 9号住居址遗物出土状况（全景）



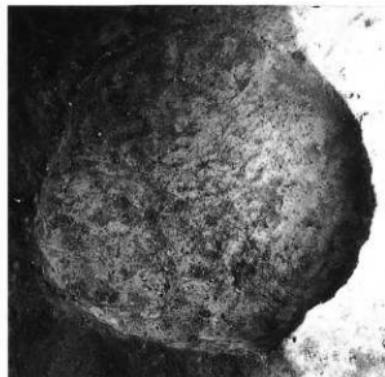
(3) 9号住居址遗物出土状况（部分）



(4) 9号住居址遗物出土状况（部分）



(1) 1号土坑



(2) 2号土坑



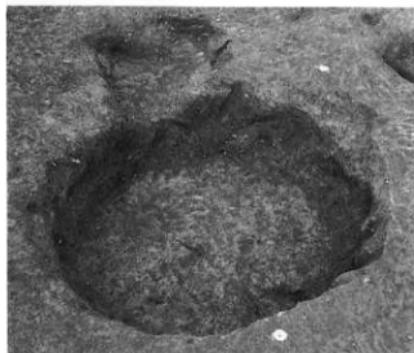
(3) 3号土坑



(4) 4号土坑



(5) 5号土坑



(6) 6号·7号土坑

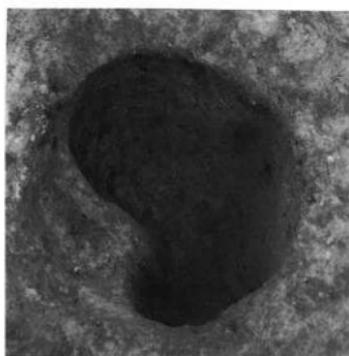
図版10



(1) 7号土坑遺物出土状況(部分)



(2) 7号土坑遺物出土状況(全景)



(3) 9号土坑



(5) 29号土坑遺物出土状況



(4) 21号土坑



(6) 12号・27号・30号土坑遺物出土状況



(1) 2号集石



(2) 2号集石（東より）



(3) 2号集石（部分）



(1) 溝状遺構（東より）



(3) 3号集石（東より）



(2) 溝状遺構（西より）



(4) 3号集石（西より）





(1) 石皿・石棒出土状況 (B 5・C 5 区)



(2) 石棒出土状況 (B 5・C 5 区)



(4) 深鉢形土器出土状況 (C 3 区)



(3) 深鉢形土器出土状況 (3号集石)



(5) 1号埋没土器出土状況



(6) 黒曜石の原石 (A 2 区)



(7) 黒曜石の原石出土状況 (A 2 区)



B-3区出土

B-4区出土



B-5区出土



C-3区出土



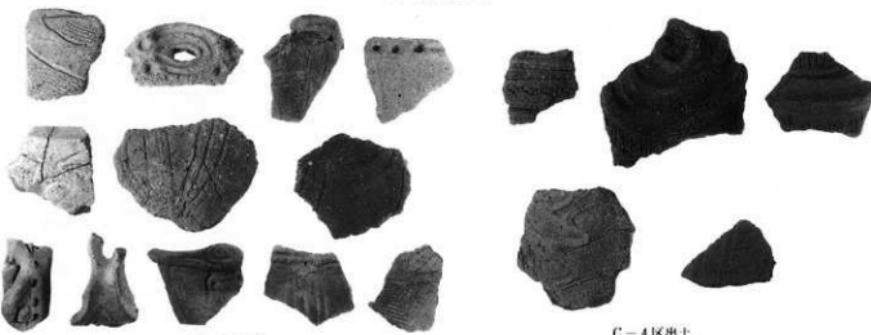
C-3区出土



C-3区出土



C-3区出土(1)



C-4区出土

C-4区出土



C-3区出土(2)



C-4区出土(9)

黒色土グリッド出土土器(2) (縄文)



3集石出土・縄文中期



試掘出土



3号集石出土(縄文後期)



遺構外出土



B-4区出土



遺構外出土(蓋)

黒色土グリット集石群出土土器(縄文)



7号土坑出土



1号埋設土器

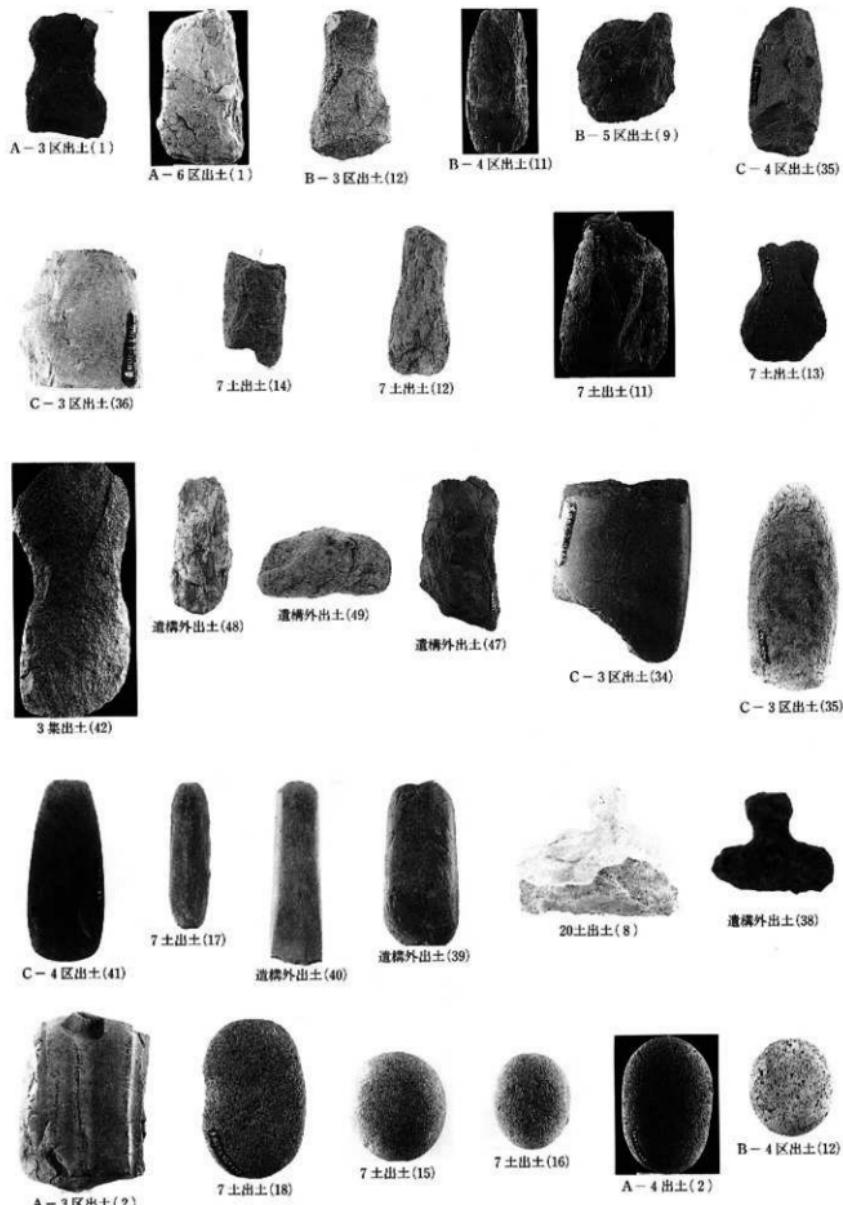
20号土坑出土



C-4区出土土製品

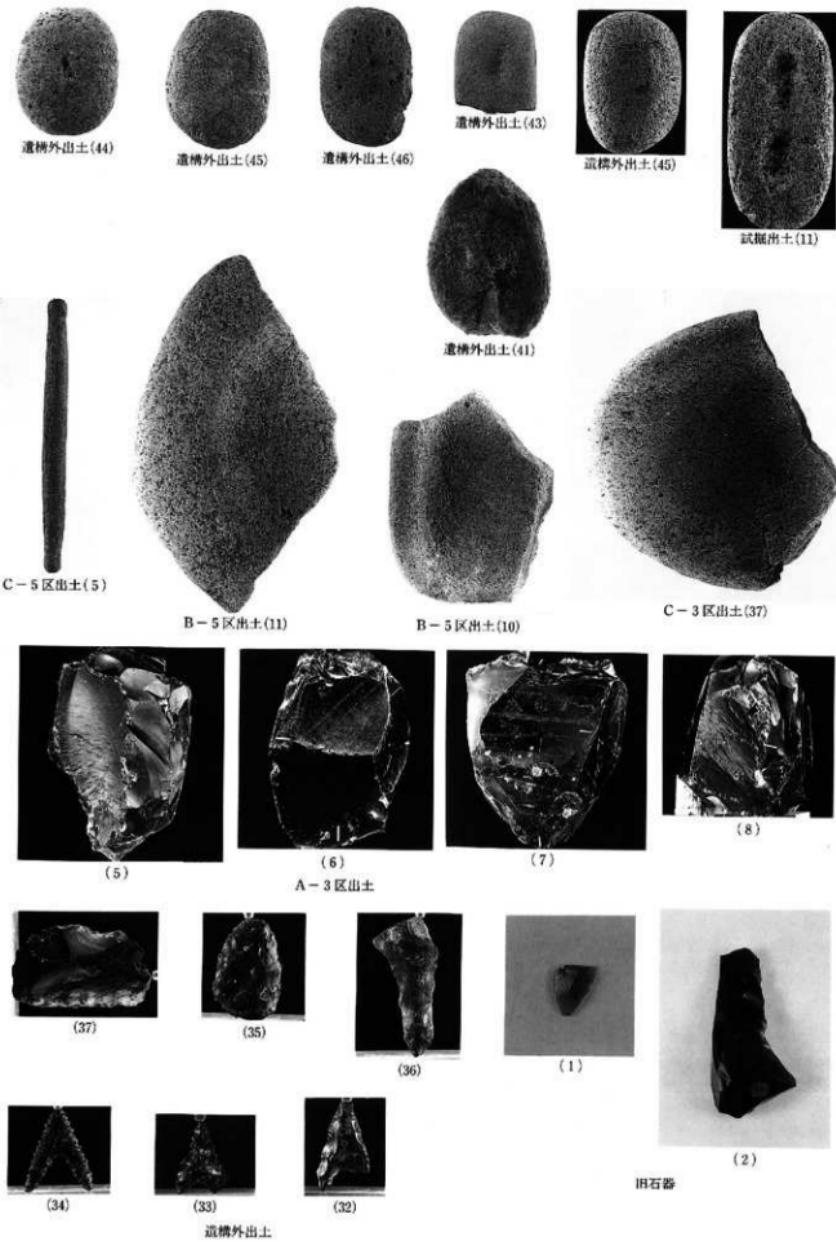
試掘トレンチ出土土製品

土坑出土土器・土製品（縄文）

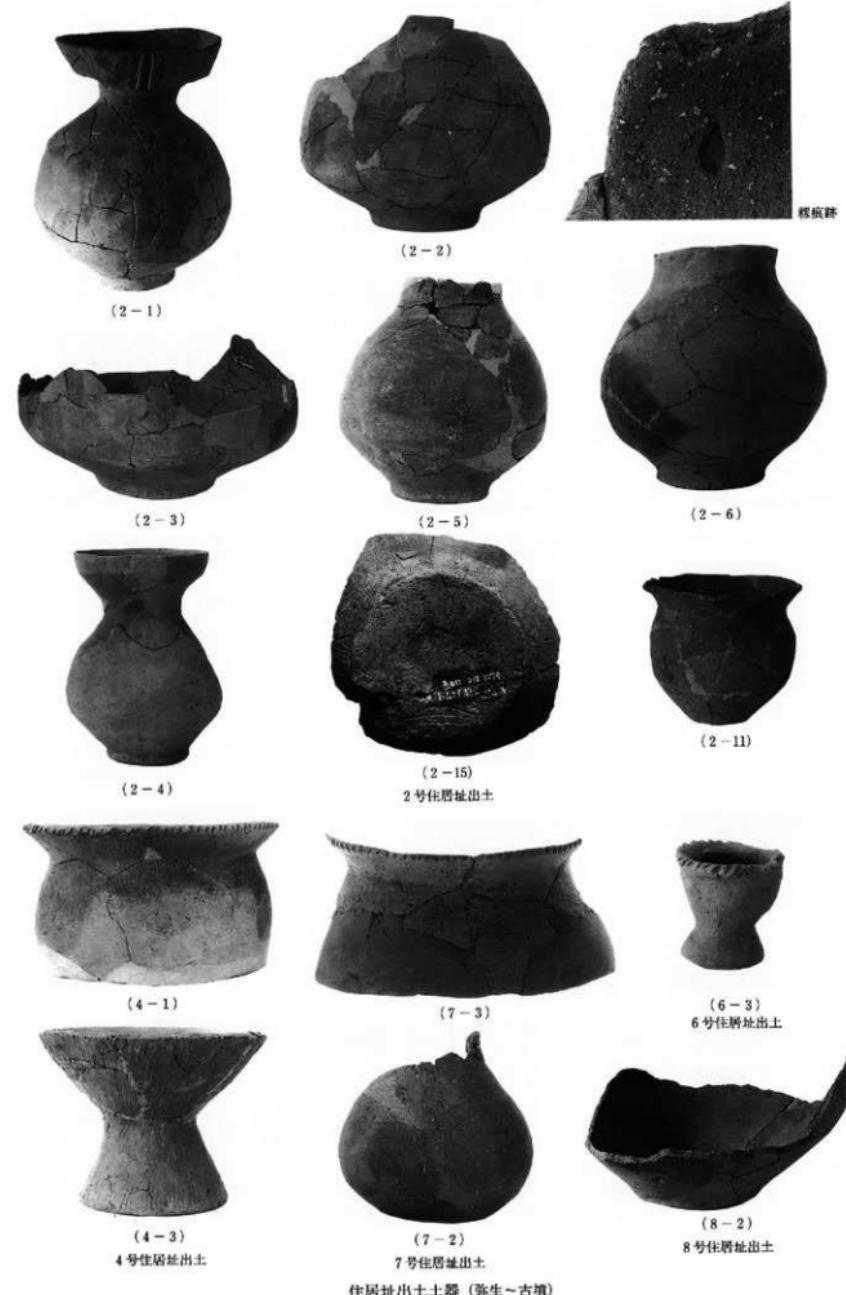


石器（打製石斧・磨製石斧・石匙・凹石）

図版20



石器（凹石・石棒・石皿・黒曜石・原石・石匙・スクレイバー・石錐・石鏃・旧石器）





住居址·遗構外出土土器 (弥生~古墳)



調査区作業風景



1号住居址炉取り上げ作業風景



体験発掘作業風景



完成した『ほたるみ館』

## 長田口遺跡報告書抄録

フ リ ガ ナ	オサダグチイセキ
書 名	長田口遺跡
副 題	県営中山間地域農村活性化総合整備事業 「巨摩の郷地区櫛形活性化施設」建設に伴う発掘調査報告書
シリ一ズ	櫛形町文化財調査報告 No.18
編著者名	山下大輔、若林初美、小口妙子
発行者	櫛形町教育委員会・岐中土地改良事務所
編集機関	櫛形町教育委員会
住所・電話番号	山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1 Tel (055) 282-0108
印刷所	鬼灯書籍株式会社 長野市柳原2133-5 Tel (026) 244-0235
発行日	2000年3月31日
遺跡所在地	山梨県中巨摩郡櫛形町平岡字中畑1122-1他
1/25000地図名・位置	小笠原・北緯35°36'20" 東経138°36"
主要な時代	縄文時代 弥生時代 古墳時代
主な遺構	住居址（弥生・古墳）、土坑（縄文ほか）、埋設土器（縄文）、集石遺構（縄文ほか）、溝状遺構（時期不明）、焼土溜まり（縄文ほか）
主な遺物	旧石器、縄文土器、石器、土製円盤、土偶、弥生土器
調査期間	1998年10月26日～1999年2月5日
コ一卜	市町村 193909 遺跡 168
調査面積	1589m <sup>2</sup>
調査原因	県営中山間地域農村活性化総合整備事業 「巨摩の郷地区櫛形活性化施設」建設に伴う発掘調査

舞形町文化財調査報告書 No.18

## 長田口遺跡

—— 県営中山間地域農村活性化総合整備事業  
「丘摩の舞地区舞形活性化施設」建設に伴う発掘調査報告書 ——

平成12年3月8日 印刷

平成12年3月14日 発行

発行 舞形町教育委員会  
岐阜中土地改良事務所

編集 舞形町教育委員会  
山梨県中山巨摩郡舞形町小笠原397-1  
☎ (055) 282-0108

印刷 ほおづき書籍株式会社  
長野県長野市柳原2133-5  
☎ (026) 244-0235㈹

